むなかた電子博物館 紀要

第３号　目次

巻 頭 言 9

座談会：社会教育施設としての水族館
－マリンワールド海の中道館長 高田浩二博士を囲んで－.....10

九州ウェブサイト大賞 10

博物館法改正 11

ミュージアムの役割とPDA・iPod 13

マスから個別対応へ.....15

博物館の姿勢 17

動物園・水族館の社会評価 20

「むなかた電子博物館」のエコ・エコロジー.....21

教育機関としての博物館・水族館・動物園.....22

専門家とボランティア.....24

公開ウェブサイトと非公開ウェブサイト 25

ICT活用による博物館の進化.....28

1. 視聴覚機器からＩＣＴへの「進化」 28

2.博物館の新しい定義（博物館から博情館へ） 29

3.博物館法改正における博物館資料の解釈拡大.....30

4.博物館の情報化にできること.....30

5.学校教育、社会教育の情報化と博物館.....31

6.博物館教育における情報化.....31

7.私と情報機器の出会いと歩み.....32

8.海の中道海洋生態科学館の具体的取り組み 33

8-1.テレビ電話回線を活用した遠隔授業.....33

8-2.Ｗｅｂ教材の開発 34
8-3.ＣＤ－ＲＯＭ教材の開発.....35
8-4.携帯型情報端末を活用した学習実践.....36
8-5.博物館における情報化の未来と課題.....38

漂着物の四十年（玄界漂着譚）1968年－2010年 40

1.花綵列島 40
2.流れ寄るもの.....40
3.海岸を歩く 41
4.渚の百科事典.....41
5.漂着物との四十年 41
5-1.1970年（昭和45年） 42
5-2.1965年（昭和40年） 42
5-3.1973年（昭和48年） 43
5-4.1974年（昭和49年） 43
5-5.1988年（昭和63年） 44
5-6.1991年（平成3年） 45
5-7.1996年（平成8年） 46
5-8.1998年（平成10年） 47
5-9.1998年（平成10年） 48
5-10.2001年（平成13年）.....49
6.漂着植物の変化.....50

城郭から見た宗像の戦国時代
－大宮司宗像氏貞の時代を中心として－.....54

1.中世の城郭.....54

1-1.私達がもっている城郭のイメージ.....54
1-2.中世戦国期の城郭とは.....54
1-3.城郭の探し方.....55
1-4.縄張（平面図）調査とは（地表面観察による現地調査）.....55
1-4-1.縄張り調査の方法について　56
1-4-2　縄張り調査から何がわかるか　56
1-5.城郭の各施設の部位名称について.....56
2.宗像郡の地理的状況と宗像氏について.....58
2-1.宗像郡の地理的状況.....58
2-1-1.筑前国の立地と様相　58
2-1-2.関門地域と博多の中間に位置する交通の要衝　59
2-1-3.海岸線に富み多くの島や浦を有している　59
2-2.宗像氏について.....59
2-3.宗像氏貞について.....60
2-3-1.宗像地方の領主としての最後の大宮司　60
2-3-2.その勢力範囲　60
3.宗像氏の城郭.....60
3-1.宗像宮（辺津宮）を囲む諸城と宗像氏代々の居城片脇城.....60
3-1-1.田島　60
3-1-2.片脇城とともに辺津宮を囲む三つの城　62
3-1-2-1.北　吉田城（十郎ヶ城）　宗像市吉田　62
3-1-2-2.東　大障子城（津瀬城）　宗像市多礼　62

3-1-2-3.勝浦岳城　福津市勝浦 63

3-1-3.片脇城の遺構について 63

3-1-4.宗像氏の代々の居城としての片脇城 64

3-1-5　片脇城と小金原合戦 66

3-1-6.唐傍氏の勝村岳在番について 67

3-2　宗像氏貞が当初拠点とした白山城.....69

3-2-1.白山城のある山田と宗像氏 69

3-2-2.白山城の構造 70

3-2-3.黒川鍋寿丸（宗像氏貞）は、なぜ当初、白山城を拠点としたのか？71

3-3　大友氏との講和を有利にした当国（筑前国）無双の城「岳山城」...72

3-3-1.交通の要衝赤間 72

3-3-2.岳山城の規模と構造 72

3-3-3.瓦、鉄滓等の出土物の意味するもの 74

3-3-4.氏貞が城山（蔦が岳）を本城に選定した理由 74

3-3-5.永禄十二年の立花陣と岳山城 75

3-3-6.城下並びに周辺の諸城砦番所 77

3-3-7.岳山城の城下について、氏貞の館はどこにあったか？ 77

3-3-8.三郎丸土塁 78

3-4.西部防衛の最重要拠点許斐岳城.....79

3-4-1.博多往還(唐津街道)に沿って並ぶ諸城 79

3-4-2.許斐岳城の規模と構造 79

3-4-3.歴史 81

3-4-4.許斐岳城における横矢掛りと氏貞死去後の宗像　83

3-4-5.許斐岳城に関する文書　84

3-4-6.里城について　85

3-4-6-1.許斐里城　85

3-4-6-2.吉原里城　87

3-4-7.許斐岳城には、どのような家臣が配置されていたのであろうか？　89

3-5.大友勢力との接触点「飯盛城」.....89

3-6.大島城を初めとする浦と島の城.....90

3-6-1.宗像水軍と海上ネットワークを形成する諸城　90

3-6-2.乱世の避難場所としての大島、地島（泊島）　91

3-6-3.宗像水軍の最後の活動（秀吉の九州統一戦のため薩摩へ向った宗像水軍）　92

3-6-4.詰めの城としての大島　92

3-6-5.領民数千人を大島、地島へ避難させる宗像水軍の輸送力　93

3-6-6.その他の諸城　93

3-6-6-1.大島城（城腰）　93

3-6-6-2.地島城（城腰）　93

3-6-6-3.勝島城（城の辻）　94

3-6-6-4.草崎城　94

3-7.大内氏による宗像郡の直轄領化と赤間庄にある名残城.....96

3-8.拡大した領域（鞍手郡と遠賀郡）支配に苦慮する氏貞と城郭.....97

3-8-1.若宮庄の拠点宮永城　97

3-8-2.遠賀庄にある手野（三吉）城　99
3-8-3.宗像氏の御牧（遠賀）、鞍手郡における領主権力の限界　100
４.まとめ.....102
4-1.宗像氏の本城の変遷と岳山城.....102
4-2.城郭配置から見とれるもの.....102
4-2-1.陸路を押える　102
4-2-2.水路や農業生産基盤の水利権を押える　102
4-2-3.海上交通の押え（宗像水軍を支援する海の城砦群）　103
4-2-4.宗像宮（辺津宮）を防衛する四城郭　103
4-2-5.氏貞の拠点赤間を防衛する城砦群　103
4-2-6.許斐岳城を中心として、宗像氏の対立花防衛ラインを形成する諸城　103
4-3.岳山城を中心にほぼ南北にならぶ諸城と戦国期の情報伝達.....103
4-4.畝状竪堀を設置する城.....105
4-5.城郭の存在意義、落城した記録がある城郭は意外に少ない.....107
５.最後に.....109

北斗水くみ研究 －北斗ダイアルをつくろう―.....111
1.準備するもの.....111
2.作り方.....111
3.使い方.....112

むなかたの弥生時代の人々のくらし（2）～石包丁をつくろう～.....115
1.はじめに.....115
2.むなかたの弥生時代.....115
3.石包丁をつくる.....117

3-1.弥生時代の石器.....117
3-2.石包丁をつくろう 117

「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展」を終えて.....123
1.開催にあたって.....123
2.開催概要 123
3.内容.....123
4.開催の広報と関連イベント 125
5.むなかた電子博物館との連携.....125
6.来場者数とアンケート調査の結果.....126
7.評価.....126
8.課題.....127
9.まとめ 127

宗像市郷土文化学習交流施設の概要
博物館建設に向けての市の動き.....129
はじめに 129
1.施設の経緯.....130
2.海人とは 130
2-1.海人の定義　130
2-2.海人シンポジウムの開催　131
3.海人文化村構想.....131
4.宗像遺産 132
5.郷土文化学習交流施設 133
5-1.市民との連携と協働による活動　133
5-2.地域学芸員の養成　133
5-3.むなかた電子博物館との連携　134
5-4.展示の内容　134

6.まとめ 134

旧宗像市民俗資料館について 137

１．はじめに.....137

２．宗像市民俗資料館の自然的環境.....137

３．鐘崎海女について 138

４．民俗資料館の運営.....138

６．宗像市における今後の民俗資料の保管収集.....143

７．まとめ.....143

付図　『旧宗像市民俗資料館について』　平松秋子 145

「むなかた電子博物館」の評価と課題.....149

1.はじめに 149

2.九州ウェブサイト大賞と「むなかた電子博物館」.....149

3.事業仕分けと「むなかた電子博物館」 149

4.「むなかた電子博物館」の現状と課題.....150

4-1.認知度が低い.....150

4-2.双方向性の確保.....150

4-3.展示更新時間の短縮 151

5.「むなかた電子博物館」の今後 151

6.2010年度（平成22年度）活動記録.....151

7.「むなかた電子博物館」市民パートナー.....152

編 集 後 記 154

「むなかた電子博物館」事務局の許可なく商用利用を禁ず

２０１１年４月１日
「むなかた電子博物館」紀要委員会

巻 頭 言

「むなかた電子博物館」紀要委員長　平井正則

電子博物館の将来を仰ぎ見る資料にと発行された「むなかた電子博物館紀要」も第3号を編むことができました。趣旨に賛同頂き意欲的な記事を投稿された著者、スタッフを囲んで楽しい議論を頂いた先生方、資料収集や時間を割いてのボランティア・スタッフの努力の賜物と思っています。

2010年度（平成22年度）には宗像市の事業仕分けも行われ、宗像市によるこの活動の財政的な視点からの評価や議論も行われました。

創刊号、2号、3号は、“講師を囲んで”にあるように、建物など、物（もの）をもたない博物館をどうやって構築するかに軸足を置いて、考え、活動してきました。

「むなかた電子博物館」とは宗像市を中心とする自然環境と人々の歴史とそこに生活する人々の営みそのものを含む博物館でありたい。宗像を中心とする自然と歴史をガラス越しでなく、来館者が博物館の指針に沿って直接、現地に訪れて、ある季節に実際に海岸に行って眺め、体験する。来館者の入館から退館の間に、自在な説明や資料が「むなかた電子博物館」によって提供され、次の興味に取り組める。

スタッフ会議の議論では「むなかた電子事博物館」は“ホームページ”ではないという意見を何度も聞きました。

残念ながら、陳列物（宗像の遺跡など）を掘ってみる（！）、触ってみる（！）ことはできませんし、動画を含む3D映像や構造図や分解図を展示（？）できるまでには至っていません。また、たとえば、「北斗の水くみ」を来館者が写真におさめる時のちょっとしたノウハウを直接博物館に問う対話形式のシステムもまだ十分ではありません。

市民の関心をもとにしたイベントの組織、宗像の歴史に触れる活動の議論はありますが、取りかかりは不十分です。子供たちが宗像の自然や歴史を学ぶ具体的な活動を容易に行う事業も、まだ、まだ、遠くにあります。

こうして、「むなかた電子博物館」が宗像中心の自然と歴史の生きた博物館となる全体像は完成していません。

今後、すでに我々が認知する博物館像を超えて宗像の空間と時間を生きた陳列物とする新しい博物館像が市民との対話の中で完成することを熱望しています。

座談会：社会教育施設としての水族館
－マリンワールド海の中道館長 高田浩二博士を囲んで－

出席者
高田浩二館長
平井正則、伊津信之介、平松秋子、清水比呂之、森田誓夫、上田めぐみ、（「むなかた電子博物館」紀要委員、スタッフ）

12月15日（水）紀要委員　平井・伊津・平松・堀内・清水・森田・上田はマリンワールド海の中道館長高田浩二博士を囲んで、『水族館という博物館』をテーマとした座談会を行うため、マリンワールド海の中道を訪れました。

伊津：本日は、クリスマス前の一番お忙しい時に、開館時間というのもお構い無しに、伺いまして申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。まず高田館長、簡単に自己紹介をお願いします。

高田：マリンワールド海の中道の館長の高田と申します。
マリンワールドができて、すでに22年経過し、23年目を迎えるというところです。もっと前をたどると、私は、大分のうみたまご「マリンパレス」に12年勤務しておりまして、その後、マリンワールドが1990年（平成元年）にオープンするということで、その前年から福岡にきて、マリンワールドの基本構想から始まり、基本設計、それから施工管理ということで、本当にゼロからマリンワールドをつくる仕事をしてまいりました。
専門は、大学のころは魚類学だったんですけれども、この水族館にやってきて、水族館をゼロから造る、いわゆるミュージアムをゼロから造ることに関わってきて、建築のことから、ミュージアムを作ること、それからミュージアムをひとつの組織として作っていくことで、生物の飼育に限らず、人の育成、組織の育成ということに取り組んでまいりました。水族館での仕事は足掛け35年で、マリンワールド海の中道でも20数年がたち、館長職はまる7年を過ぎて8年目になります。

九州ウェブサイト大賞

伊津： まず最初に、実はむなかた電子博物館は、今年、九州ウェブサイト大賞に応募して、優秀賞をとったことで、周りからの評価も多少いただけたのではと思っておりますが、聞くところによりますと、こちらも2008年には九州ウェブサイト大賞で、テレコムセンター特別賞をとられていて、その時の報道の資料を見ますと、普通の営業に比べると、特色があることが評価されていますが、高田さんとしては意識されていますか？

高田：　九州情報通信連絡協議会に加わり、九州内での高速通信網の整備などに関わってきました。テレコムセンターや総務省と一緒に「KIAI」というプロジェクトを推進し、そのなかで情報関係を活発にやられているところについて、表彰しようという話をしていた当事者が賞を受けることになってしまって、いいのかなと思ったんですけれども、 ウェブ大賞が始まって2年目に受賞しました。

当館では、まだインターネットの「イ」の字ができ始めた1996年（平成6年）ごろすでにウェブサイトを立ち上げていました。その頃からウェブとは何かということを考えていった中で、これは学校教育に使えるんだ、社会教育に使えるんだという視点で最初から取り組んできました。営業情報に限らず、教育的な活用。特に、2000年に入ってから、学校教育の現場で情報教育が非常に盛んになってきて、学校に高速の通信回線が整備されたり、パソコンが整備されたりして、学校の教育現場でもインターネットを介したような授業に活用できる情報が、必要となる時代がやってくると予測していました。

それに向けて水族館というのは社会教育施設ですので、ウェブ上にも教育利用できる情報をおくことを目指してきました。大きな2本柱があるということで、それが実はトップページのデザイン、カブトガニの絵のすぐ下に、リンクのボタンが「All About Marine World」と「Education　Research」の二つしかないということが、非常に大きな特徴として評価されたんじゃないかなと思っています。

水族館のすべてのコンテンツと教育研究が同列で、入り口が二つしかない。ひとつは一般的なウェブの入り口だけどひとつは教育と研究なんだと。この大きな位置付けに、マリンワールドがウェブ上のコンテンツを教育利用するということで、発想、方向性がまずは評価されたんじゃないかなと思っています。

博物館法改正

伊津：　教育という言葉がさかんにお話の中で出てきましたけれども、ウェブを教育に使うという点で、特に博物館のような団体・組織が使う上で、2007年に博物館法が改正になったことは大きな影響があるのでしょうか。

高田：　博物館法改正は、およそ半世紀ぶりって言いますか。ご存知の方もおられるかもしれませんが、昭和26年に博物館法が施行されていまして、当時施行された法律の中では実物資料イコール博物館という解釈でした。博物館というのは、学術的に貴重な資料を集めて、保管して、展示して、そのことを皆さんに知ってもらうという機能があると一般には思われていたからです。

博物館の資料というのはほとんど実物資料、いわゆる出土したものとか、どこかで捕獲されたものとか、実物が資料であって、実物を補完する映像とか音声とか、いわゆるインターネット上の情報だとかこういったものは、二次資料と表現されてきて、博物館法の中で、本物が一次でそれを補完するのが二次資料といわれて、順位付けがされてきた。

補完される資料も実は一次資料になりうる、デジタル資料も一次資料としてとらえるべきだということで、50年目の博物館法を改正するときに、ここのところを強く主張したんです

よね。博物館の資料をデジタル化することは現場でも要望されていたんだけれども、法律の中で二次資料扱いなので、あまり大きなマンパワーも予算も時間もさけない状況だった。それが博物館資料だと認められることによって、予算もつけられる、人材もつけられる、組織も作れるということに変えることができる。

博物館法の法令改正の中のひとつのポイントとして、博物館資料の解釈を、デジタル資料、法令用語では電磁的資料っていう風に書かれていますけれども、実際には『デジタル資料を博物館資料とします』という一文を入れてもらった。これは大きな改正というか、博物館のデジタル化ということに大きな弾みになったんじゃないかな。

伊津：　むなかた電子博物館がオープンした当初は、二次資料の電子的な博物館が、博物館といえるかとか、それだけのお金をかけるのであれば、生の展示をしろとかいう主張が、時々聞こえたんですけれども、博物館法改正の中で電子的な電子博物館がある程度認められたということは、今後のむなかた電子博物館にとってかなりいいことであると思います。

高田：　博物館法の改正については、今回の法令改正がかなり大きな法令改正だったんですけれども、その前にもちょこちょこと法令改正があっていて、20年前に行われた法令改正では、数字設定が撤廃されたんですね。博物館としての機能や役割が果たせる施設であれば博物館として認める、登録しましょうということになった。最低限学芸員が1人はいるんですけれども、あと数字的なクリアするものとしては、年間150日以上あけなさい。いわゆる2日に1回あければいいわけで、施設の規模だとか、収蔵物の多さとか、全職員の数だとかそういった制限はなくなりましたので、より機能重視した博物館であれば、博物館として認めていきましょうと。

ここで電子資料も博物館資料だと法令で書かれたことっていうのは、デジタルミュージアムを構築していきたいという人にとっては、非常に朗報で、いい法令改正になってきたんじゃないかなと思います。

伊津：　デジタルの展示は、2002年以降、急速に、量的にも、質的にも増えていますよね。ちょっと話を変えますけれども、先ほどからウェブを使う、ＩＣＴを効果的に使うお話がありますけれども、私も東海大学の海洋学部の出身で、水産学を勉強したんですが、生物を扱うということは、電子的な取り組みとなかなかなじまないように思いますが、高田さんとしてはどうお考えですか？

高田：　マリンワールドが、なぜ情報化に目をつけたかというと、ひとつは水族館にお越しになる方は年間に70万人くらいしかいないんです。福岡県内には500万人の方が住まれています。九州島内には1000万人が住んでいるといわれます。たかだか水族館にきて実物を見れる方っていうのは、ほんのわずかしかない。九州島内にしてもですね。

そうなれば水族館のまわりにいる人の方がはるかに多い。そういう方々に、生の情報とか、実物だけでは見れない情報を届けるためには、ある程度デジタル化して、インターネットの普及によって瞬時に、劣化することなく、大勢の人に効果的に伝えることができる世界

が広まってきた。

この社会環境といいますか、情報環境は水族館・博物館に使わない手はない。何も来館されたお客様だけが、実物を見て理解するというだけではなく、外にいる方に積極的に発信していく仕組みが必要だろうということで情報化に目を向けていきました。

ミュージアムの役割とPDA・iPod

伊津： 今お話を伺いながら、頭をよぎったのが、「百聞は一見にしかず」という言葉。何か展示されているものを見ても、必ずそこは空間があって、目で見て、耳で聞いているとすると、情報を閲覧している。そこに実物があってもすべて情報だとすると、電子的なものと実際のものとは違わないように思うんですよね。高田さんは、離れている方にでも情報で伝えられることが十分あるということですが、水族館、動物園もそうかもしれないですけど、人に伝えるうえで、水族館というものの一番重要な要素はどこなんでしょうか。

高田： 基本的に水族館に限らず、広くミュージアムの役割は、展示されているもの、収集しているものの情報を発信することにあると思っています。

一番の役割は。収集されているものは、人の言葉がしゃべれないわけです。物の代わりになって、その物のすごさとか、歴史とかを伝えるのは、博物館の宿命・役割なんですよね。そうすることによって、私は物に礼が尽くせると思っているんです。

特に、私たち水族館とか動物園は、命をもっているものを預かっています。命を持っているものが死んでしまったら、水族館、動物園の展示物はなくなってしまう。あとは、剥製とかで残ることもあると思います。命を持っている生物たちに、どうすれば礼が尽くせるかなと思った時に、きっちり、彼らの持っている情報を、水族館・博物館を利用される方に伝えてあげること、それが私たちの一番の使命じゃないかな。そういう面で情報発信をすることが、すごい大事だと思っているんです。そこにミュージアムの社会的使命があるし、生物たちへの礼が尽くせることで、初めてこういう機能が果たせると思います。

教育・研究のトップページ

伊津：ウェブ大賞でも紹介されたようなウェブサイトというのが、情報発信のひとつの大きな窓口になっていますが、この水族館で、それ以外の遠隔の人たち、子どもたちに対するアプローチとして、ICT、情報通信をどんな風に使っていますか。

高田： まず、ウェブを作ることからスタートしていったのです。次に取り組んだのが、テレビ電話による遠隔授業なんです。平成9年に、ＮＴＴさんがＩＳＤＮという回線を作って、その普及を始めました。ISDN回線の良いところは、テレビ電話ができるというところで、使い方として、一般家庭同士で結ぶのは、あまりにも一般的すぎる。

社会教育施設と学校、社会教育施設と社会教育施設とかお互い、学びの場所として、画像と音声をやり取りすれば、ＩＳＤＮ回線のテレビ電話の機能が、よりいっそう拡大していくんじゃないかということで、平成9年に公募があったんですよね。文科省の事業として、テレビ電話を教育に使わないかと。その2年前の平成7年に、私どもの水族館を増築オープンした際、水中ビデオカメラで水の生物をライブ中継するアトラクションをオープンさせてたんです。平成7年にオープンしたときに、この水中映像と音声は、最初はテレビ局が欲しがるはずだと思っていたんですよね。テレビ局が生中継で全国に、水の中からダイバーが、色々なサメとかの生物をスタジオと結んで生中継できるということを、その当時から考えて設備設計をしていた。

その2年後にテレビ電話による遠隔授業をしないかという話が出た時に、すぐにそれが応用できると思ったんですよね。テレビ局に出すのか、テレビ電話にだすかだけの違いですから。それで初めて平成9年に、全国の小学校に、離れたところに、うちのダイバーが生でサメとかウツボとかの生物の情報を。

双方向ですから、子どもたちが画面に向かってしゃべると、こっちにも伝わってくる。双方向のやり方が始まっていったのが平成9年。それから遠隔授業をたくさんやっていって、1年間に70件80件の数をこなしていき、授業の時に、色々な写真を子どもたちに見て欲しいから、どんどんコンテンツが増えていくんですね。

そうしていくうちに、総務省や文科省から、小型携帯型の情報端末を使った構築をしてくれないかといわれて、これはＰＤＡといわれるものですが、平成14年に経済産業省と総務省と文科省の３者からお金をもらって、PDAが使えるようになった。

伊津： PDAっていうと、日本ではあんまりなじみがない。Palm（パーム）とか。ああいったものですよね。

高田： 先進事例があって、PDAを入れた博物館とかの話を聞くと、ほとんど、首からぶら下げて音声を聞くだけのガイドマシンとして使われていまして、実際、ＰＤＡの持つ機能の半分以下も使われていなかったんですね。私は、ガイドマシンとしてＰＤＡを使いたくないと思っていたので、学校教育で使えるようにということで、館内にＷｉＦｉで無線LANに入れる機能を持ってましたから、館内にサーバをおいて、サーバの中に、今まで蓄積してきた写真とかテキストデータをおいて、子どもたちが無線LAN経由でPDAを操作して、生物を観察しながら、欲しい情報を学校に持ち帰れるという仕組み。学校に持ち帰って、そのデータでマリンワールド取材新聞というのができるという仕組みを作って、そこから今度は、携帯情報端末にシフトしていく。

実はＰＤＡが日本ではやらなかったので、その次のインフラを待っていたんですけど、その次に出てきたのが、皆さんご存知の携帯電話。皆さん【携帯】というと、教育にすごく煙

たがられていて、子どもに携帯電話を持たせるなんてという声が多いが、私は携帯電話を携帯電話だと思っていなくて、小型コンピュータだと思っている。キーボードがあって液晶画面があって、子どもたちが自分のポケットに、常にコンピュータを持ち歩くなんて、アトムの時代、夢の時代と同じ時代になってきたんだと思ってるんですね。

携帯電話だと思わずに、小型のコンピュータだと思えば、そのコンピュータを駆使しながら、これが教材や文具になるのではないかということで、【携帯】を使って、うちの館内の無線ＬＡＮ経由で、同じようにコンテンツを【携帯】の中に読み込めて、そのときにはミクシィなどのソーシャルネットワーク（ＳＮＳ）が隆盛していたころだったので、【携帯】で得た情報をミクシィのようなソーシャルネットワーク（SNS）のWeb上でアップロードして、そこで交流できるサイトを作ろうとやったのが次の段階。【携帯】もそういいながら、なかなか教育の現場では保護者の抵抗が強く、普及しなかった。

次に出てきたのはiPod Touch。iPod Touchが初めて出てきた時には、iPhoneと同じアプリで、タッチでスライドして。あれがセンセーショナルだったので、学校も子どもも保護者も一発で飛びついてこられた。今使っているのは、iPod Touchで、館内で子どもたちが同じように情報収集ができるようにしてる。iPod　Touchで一番使い方を工夫したのは、子どもたちがコンテンツを作るようにしたんですね。自分が伝えたい動物、私イルカ好き、サメ好きといったら、イルカが好きな子はイルカのコンテンツを作る。サメが好きな子はサメのコンテンツを作る。iPodの画面上に表示して、お客様に見せながら、子どもがお客様と交流する。

私はiPodで全部の情報のやり取りが完結すると実は思っていなくて、この小さい画面でどれだけのことが出来るかと思ったときに、あの画面がお客さんと子どもをくっつける接着剤になると思ったんです。子ども、それから自分の見たいものを見せたいために、お客さんの目線に立って近づく。それによって交流するきっかけになる。

ICT、ITの道具って、それを使いこなすというよりも、それを使いこなすことによって、人と人のコミュニケーションがどう変わるかということの道具だと思っているので、iPod Touchを使うことによって、iPod Touchを使いこなせる力をつければいいというわけじゃなくて、自分が得た情報を人に伝えたいかとか、人に伝えるために、自分がどういう風に工夫したらいいかということを考える力をつけられること。それがイコール情報力というか、情報教育の目指すところでもある。そういう使い方が出来ればいいなということで。大きな流れとしてウェブ（Web）があり、テレビ電話の遠隔授業があり、それから情報端末がありというのが大きな流れです。

マスから個別対応へ

伊津： iPod　Touch以降、各社スマートフォンという携帯電話で、よりコンピュータに近づいたプラットフォームを躍起になって開発していますけれども、これからの１,２年の間にかなり成熟してくるとすると、そういうものを対象にして、今まで以上のものっていうのは、何か可能性はあるでしょうか。

高田： 今までマスに対応したコンテンツ制作とか、いわゆる学校って言ったら、マスなので、何十人何百人単位できますよね。何十人何百人と来られた子どもに情報をだす、情報提供するかということが、学校相手だとそうだったんですけれども、これからは、もっと個に対応した情報提供の仕組みも持っておかなければならないと思うんです。つまり、十人十色ではありませんけれども、お客様が十人おられたら、十人のお客様の興味関心が違うんですね。それなのに水族館の一つの水槽の解説情報は、一種類しかない、限られた情報しか出てこないので、「私はこの水槽でもっと違うことを知りたいのにな」と思う方がおられる。Bさんは「私はこれを知りたい」Cさんは「これを知りたい」。

十人いたら十人の人が欲しいと思う情報に、全部対応できるようにする仕組みづくり。例えば、皆さん【携帯】を持っていれば、自分の【携帯】をかざせば、自分の欲しいキーワードで情報がとれるとか、そこまで、個に対応した情報発信。それから、ご存知のとおりICTの「C」はコミュニケーションの「C」なので、情報を取るだけでなく、さらに二次利用できたり、水族館や水族館を利用した人とのコミュニケーションに、さらに役立って発展していくということが、これから目指したいところで、そういう仕組みを作っていきたいなと思っています。

伊津： むなかた電子博物館って、ずっと、マスで提供していて、いかにたくさんの人にアクセスしてもらうかって意識がかなり強かったと思うんですね。今、高田さんから、全体に見せようとする姿勢のある水族館も「個」を意識していると伺い、電子博物館はかなり「個」を指向しなければならないと思うんですけれども、何か皆さん、博物館の関係者として、高田さんに対して、「個」にこだわらず聞きたいことはありますか。

平井： いっぱいあるんだけど、ひとつは、情報伝達に対する評価ですね。館として、年に1回アンケートをとるとか。評価すべき効果はどうやって取り出すのかっていうことについてのコメントをいただきたいと思います。

高田： 特に学校教育と一緒にやっていると、必ず評価の分は、学校の先生にプログラム化していただいて、子どもたちにアンケートをとるとかですね。どれだけの活動が出来たか、例えば、何人と子どもは交流できたかとか、お客さんからどういうコメントをもらえたかとか、子どもの変化をずっと、ポートフォリオという言葉をご存知だと思うんですけれども、学習を始めてからの履歴を取りながら、どれだけの発言力が、ボキャブラリーがどう増えていったのか、前はこれだけの発言しか出来なかったのが、これだけできるようになったとか、そういうことが先生の一番の得意分野なわけです。我々はなかなかそこまでは追っていけないので、それができる方と手を組んでですね、評価が上手に出来る方と一緒にやりながら、共同研究として我々がやったプログラムとか教材が、どれだけ有効に働いているかということを見ていくという形で評価しているという状況です。いわゆるパイロット授業的な形でやってきたので、評価ははずせないと思うんですよね。そういう部分は評価のプロといいますか、分かっている方にお願いする場合が多いです。

平井： いわゆる双方向性ですね。こういうことを情報提供する、受けた側は、もっとこういうことが知りたいというやり取りの中に、ある人がこういう質問をしました。そこの情報については、こっちの部分を出しましょうだけでなくてね、動物の将来を考えたり、それに関わる歴史とか、そういう風な対話が、色々なレベルで起こるじゃないですか。どうやって整理するか、たとえば、この辺の動物なり生物たちのレベルは保存しようとか。もう一歩進んで非常に関心のある方のポストは、こういうところにボックスをつくろうとかね。全体のダイアログが進める世界というのかな。館として提供できる情報の質というのを整理するようなことはどういう風にやっているんですか。

高田： インフラの発達、それから、端末の発達があまりにも早くてですね。正直言ってその辺が追いついていないというのがうちの課題だと思います。その辺を整理して、ある程度システマティックに階層構造的にとか、そういう出し方をしたり、整理をしていく必要はあると思うんですけど、回りが速い。次々に新しい機材が出たり、通信インフラが出たり、端末が出たりしていくと、それに追いついていくのがやっとって言いますか。前は私どもから積極的にあれやりたいこれやりたいと言ってたんですけれども、最近は、これ使ってくれあれ使ってくれということで、外からのオファーが多くなってきている。そういったときに、我々が先生がおっしゃられたような部分が、正直追いついていないっていうのが課題ではありますね。だから、周りのインフラのスピードに振り回されずに、いったん整理してみる必要があるということは、正直感じています。
「個」に対応した情報発信をしようというのは、それのきっかけになればと思ってまして、今まではマスを相手にしていたところを、いったん「個」にするとなると、もっとその人にどういう興味関心があるかいうことを、洗いなおして整理してと、それをきっかけにできればと思っています。

博物館の姿勢

平井： 兆しは結構集まっていますよ。宗像でもいろんな古い資料があったりするんだけど、どうやって整理するかという問題についてはね。我々も素人だから、整理する階層をやっぱり提供しないと、リーダーシップが取れないというかね。いろんなものに振り回されちゃうとしょうがないと思うんですよね。そこに博物館自身の姿勢っていうのをね、踏み込むことが我々にとっての仕事なのかなって。

高田： 博物館自身の姿勢をつらぬくことも、ひとつ大切なんですけれども、たとえば、国の教育行政が動いていきますよね。助成金をもらったりとか、委託金をもらったりするときに、最新の国の行政とリンクしてないともらいにくい。文科省は、経済産業省はとか、総務省が次は何を狙ってるかっていうのを頭にめぐらせて、今度あそこの省庁はこういう事業を出すんだったら、それに合うようにカスタマイズしようということで、資金どうするかってことが、一番ご苦労されているところだと思うので、ある面、擦り寄るところも持ちながらですね、上手に資金活用をするためにも、館の姿勢は一本貫きながらも、常に新しいものは

入れざるをえないのかなと。

清水：　ちょうど宗像市も、平成２４年4月に郷土文化学習施設をオープンする予定にしているんですよ。ただ、こういう経済的な事情の中で、新しい博物館を作るのが難しくて、既成の館の中をリニューアルすることによって、博物館的機能をそこにつけ加えていこうということで、今整理をしているんですけれども、そこの中で、展示ということと、子どもたちを対象とした教育的な一面ということで、体験学習的な教室が設けられるようなスペースを考えておりまして、先生が言われているマスに対応するような仕組みは考えていかなくちゃいかないなということがあります。
あと、デバイスも強いて個に対応するっていうやり方と、やはり先ほどちょっとでましたが、百聞は一見にしかずということで、実際に現地に来ていただいて、そこの中で、説明者を通して、解説をしながらやって行くやり方も考えてはいるんですけれども、そういうなかで、私も非常に「個」に対応した情報提供という意味で、携帯端末であるとか、あるいはスマートフォンあたりを使ったやり方っていうことを考えていかなくちゃいけないだろうって考えています。その中で、ひとつの館の運営と共に、もうひとつ史跡を整備しているんですよ。これは３万平米というさほど大きくない史跡、面積なんですけれども、そこに弥生時代の墳墓であるとか、住居跡とかが出てきて、そういう意味では、資料的な価値っていうのは高いんですけれども、それを当時の家屋を復元するとかいったスタイルだけだと、メンテナンスの問題だとか色々出てきますので、それをこういうＩＴ的な技術を使って、何かうまい工夫が出来ないかなってことを今ちょっと考えているんですね。そこに例えば、ＧＰＳとか、位置情報を加えて、そこで、携帯でもって情報を見れるとか、もっと進んで言えば、３Ｄ的な仕掛けが出来ないかとかいうことをちょっといろいろ考えていかなくちゃいけないと考えているんですが、今この流れの中で、何かちょっとその辺のアドバイスをお願いできればと思うんですが。

高田：　学校教育で使う場合は、常に求められるのは、何の教科でとか、どこの単元でとか、何時間この授業を受けるのにかかるかとか、それは、常に学校の先生から問われるところですよね。それは、モデルとして作っておいて、例えば、全体でこの学習をするには、この社会科の、ここの単元のところで１０時間くらいください。その10時間の中で、ここはフィールドに出ましょう、ここは館に来てください、ここの部分はＩＣＴを使いましょうということ。
　例えば、事前学習ではＩＣＴをつかって、本時で来館して、帰るときにフィールドに行って、帰ってからＩＣＴ、ＩＴでまとめて、みんなで情報共有しましょうとか。そういった両方のいいところを上手にちりばめるというか、組み合わせるといったプログラム例を作ってあげるといいのかなと思うんですよね。そうすると、学校の先生の作業量がすごく楽になる。
　それを先生に全部自分で作ってくださいって言うと、先生忙しいからそんなことまで出来ない。ただ、博物館にデジタル情報ありますよって言っても、自分の授業でどこでどのように活用していいか分からない先生もおられたり、苦手な先生もおられる。それを博物館側か

ら何パターンか授業の活用事例を、ここのところは事前学習に使えますよ。ここは現地で行って、やってきたときもこういう仕組みを使えば役立ちますよ。

学校に帰って子どもたちがまとめる時にも、例えば館のＷＥＢを使ってやりましょうとか、活動した時に得た情報が、例えば携帯などを使って得た情報がＷｅｂに張り付いているのであれば、まとめ学習の時にここでもう一度使いましょうとか、そういった学習モデルをいくつか組み合わせて、実物と情報の上手な組み合わせをした、授業パターンをいくつかつくってご提案されておくと、先生はぱっと飛びついて、お使いになられると思うんです。

そこまで、博物館、ミュージアム側がつくって用意してあげるといいのかなと思うんです。

伊津：　今、そういう風に博物館側とか教員側とか、子どもたちの「個」とかいうような、ある面でいうと、上から目線の教育というのが、日本の教育が始まってからずっとそういう感じできてましたけど、ここへきて新しいＩＣＴを使うことによって、そのスタンスがかなり変わってきているから、教育する側としても非常に戸惑いがあるように思うんです。特に個にたいしてやるというのは、理想的にはいいんだけれども、私なんか、授業中にいかに発言しないで、いかに黙って聞いてるかという姿勢しかもっていない人たちに、いかに「個」の発言をさせるかというところで苦労した。思いついたのが、フォーラム、いわゆる日本でも昔からやっている掲示板にテーマを与えて、そのフォーラムに書き込みをする、結構コンピュータで入力するのは、やる人が多いので、そうすると同じ時間帯にどれだけ学習のアクティビティがあるかっていうことは分かるわけだから、とにかく発言しなければダメだという風にしていくことは、結構、有効だなって思ったんです。ですから、やっぱりいかに学校で上から教えれば、それで教育が成り立つというステレオタイプみたいなものから抜けていくのが必要で、先ほどのポートフォリオという、そんなに日本では古く一般的にはなっていない概念だと思うけれども、高田さんは、教育工学会でも結構活躍されていて、教育分野での新しい試みというのは、何かお感じになっていらっしゃいますか。

高田：　そうですね、伊津先生がおっしゃられたように、常に学会のようなところにでてないと、今、何が求められていて、どう動いていってるかという情報が入ってこないので、出来るだけいま皆さんが求めているものを、アンテナ張って取り組めるようにはしたいなとは思っています。幸いなことに、学校はマスでいろんな先生がいろんな情報教育の取り組みをされてるんですけれども、博物館側は少ないんですよね。これだけデジタルに力を入れているところは少ないので、まだ、今からやればある程度ポジションをキープできるっていいますか。ですから、このわれわれが培ってきた座を譲らないためにも常に新しいもの・新しい考え方・新しいやり方とかを考えながら、ちょっと自分で言うのもおこがましいんですけれども、なんか情報教育の駆け込み寺的な役割が果たせれば、学校の先生からこれどうやって使うんだろうとか、授業の中で、別に水族館利用だけでなくてですね、学校の一般的な授業でつかう時にどう利用しようかっていうときにこちらから提案することが出来るぐらいまでの力にはなっていると思うんですよね。実際、うちのiPod Touchは今、うちの館にはなくてですね。よその学校に貸し出して、1年間使っていいですよ、授業にということで、貸し出

しています。それを使った授業支援にいつ行きますよということをしてます。広い意味で博物館の専門性だけが伝える場所ではなくて、情報発信するというのも博物館のテーマのひとつとして、とらえていけばいいのかなと思っていますね。

動物園・水族館の社会評価

伊津： 高田さんは水族館の館長の割には社会教育ないし、子どもの教育に対して、強い意気込みを感じるんですけれども、北九州に到津（いとうづ）の森公園、かつて到津遊園といった施設を、ウェブとか記録とかを見ると教育を遊園地がやっていること自体がとても大きな力になって、園が閉じた後も北九州市の公園になったようなことを聞いているんですけども、高田さんが博物館でありながら教育のところに力を注がれていることというのは、どんなきっかけがあったのですか。

高田： 水族館の歴史、動物園の歴史をさかのぼると、決して今のような社会評価があったわけではない時代も、ちょっと悲しい時代があって、いわゆるレジャー施設レクレーション施設だけの評価とか、動物園・水族館で働く人自身も仕事の内容的には、掃除して餌をやるだけとか、そういった現業職的な社会評価だった時代もあるんですよね。私はその時代があまりにも長かったので、一部の方々はミュージアムという高い意識を持たれてる方がおられているので、動物園・水族館をミュージアムという風に思われている方もいるんですけれども、一般の方の認識っていうのは、まだまだレジャー施設でありレクレーション施設の機能の方が優先しているわけです。

それは変えていかなればいけない。変わらないといけない。動物園・水族館自身も変わらないといけない。動物園・水族館自身が変わらないと一般の人の認識は変わらないわけです。日本の動物園・水族館の歴史は、すでに120年もあって、特にこういう風にレジャー的要素に突入してきたのは、戦後６５年の後半期にそうなってきて、今、現代生きている方々ほとんど、動物園・水族館はレクレーション施設、レジャー施設という認識の中で育ってこられた。それを変えていくには、動物園・水族館が、もっと活動の内容とか外に対する発信も変えていってですね、教育施設でもあるし、種の保存ということも求められたり、どうぶつ福祉ということも求められたりしていますので、確実に動物園や博物館に求められている社会的な使命役割、それは日本だけじゃなく、世界的にも変わってきているということですね。それを現場が変えていかないと、周りの方の意識も変わっていかないということで、努めてそういうことにも努力をするようにはしています。

伊津： たしかに、こちらのマリンワールドしかり、到津がそうだし、北海道の旭山動物園。それぞれが社会教育や教育という骨を十分持っていると、人がたくさん来るようにしたことが教育効果が非常に高くなり、その波及効果がましていくということになりますよね

高田： 経済論理から考えると、これだけ経済が冷え込んでくるとみなさんレクレーション費を一番最初に抑えるわけですよね。そうなると、われわれが、レジャー費を抑えられる

と、一気にお客さんが減ってしまうということではやっぱり困る。経営的にも困る。ある程度、教育的に子どもの学びになるんだと自分自身の学びになるんだというもうひとつの商品といいますか、持っていればですね、やっぱり自分の子供の学びのために連れて行きたい。これだけ経済冷え込んでもちゃんと子どもの学びのために習い事に行かせたりしてる方はですね、そこの費用は削らずに続けたい。そういう視点からも、教育という武器って言いますかね。商品は、求められたらすぐに提供できるとか、常にそこにあるという具体的な要請にもすぐに答えられるようにしておけばいいと思います。

「むなかた電子博物館」のエコ・エコロジー

伊津： 今の話はなかなか有効だなと思います。実は、エコ・エコロジーっていう言葉がありますよね。エコロジー、環境は経済的に成り立たなければ、その環境保護は進められないというのが盛んにこのごろ言われるようになってきていて、博物館・水族館っていうのが、役割として、二つの柱を持つっていうのは、とても有効だと思います。

　ちょっと話を変えてしまうと「むなかた電子博物館」も、今は宗像市がやっている公共的なものなんですけれども、そこにある程度の自己資金も確保して、新しい活動を出来るようなことっていうのも重要かもしれない。そうすれば、新しいシステムや新しい環境を入れていくことで、もうちょっと対象を広げていくことが出来ますよね。

高田： 市とか町とか行政、県とか、行政がミュージアムをやられることが多いですよね。そういうと、公共施設っていう認識が強くて、平たく言うと金儲けはしにくい。ただ私は、教育の役割は大きいっていう言葉から持っていくと、例えば、学研とかベネッセさんとか教育で生業にしている企業ってたくさんありますよね。学習塾もしかりですけれども、大学も広い意味で教育を生業にしているわけですから、そうすればミュージアムもですね、教育で生業にしてもいいんじゃないかと思うんです。私はよく対外的に博物館って教育産業だと言っています。教育って受けられる方が、そこで本物のものが提供されて、自分の学びや自分の力になったり、自分の生きる力になったり、将来の望みになったりできれば、ここに来てよかった、これだけ入館料を払って良かった、このプログラムを買って良かったとか体験して良かったということであれば、それなりの等価の応分の費用はいただいてもいいのではないかと私は思うんです。それがお客さんのハッピーにもなるし、ミュージアムのハッピーにもなって、それで、経済的にも回っていけばいいので、公立だからたとえばすごく入館料は安い必要は私はないと思うんです。応分の入館料はしっかりいただく。その代わりいただいた以上のサービスだとかは提供してですね、博物館をひとつの教育産業にしていくぐらいの気持ちが必要ではないかなと思います。

平井： 水族館ってことではないんですけれども、社会教育の拠点として博物館とか学校教育と違うことはウェハースではないんですよ。輪切りで教えてないわけですよ。色々な世代が自分の歴史を背負いながらひとつの動物なり物の前で語り合うというそういうレジャーであってもいいと思うんですけれども、非常に大きな教育の力ではないかと。当然彼らには、

将来が約束されていく。その状況を提供することが、公共の科学館なり博物館の重要な役割のひとつじゃないかと思うんですよ。そこを忘れてね、ある時はお金に走るかもしれないし、ある時には非常にＩＴの進んだ中で、そちらばっかりにいってですね。せっかくの幸せが、そんなのはどうでもいいんだということになっては困る。「むなかた電子博物館」も私の理解としては、家庭に持ち込んだ色々な世代の物を、情報を自由に提供していく。そうすると当然最終的にはどこに行くんだって話があって、一番最初に話したように、館の理念だとかね、それぞれの独特のパーソナリティによって自分たちがひとつの提案をしていく、いろんな世代の集合に対してしていくことになっているんじゃないかと、構造がね。そういう点は、忘れないで展開すべきでないかと思いますけれどもね。それは私の意見ですけれども。

教育機関としての博物館・水族館・動物園

伊津： 今話を伺っていて、学校っていうのはある面で言うと二次資料で教育するしか出来ない場ですよね。そうすると博物館やこういう水族館・動物園っていうのは、一次資料もそこにありながら教育が出来るとすると、教育の系列が自由な時代になってくると、非常に魅力的な場所に変わりつつあるんじゃないかと思いますが、今後高田さんのところではそんなところを含めて、どんな風に変えようとしているんでしょうか。変わっていくんでしょうか。

高田： 情報と実物の融合って言いますかね。先ほど言ったように上手に情報の利点を積み上げして、お客様のニーズに合った物の提供とか、情報の提供とか人材の提供とかが出来る館でなくてはならない。それと、冒頭に触れたようにうちの館は、館においでいただけるお客様だけを位置付けにしているわけではなく、館の外にいる方にも積極的に色々な形ででていきたい。それがめぐりめぐって入館者増になればいいわけで、行くことで何人増えたという評価は難しいんですけれども、広い意味で社会教育になっていくんでしょうし、口コミにもなるんでしょうし。もっと、地域に根ざした。オールジャパンである必要はないんですよね。少なくても東区とかそれから福岡市とか福岡県とか、そういう自分の立地が、手の届く範囲をもっとしっかり抑えていけるようなミュージアムでないといけないかな。

平井： 教育関係に、予算のことも含めると、マスじゃないけど教育関係にアプローチしていく方が、今の組織としてはやりやすいのかな。モデルとして。そういうわけでもない？

高田： ひとつの社会責任、教育という機能の社会責任を果たすために、ちゃんとやってるという実績を表に示す必要ももちろんある。

平井： 東区とかいくと、組織がないから、提供する時にある種、非常に個的であったりしないのか。

高田： 中では老人会とか子ども会とか公民館とかの単位がありますので、何も学校教育だ

けじゃないし、今、国の教育行政っていうのは、公の新しい公共ということで、学校と社会と、企業と大学と。地域が新しくネットワークを作って広い意味で生涯学習のためにネットワークを作りましょうという新しい仕組みの時代といいますが、いわゆる、逆に言いますと、学校教育だけでは教育は破綻しているっていうわけで、地域全体で国民を育む時代にしていきましょうということになってきていますから、地域の方々と上手に機能・役割をすみ分けていって、マリンワールドさんはここの部分を押さえてください。図書館はこれだけします。公民館はこれだけします。大学はここ、企業はここということで、それがみんな集まることによって、大きな輪になっていくというか、上手な役割分担が進んでいけばいいかな。

伊津： 「脱学校の社会」（イリイチ）で、かつて地域が教育の役割を担っていた。それがどんどんそれぞれの職業にとって代わって地域が教育の役割がなくなっていってしまったと書いています。ところが、今高田さんの話を聞くと、イリイチと違うにしても、地域の教育の重要性というのが、かなり強調されていたように思うんですけれども、その辺はいかがでしょうか。

高田： 地域に住んでいる方、全てがやっぱりいろんな方に影響を与えることが出来る人材だと思うんですよね。家の前で野菜を売っているおじちゃんだとか、酒屋の兄ちゃんだとか、それぞれ色々な方すべて自分が培ってきた人生・経験があって、人に語れるものがあるとおもうんですよね。地域の力を組織だってまとめていけるような、役割を果たせる場とか、仕組み、仕掛けがあるといいかなっておもいますけどね。そこまではちょっと水族館は踏み込めないかもしれないですけれども。

伊津：「むなかた電子博物館」なんかある面でいうと、「天上の上の人」みたいで地と接点がないんですけれども、今色々な試みをやっていて、「北斗の水くみの写真展」で、実際に観察会をしたり、まだ実施に至っていないんですけれど、地域の特徴的な植物とか鳥とか動物を見る会とかを、もう少し具体的にしていくと、博物館、電子のものが近づくのかなと思っています。

高田： 私は、わりと水族館のほうが縄張りが狭くてですね。歴史系の博物館の方が総合博物館じゃないかなって思うんですよ。つまり、歴史っていうのは今まで積み重なってきたものですから、全ての人の仕事の集大成だと思うんですよ。いろんな漁業をしてた人、農業をしていた人、武士をしていた人、色々な仕事をたくさんしてきた人の積み重ねの歴史があって、ひとつの歴史博物館としてあるんですから、全てのジャンルを取り込める場ではないかな、歴史博物館は。何をやってもオーケーなんじゃないかなと私は思うんですけれども。

伊津： その歴史に今がありますよね。それが、現在も全て歴史になっていくとすると、今の電子的ないろんな取り組みというのも、やっぱり博物館としては取り入れる必要がある、そういうことがオーケーだという高田さんの指摘はなかなか心強いです。

清水：今、地域という話が出てきたなかで、いまからのその博物館の運営っていうか、鍵と考えているのが、地域学芸員をお願いして、そういう人たちに働いていける場を提供していきたいなという風に考えているんですけれども、それぞれやはり得意の分野とか、市民の皆さん方色々もっていらっしゃると思うので、そういう人たちが、活躍できる場を博物館の運営なり、地域での説明とかいうようなところで、活躍できる場を、何とかうまく仕組みとして作っていきたいなと思っておりまして、来年度はそういう実践的な講座みたいなやつを開催しながらオープンに合わせて、進めていこうかなって考えているんですけれども。

高田： それは正規の職員さんで導入されるんですか。

専門家とボランティア

清水：　ということではなくボランティア的な位置付けということなんですけれども、それと、もうひとつお尋ねしたかったんですけれども、水族館に訪れるお客さんっていうのが、だいたい客層でいうとお子さんであったり、どうなんですかね。高齢者の方が多いとか

高田：　絶対数はやっぱり成人の方が多いですね。子どもさんの遠足や修学旅行でも来ますけれども、絶対数の2割くらいしかいませんので、ほとんど成人の方のカップル、もしくは団体が多いですね。

清水：　水族館の中でのボランティア的役割を担っている人たちっていうのはかなりいらっしゃるんですか。

高田：　うちは実は学習交流課っていう教育普及する課があって、多いときで8人。今6人いるんですけれども、学習交流課っていうところが、館内の教育の中枢になるということで、それ以外に、展示部といって、魚類とか動物の飼育・管理・水槽管理などする部門がそこに３５人位いるんですが、展示部の中にも魚類課、海洋動物課、学習交流課と3つあるんですけれども、学習交流課はコーディネーターでしかないんですよね。展示部全員合わせると５０名くらいになるわけですから、50名全員が教育をすればいい。教育施設に勤めているんですから、全員が教育者じゃないと教育施設ってありえないんですよね。あなたは教育、あなたは展示、あなたは何という、同じひとつの館なのに、縦割りになってしまって、教育っていう意識を持たずに展示ばっかり研究ばっかりやる人がいると、それだとやっぱり教育施設とはいえないと思うんです。ミュージアムであり教育施設であるわけですから、全員で教育すればいいと思ってるんですよね。そうすると、うちには50名近い教育のスタッフがいるんですから、ボランティアさんに現状お願いしなくても全員でやれるので、うちは、ボランティア制度はないです。それと、私どもは株式会社で民営ですから。国が作った施設ですけれども、国立民営でやっているんですよね。民営がボランティアやる時は、往々にして人件費削減だとか、人員整理の対象として使われることが多い。私は、そこはぜひとも阻止しな

ければいけないと思っているので、ボランティアさんを入れなくてもわれわれ全員でそこのところはやれるんだという気合をもってやらないと自分たちの雇用を守れない。そういうことを目指しています。

平松：来館者に男女の比はありますか。

高田：　あんまり大きくはないんですけれども、ただ、お客さんの動向を見ていると、女性の方がリーダーシップをとりながら見ているのかな。やっぱりお母さんが行きたい。女性が行きたいというと、男はついていくっていうパターンが多いので、館の行きたいきっかけ作りっていうのは、女性層にあるっていうことが経営戦略的にありますよね。実際行ってみたいわって思うと、彼や旦那さんや家族を連れて行こうと。家の中でもお財布を握っているのは奥様でしょうし、絶対数は男女数は大きくありませんけれども、行ってみたいというきっかけ作りは女性の方が握っているかなという気がします。

公開ウェブサイトと非公開ウェブサイト

伊津： この館の中のウェブって外からみたのと違うのが見えるとか、そういうのがあるんですか。見せられるもので、例えばさっきのiPodを使ったようなものとか、WiFiを使った物とか。概して、外の普通の人のウェブと内部のウェブが違って、入館者だけとか営業上のことは出てこないにしても。

高田：　例えばですね、うちの館だけじゃないんですけれども、これは日本の動物園、水族館の世界に誇るシステムがあって、動物園・水族館のウェブ・データベースがあるんですね。これは、全国の１６０ほどの動物園・水族館が加入しているんですけれども、ここに会議室があったり、その月の入館者数、トピックス、館の職員の名簿とか、共通の話題の会議とか掲示板とかそういうＷｅｂ上のデータベースが、業界内で動いています。

　全部ペーパーレスの時代で、何かの会議があるとか、何かの研究会があるときに全部ウェブ上でダウンロードして自分でプリントアウトして持っていく。業界内では郵便物はほとんど使いません。いついつどこでどんな会議がありますとか、会議室もいろんな会議室が開いていまして、会議室を開くと、感染症、鳥インフルとか口蹄疫とか出たときに感染症対策室の獣医さんたちが集まって情報交換する部屋とか、ゾウとかサイとかレッサーパンダとか、どうぶつの種類ごとに会議室を開いてそこで情報共有するとかですね。日本中の動物園・水族館の職員が全ての事項で情報共有できる場がウェブ上にあるということは、非常に珍しくて、よそでは例がありません。獣医さんの治療の臨床データだとか、持っている文献をここで登録するとかですね。そうすることで全員で情報を共有できてやるという仕組みもウェブ上にあります。こういったものもひとつの例としてあります。

　それから、これはうちのiPodをやったときのウェブサイトで、「キュレーターの玉手箱」というんですが、授業に参加した学校の子どもたちが、自分のコンテンツをこの「キュレーターの玉手箱」に作ります。例えば、志賀島小学校の子どもたちは、こういうコンテンツを

作って、例えば珍しいカニとか。こういう情報を自分でＷｅｂ上に作って、この画面をｉｐｏｄで見せるんですね。ここの写真と解説版をiPodに出しながら見せる。こういう風に、データを作ると一覧にそれぞれ、一番左が子どものＩＤとパスワード(PW)になっていて、自分のＩＤ／ＰＷで入って、まずこの表からＩＰｏｄで画面を見せていって、お客さんに自分の伝えたい情報や写真を見せる。

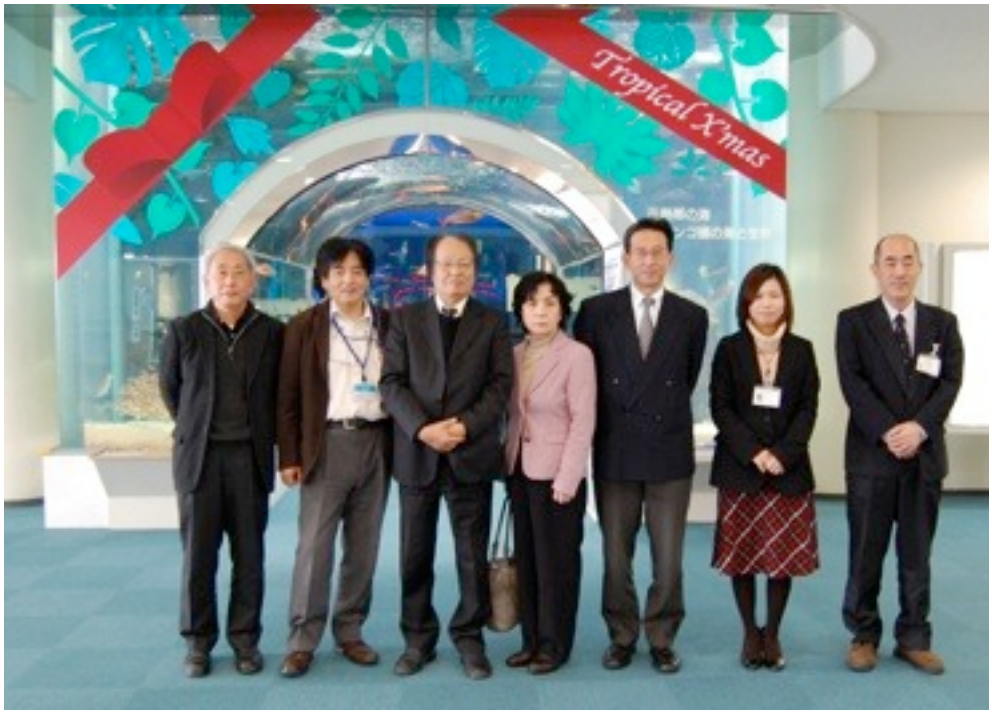
伊津： これは使えるんじゃないですか。そのまま。

高田： それから、これは『博物館の図鑑』っていうウェブサイトなんですけれども、これはマリンワールドが高校の建築科とデザイン科の生徒を対象につくった、博物館建築デザインのウェブ上のデータベースです。最初私たちが自分たちで足で歩いて３００館くらいまわって集めました。いまここには自分で登録できる仕組み、博物館登録というのがあります。自分の働いている博物館、自分の好きな博物館、自分が今日見に行った博物館っていうのを、この図鑑に自分で登録すると自動増殖的にウェブのデータベースにたまっていく仕組みがあります。博物館の図鑑っていうのは、展示のことを知ってもらうＷｅｂでなくて、博物館の建築とデザインを知ってもらうＷｅｂのデータベースなんです。ですから、建物はどういう形ですか、屋根はどういう形ですか、建物の色はどんな色ですかとか、何系の博物館ですかとか、入れる情報もですね、窓の形とかトイレとか階段とかそういったデザイン的な視点で入れてもらうことになっていますね。さすがに福岡が一番あるんですけれども、全文検索ができてですね。ここで、「窓」でソートかけると、調べた水族館・博物館の窓がこういう風にサムネイルで出てきます。これでこの博物館のこの窓なんだろうという風に見ると、この博物館のどういう窓でという説明がでてくるんですね。そういう、自分が登録した写真に説明文の中に「窓」っていう言葉が入っていれば、「窓」のデザインが見えるとか、階段が見えるとかですね、そういったＷｅｂ上のデータベースがあるんですね。こういったものも実際は今動いていて、年にパラパラ登録はしていただいていますね。
あと、福岡の地域で一緒に海岸を歩いて見つけた生物を登録できるサイトも作っています。

平松：それは質問も出来るんですか？

高田： 質問も出来ます。みんなで会話、情報交換も出来ます。「われら海岸調査隊」自分たちで歩いて海岸で見つけたものをどんどん投稿できるようになっていまして、会員になるとそれが投稿できるようになっています。今日海岸でこういうものを見つけたということで投稿すると、見つけた人同士で、これじゃないのなどいつごろのうみにあるよなどが投稿できて、交流できるというサイトです。このプログラムに参加したいという方にＩＤ・パスワードを差し上げて情報共有できるようにしています。

伊津： 今日は貴重な時間を割いていただきありがとうございました。



座談会出席者

左から、伊津、高田（マリンワールド館長）、 平井、平松、清水、上田、森田

（ X’mas展示前で2010年12月15日）

【研究論文】

ICT活用による博物館の進化

高田浩二

1. 視聴覚機器からＩＣＴへの「進化」

その昔、「視聴覚教育」という言葉がよく使われた。これは、読んで字の如く「視覚や聴覚に訴える教具によって行なう教育」と定義され、ラジオ、テープレコーダー、ＯＨＰ、スライド、映画などの機器の使用だけでなく、掛図、標本のほか、演劇や博物館の展示見学さえも視聴覚教育に含まれており（広辞苑）、その解釈は極めて広範囲であった。英会話教育のためのＬＬ教室もこの頃に生まれたものである。

やがて、「視聴覚教育」は「メディア教育」と横文字化もされたが、その後、情報媒体の教育活用に、デジタルで情報処理をするコンピュータという新しい装置と組み合わせ、呼称も「マルチメディア教育」に変化した。こうして、情報（メディア）教育にコンピュータという道具は切り離せなくなった。加えて、情報通信技術の発展でインターネットという文化が生まれ、それらのデジタル情報技術のことを包含して、ＩＴ（Information Technology）と略すようになる。

2000年前後から、ＩＴ技術はハード、ソフト共に急速な発展をみせたが、人々はそれらを個人（パーソナル）として使いこなすことで精一杯となった。ＰＣのＰは正にその意味でもあるが、ＯＳについては人間工学から生まれたＧＵＩ（Graphical User Interface）という、アイコンを直感的に操作すればいいだけの簡易なシステムになった。ところが、中でも「視聴覚教育世代」のアナログ人間にとっては、様々な技術革新があっても、そのスピードの速さに対応できない場合もあり、新しい情報文化の波に乗り換えるのはけっして楽ではなく、ましてやそれを学校教育や社会教育に活用するスキルを磨くのは容易ではなかった。

それらの課題は後述することとして、世界的（ワールドワイド）な情報の波（ウェーブ）は教育や博物館の世界をも巻き込み、中でもわが国の学校教育の現場では、2005年を一つの目標に有機的な活用を目指すことになった。またその後の教育行政「Post2005」での情報戦略の一つに「人と人との交流」が明記されたこともあり、ＩＴはやがて交流（Communication）を意味するＣが挟まり、ＩＣＴと言い換えられた。正に、視聴覚機器や情報機器による発信は、単なる情報伝達や個人的利用の範囲を越え、世界中の人と人をつないで、情報も心も通わせるツールに「進化」したと言えよう。

ところで最近気になるのは、この手の「変化や発展」に何でも「進化」という言葉が使われることだ。前述の部分で、いたしかたなく私は「進化」と表現したが、そもそも進化とは「生物進化」として使われる生物用語であったはずだ。それがなぜ、このように解釈が拡大しているのだろうか。また、情報機器の変化や発展にも同じように使うことは問題ないのだろうか。最初の項で、視聴覚機器の文化の変遷を簡単に振り返ったが、皆さんはそこに生物進化と同じ現象性を感じられただろうか。また、進化の反意語として退化という言葉も使わ

れる場合もあるが、これも生物学的に正しい解釈ではない。ましてや、情報機器の中ですでに使われなくなった技術や機器に対して退化と解釈することもできないだろう。

生物系で育った私は、実はあまり生物以外の事象に「進化」という言葉は乱用してほしくないと思っている。本稿を「博物館の進化」としたのは、そのようなお題をいただいただけなのだが、進化の定義の論議は別の機会に譲ることにし、今回は博物館の「変化や発展」という意味としてとらえ記述を進めたい。

2.博物館の新しい定義（博物館から博情館へ）

皆さんは「博物館の定義は」と聞かれると、どの様にお考えだろうか。そこで広辞苑で調べると「古今東西に渡って考古学資料・美術品・歴史的遺物その他の学術的資料を広く蒐集保管し、それを組織的に陳列して公衆に展覧する施設」と記されている。おそらく、大半の方は同意見であることだろう。これは主に、歴史系、美術系、人文系の博物館を意識して書かれたものだが、科学系の博物館も取り扱う学術資料や専門性が異なるだけで、大きくその役目は変わらないように見える。これに加えるとすれば、近年、研究や教育の機能も重要視されており、さらに動物園や水族館などの自然系の博物館では、生きた資料を扱うことから、生息環境も含めた保全や保護の役割も含められている。保全や保護は、人文系博物館の視点で訳すと「資料保存」と同義になり、大きく人文系と科学系の博物館の機能、役割には違いは見られない。

博物館の機能も、文化の変遷や時代のニーズを反映して「変化と発展」をしているが、私は広辞苑や一般の方々のこれまでの解釈にやや違和感を覚えてきた。それは特に「学術資料を観覧者に見せる場」という最後の記述である。博物館が利用者のためにあることに異論はないが、資料の外観を見せるだけの展示であってはならない。博物館の「モノ」には必ず多くの情報が包含されている。モノには、その館に辿り着くまでの多くの歴史やドラマがあっただろう。また外観からは決して見えない内に秘めた情報も必ずあり、さらに、もしそのモノがヒトの言葉を語れるとしたら、きっと利用者に伝えたいメッセージがあるに違いない。博物館は、そんな、モノの代弁者となって情報を発信し、伝え交流する場なのである。果たして、冒頭に紹介した定義にそれらの意図が含まれていただろうか。

そこで私は、これまでの博物館の定義に、新たに「学術資料の情報を人に伝える場」というのを加えたい。それは奇しくも、大阪の国立民族学博物館の初代館長である梅棹忠夫氏が、「博物館はモノの背後にある情報を収集・研究・提供する機関、すなわち“博情館”であるべきだ」と言っていたこととまったく重なる。私は、梅棹のこの言葉に、後に出会ったのであるが、その遭遇時、私の考えは間違っていなかったと小躍りした。究極のところ博物館は情報発信機関である。また情報発信には受け手に感動と知的理解を伴う必要がある。となれば、情報発信は教育機能そのものであり、博物館は教育機関と言い換えられる。従って、そこで働く職員はすべて教育者としての自覚や高い目標を持たねばならない。

また、学術資料には質的、量的な限界がある中で、今後の博物館機能を評価する指標の一つに、情報発信力も含まれると考えている。情報発信力は言い換えれば教育力でもある。どんな資料をどれほど保管、収蔵しているかだけでなく、そのモノの情報を発信する力がどれ

ほど備わっているかで、博物館の力や質が問われる時代がやってくるに違いない。

3.博物館法改正における博物館資料の解釈拡大

2008年６月、およそ半世紀ぶりに博物館法が大きく改正された。私はこの法律改正において、「学芸員の養成に関するワーキンググループ」委員として関わるなどしてきたが、かねてから博物館資料への法的解釈を拡大、修正すべきだと主張してきた。それは従来、博物館資料は実物を「一次資料」と称し、それに付随した情報資料などは、実物を補完する「二次資料」と、やや蔑まれた存在として扱われてきたからだ。展示は実物資料（モノ）を置くだけでは成り立たない。情報資料と融合して初めて展示と言える。つまり、どちらか一番、二番ではなく、モノと情報は並列、同等の価値として位置づけられるべきである。

私のそのような想いも反映してか、今回の博物館法改正では、博物館資料の解釈に大きな変更が加えられた。それは、博物館資料に「電磁的記録も含む」と追記されたことだ。これは、博物館の情報化にとって画期的な出来事と高く評価できる。なぜなら、電磁的記録（デジタル資料）が正規な博物館資料として昇華することにより、これらの資料収集や整備、保管だけでなく、教育や研究、展示への活用に弾みがつき、その実現のために、予算や要員の措置も可能になることをも意味しているからである。なんと夢の広がる解釈の拡大なのだろう。

4.博物館の情報化にできること

では、これまでなぜ情報資料が軽んじられてきたのだろうか。その理由を列記すると、①モノの収集が優先。②観客はモノを見に来る。③情報はモノの理解促進をする添え物。④情報化には経費がかかる。⑤情報技術や知識に長けた専門家が不在。⑥セキュリティーや著作権のハードル。⑦情報を活用したアイデアがない。⑧活用できるデジタル情報がない。⑨情報化（入力）の作業が困難。などなど、ネガティブな事由をあげればきりがなく、これらの思考が博物館の情報化の大きな障害になっていたことは間違いない。一方で、情報化の推進は、展示解説だけでなく、調査研究、保全保存、教育、広報など、様々な博物館活動の分野ですでに始まっている。先進的に取り組んでいる博物館を見れば、展示や解説の充実、教育活動への貢献、世界的なネットワークでの資料情報の共有と活用など、21世紀の博物館のあるべき姿がそこにある。蓄積してきた資料や記録をデジタル化することは、博物館の社会責任として求められるようになっている。もはや、モノを集めて保管、展示するだけが博物館の役割ではないことは自明である。

例えば、博物館の展示における情報化のメリットを、もう少し分かりやすく列記すると、①解説の充実で理解促進。②見学者のモノを見抜く力の格差を埋める。③映像は情報資料を得る能力を補完できる。④特殊な能力や構造、行動などを再現できる。⑤実物に情報がつくだけでモノが生きる。⑥見えない部分の可視化ができる。など、いくらでも例示することができる。博物館の情報化は、このようなポジティブシンキングであるとより発展していくだろう。

5.学校教育、社会教育の情報化と博物館

従来より、水族館や博物館などの社会教育機関と学校が協働して取り組む学習活動に「博学連携」という言葉が充てられてきた。さらに、1996年の文部省（当時）生涯学習審議会の答申において、博学連携の最も進んだ形として「学社融合」という考え方が示された。融合を「２つのものが重なり融けて１つになること」と解釈すれば、これは、博物館と学校が正にお互いのハッピーのために重なりあうことである。その後も、2002年度から小中学校で始まった「総合的な学習の時間」という授業の設計において、博物館の積極的な活用が推奨され、また同時期にスタートした学校完全週五日制では、放課後や週末において、子どもたちのすごし場所としての博物館が注目をされた。続いて2008年6月の教育基本法の改正では、新学習指導要領の中に、主に社会科や理科において博物館の活用も記述されている。さらに、2010年度においては、社会教育（博物館活動）においても“新しい公共”という概念が示され、地域の学校だけでなく、保護者、市民団体、公民館、博物館、図書館、大学、研究機関、企業など、様々な機関と連携した公共体を構築し、それらと一体となった、持続継続可能な活動の展開が求められている。このように、今ほど博物館と地域、学校の連携に行政の追い風が吹いている時代はない。

学校教育や社会教育の情報化については、まず学校側において2000年前後から学校の教室への高速回線の敷設やＰＣ教室の整備が進み、当面2005年を第一段階の目標におき、各教室に2台のＰＣが配備されることを前提にした授業設計や教材の開発、授業実践が行なわれてきた。一方で博物館側にも情報化が進んでおり、特にPost2005戦略では、生涯学習の増進に向けた基盤の形成、ＩＴの活用による社会教育施設の活性化なども目標に盛り込まれた。あわせて、前述のように博物館法改正で、博物館資料のデジタル化が推進されており、学校と社会教育機関が、情報教育という学びのシーンでつながるために動いていると解釈しても差し支えないだろう。

6.博物館教育における情報化

学校教育の情報化の具体例を示すと、高速通信インフラの敷設やＰＣ、プロジェクター、電子黒板などの機器の導入など、ハード環境の整備を助成する制度、さらにそれらの環境を活用した教員の教育実践研修、また授業で活用する教材やプログラム開発など、多くの実践事例が全国で取り組まれてきた。これらの実績は、情報教育、教育工学、情報メディアなどに関する学会に出席すれば、先進的な活動に触れることができる。ただ、これらは一部の学校、一部の教員に留まっており、ここ数年、拡大していく勢いが鈍ってきた印象がある。また、学校の情報化に対しては、「校務の情報化」や「情報モラル学習」のレベルに留まっているようにも見受けられる。まだまだ、教科学習の情報化には課題が多い。

一方で、博物館教育の現場ではどうだろうか。博物館活動（調査、保存、研究、展示など）の研究報告をする学会もいくつかある。しかし、私の知る範囲では、学校教育の情報化よりも博物館教育の情報化の実践例はさらに少ない。ホームページを開設し館の広報、収蔵資料のデータベース化に取り組んでいる館は多い。しかし、それを学校教育に活用できる教材、コンテンツを提供する場と捉えている館はあまりない。また中には、小型携帯端末

（ゲーム機や携帯電話など）を解説装置、交流端末として活用している館も散見するようになったが、これは一部の博物館で試験的に取り組まれているにすぎず、まだ広く普及するには、システムの公開やコンテンツの充実、通信インフラや情報端末の整備、マスに対応した運用など、越えねばならない課題は多い。

つまり、学校と博物館の連携学習はあっても、まだまだ「実物資料（モノ）」を活用したレベルに留まっていて、情報化を元にした教材やプログラム開発、実践までには遠く及ばないのが実情である。これは、デジタル教材不足、指導者（博物館にも学校にも）不足、アイデア不足、実践不足、そして最も肝要な「意識不足」が原因でもあるだろう。まだまだ、この分野が普及するには、時間、人、資金、制度、組織、意思など、いくつもの壁がある。一方で、ここをすばやくクリヤーした館がこの道のトップを走れることを示しているとも言えよう。

7.私と情報機器の出会いと歩み

極めて手前味噌になることをお断りした上で、私が博物館の情報化や情報教育の世界に、どのようなきっかけで関わるようになったのかを紹介しておきたい。

私が初めて個人でＰＣを購入したのは、まだ機械言語やベーシック言語などでプログラムを組んでいた1980年代のこと。モニターの文字はまだ緑1色。データの保存やアップロードはカセットテープ、モデムは受話器をカプラーと呼ばれる丸い吸盤にセットして通信した。別に買ったワープロは、白黒液晶の文字が数行見える機器でスタートし、その後、大枚を叩いて7インチ画面のワープロを購入、3.5インチFDDに1.5MBもデータが保存できるのは感動だった。などなど思い出話はきりがなく、そんな初期のＰＣからのつきあいに比べれば、現代とは隔世の感があるが、ある面、コンピュータの基礎をここで学んだとも言える。その後、一時期、マックユーザーになり、ＧＵＩインターフェイスの面白さを知り、より人の暮らしに近くなったＰＣの楽しい操作性にはまり、未来を感じた。

インターネット元年とされる1995年から、ホームページの文化が始まったが、業務として当館では、いち早く福岡工業大学短期大学部と連携し、1996年にはすでに公式サイトを公開している。まだウィンドウズ98も出る前の話で、ＨＰを閲覧できる環境は限られた人にしかなく、それまでにあった、キャプテンシステムとの違いも明確に理解されない時代だった。それでも、全国の動物園水族館を束ねる日本動物園水族館協会では、今後の情報化の将来性を見出し、1995年頃から委員会組織をつくって、ＨＰ作成やＷｅｂ上のデータベースを構築の準備を始めた。私もこれまでの経験が買われてかその委員に任命された。まだ園館によってFAXもPCもない時代では、170ほどの園館をつなぐWebデータベースなど夢物語であったが、苦労が実り1997年に協会のＨＰ公開、1999年にWebデータベースがスタートした。

実は、この協会のWebデータベースの仕組みは、１つの博物館種（動物園・水族館）として全国の加盟施設が、日常の園館の運営、業務、飼育管理などの情報を登録して共有、交流できる唯一のもので、未だに他の博物館種では実現していない。私ども動物園水族館業界が、世界に誇れるシステムなのである。

さてこの頃から、国内の情報通信網の整備が急速に進展したが、当館にとって情報教育を大きな館の事業にする大きなきっかけと成果になったのが、1999年にISDN回線の通信インフラを活用した、テレビ電話システムによる遠隔授業を経験したからだ。またこれを後押しするように、同年頃から、国の教育行政も博物館をネットワークする教育機能や学校教育の情報化に大きな予算がつくようになった。そこで当館はすかさずその事業予算を獲得し、遠隔授業に本格的に取り組む環境を2000年から2001年に整備し、実践を積み重ねた。またここでも、ＨＰを教育情報の発信交流の場に使い、また通信環境が脆弱な地域や学校のために、CD-ROM教材の開発も行なった。これらの活動を通して、これまで、実物教育こそが博物館教育の最大の利点と信じていた私に、情報教育の未来と手応えを感じさせた大きな意識の転換点だった。思えば当館の「情報教育元年」は、この遠隔授業に取り組んだ時だったのだろう。

8.海の中道海洋生態科学館の具体的取り組み

前述のような経緯を経て、当館の情報教育への取り組みは本格化した。また、単に通信環境やテレビ電話、映像機器類といったインフラを整備するに留まらず、全国の教員と連携して、教材やプログラム、指導案やワークシートなども作成した。また、イベント的な1回限りの授業ではなく、長い期間、回数を重ねて運用する計画的な授業設計のノウハウも学んだ。これらにより、学校教育の現場からの信頼度は大きく向上し、当館が提供する教材や情報は、学習のねらいの達成だけでなく、子どもたちの学力向上にも寄与すると評価された。正に情報教育が、博物館教育としても成り立つことを証明した瞬間だった。では、どのような活動を行なってきたのか、そのいくつかを紹介しよう。

8-1.テレビ電話回線を活用した遠隔授業

前述のように、ＩＳＤＮ回線を活用して始めた遠隔授業は、主に、水族館が身近にない山間部の僻地校や特別支援校から多くの引き合いがあった。また、回線があっても必要な機器のない学校にはそれらの貸し出しも行なった。さらには、Ｗｅｂ上に機器の使用法解説や授業経験のある先生が成果を投稿できるようにもした。さらに、授業設計を行なうためのハウツー本「博物館をみんなの教室にするために」を発刊し、九州管内の約6100校に無償で配布もした。年間の実施数は50～70校と年々増加をたどり、その教科も理科に留まらず、国語、算数、社会など幅広い学習内容で活用された。また、2002年から小中学校に正式に導入された「総合的な学習の時間」では、一層に博物館と学校が連携しやすい環境が整い、授業設計と実践への弾みになった。

やがて、ISDN回線は次の高速、大容量通信インフラへと発展したが、当館ではその環境にあわせた通信機器も整備した。遠隔授業で得られる学習成果の実感は、通信環境が変わったからといってそこで途絶えさせるべきでないと思ったからだ。このため、携帯電話の通信環境、光回線やインターネットの画像送信システムなど、次々に通信インフラへの対応を重ねた。そして今日、遠隔授業の相手は国内に留まらず、アフリカ（ルワンダ）や東南アジア（カンボジア）など海外にまで広がっている。

授業では、画像と音声が双方向でやりとりできるということだけでなく、その学習の狙いや目的にあわせ、効果的な活用が組み立てられている。そのノウハウの構築は水族館だけでは成し得えない。教員と館員の事前の打ち合わせや事後の評価など、長い時間をかけた検証による成果でもある。情報教育とは、情報機器を使いこなす学習ではないことがこの事例からもわかることだろう。

写真１　ISDN回線による授業

写真２　携帯電話回線による授業

8-2.Ｗｅｂ教材の開発

インターネットの普及で、テレビのスイッチを入れて画像を見るように、自宅でも学校でも、手軽に世界中の情報の閲覧や活用ができるようになった。また、通信環境の整備と拡大によって、「いつでも、どこでも情報社会に参入できる」ユビキタスと呼ばれる時代が到来し、外出先でも携帯電話や小型情報端末を使い情報ネットワークに繋がる近未来の生活が現実となり、もはや、この恩恵なしでは暮らしが成り立たなくなってきた。しかし、インターネットが誕生した頃は、まだ通信速度も極めて遅く、一画面に画像が出るまで数分を要し、データのアップやダウンロードも不可能だった。そんな環境時に、この仕組みで将来、何が出来るのかなど想像もつかなかったことだろう。おそらく多くの企業や団体（博物館も含む）では、自社の製品や営業案内を行なうための広告媒体として使えるとは感じていても、個人や特定のグループ間のコミュニケーションツールとして、また学習コンテンツをWeb上におき、学校教育や社会教育に活用するなどの発想はすぐには生まれなかったものと思われる。

そのような中でも、前述のように、日本動物園水族館協会では、1999年の段階ですでに、全国約170の園館をネットワークし、お互いに各種の情報を共有できるWebデータベースを構築している。また当館でも2000年に、遠隔授業を経験した教員が授業の成果をアップロードしての交流を、また博物館側からは授業内容の公開と申し込み受付をする場をＷｅｂに設けた。この他にも、水族館と動物園で働く職員（獣医師、学芸員、飼育技師）からのメッセージ動画が閲覧できる環境を設け、見学の事前、事後学習にそれらの画像を活用した。また、

子どもたちと博物館の交流のシーンを公開するだけでなく、その学習に必要な写真や動画、テキストデータも活用できる環境を設置した。また、交流学習に参加した子どもたちが、館内で得た情報や感想、意見などを掲示板上に投稿して、子ども同士や館員と交流するなどにも活用した。その他にも、全国の博物館の建築、展示デザインのWebデータベースをつくり、建築学科やデザイン学科の高校生の学習利用に活用もした。

図１　みんなでたんけん水族館動物園
http://www.fukuoka-aze.net/

図２　博物館の図鑑
http://museum-guide.jp/

このようにWebサイトは、ただ画像を閲覧する場から、ブログやＳＮＳ、ツイッター等に代表されるように、パーソナルな情報の投稿と交流の場に発展した。また教育への活用も、隆盛を極めている液晶パッドＰＣのように、アイデア次第で、学習コンテンツやプログラムは多様かつ無限に広がっている。もはや私たちの暮らしの中でも、実物「モノ」に接しているより、インターネット上の情報を閲覧し活用している時間のほうが多いかもしれず、ネット社会は「時間消費型産業」でもある。この現象への功罪は様々な解釈もあるようだが、情報が飽和しつつある時代に博物館は今後どうあるべきであろうか。この環境を享受して積極的に情報発信に努めるのか、これまで、モノ中心であった博物館にとってはジレンマや、未だに抵抗感があるかもしれない。となれば、これからはモノ展示と情報は棲み分けるのではなく、共存、共有、共栄も必要になってくるだろう。情報社会を否定して博物館の発展はありえない。そのための投資や要員の配置、環境の整備は必須と心得たい。

8-3.ＣＤ－ＲＯＭ教材の開発

動画や静止画、テキストデータなどをＣＤ－ＲＯＭに記録保存して、ＰＣで閲覧することは、通信環境が遅かったり、未整備な場所ではとても有効な手段である。このため、単に動画や音声をＰＣで再生するだけでなく、様々な学習コンテンツを編集して収めることで、あたかも図鑑や専門書籍をＰＣで閲覧できる環境が整うことになる。しかも、もっと効率的な利用として。

学校の図書館やビデオライブラリーに行くと、多くの専門書や参考画像があっても、それ

は、各学年の各教科、各単元に則した学習活用を前提に制作されていなかったり、また、必要なデータを効率的に探し出せる検索機能がなかったりもする。そこで当館では、学校の教員や九州内の科学系博物館と連携し、教科書に準拠した多くの授業シーンで活用できる資料を収録したCD-ROM教材「こんなことできる博物館」を制作し、九州管内の小中学校6100校に無償で配布した。

例えば、メダカの卵発生を扱う単元においては、ＣＤをＰＣに入れ「メダカ」と検索すると、本種の一般的な生態や形態の解説だけでなく、交尾、産卵、受精、卵内発生、ふ化と段階を追って、その瞬間々を的確に捉えた画像が提供され、内容に適した解説も表示される仕組みになっている。また、教師用に書かれた解説書も別に用意されている。教員はこれらの資料映像をＰＣ画面やプロジェクターでスクリーンに投影しながらの授業が可能になる。

この他にも、水族館の様々な飼育業務が、すべて地域の自然保護につながっていることを解説する「水族館の仕事から学ぶ環境保護の大切さ」というCD-ROM教材も制作した。これは主に、学校での出張授業や来館時の見学前講話で活用しているが、このタイトルのような視点で収録、編集した画像教材はこれまでにないものである。水族館という業種に興味関心を持ち、その見学や水族館人との出会いを通して、環境保護や動物愛護について考えることができる、貴重な教材となっている。

図３　こんなことできる博物館

図４　水族館の仕事から学ぶ環境保護の大切さ

8-4.携帯型情報端末を活用した学習実践

iPadのような小型液晶タブレットに代表される携帯型情報端末は、画面とキーボードで構成されており、一般的な携帯電話も同様にそれらはいわばポケットサイズの高性能ＰＣである。子どもから大人まで、携帯電話や小型ゲーム機の高い普及率を考えると、これらをただの電話やゲームの機能だけで終わらせるのは実にもったいない話だ。そこで当館では、これらを、学校教育や社会教育の場で、学習用の携帯型情報端末として活用することを計画した。

とは言っても特に携帯電話は、有害サイトの利用による犯罪や過大な課金など大きな社会問題もあり、教育の現場からはバッシングを受けている。そこに学習への利用や教材としての活用などと言っても、果たしてどう使えばいいのか考えつかないかもしれない。しかし、これを前述のように、子どもたちが常に携帯できる小型のＰＣを持ち歩いていると考えてみると、その昔、私どもがソロバンや計算尺、電卓を教具として学校に持参していたことと変わらない。となれば、このような携帯端末が、いつでもどこでもネット環境につながることで、学習コンテンツを得ることができ、また自分自身の表現ツールとして使え、学習の振り返りや成果の確認にも活用できるとすれば、その環境や機能は教育に最適なツールに変身する。

当館が携帯端末の教育活用を思いついたのは、そのような学習活用シーンが想像できたからでもある。そこで、最初に取り組んだのは、2002年にPDAと呼ばれる携帯端末が普及を始めた頃からだ。水族館内に無線LAN環境を設置し、その先に学習コンテンツを保存したサーバーをつなぐことで、子どもたちが各自で持ったPDAを操作し、水族や水槽を観察しながらそれらに関する情報を検索・入手でき、またオリジナルの情報を書き込め、またそうして得た情報をデータとして学校に持ち帰り、教室のＰＣで編集し、最終的に各自の取材新聞に仕上げることができる。この一連の活動で、子どもたちは水族に関して学ぶだけでなく、情報の利活用能力の向上にもなっている。

写真３　PDAを使った新聞制作

写真４　i-Padを使った館内解説活動

当館ではその後、端末機器を携帯電話、そしてi-Padへと発展させたが、これは時代々で一般に最も認知され、子どもたちが「使ってみたい」と思う機種を選択した結果でもある。その際の利活用は、基本的には無線LAN経由でサーバー内に構築した水族に関する情報を閲覧してまとめることであったが、携帯電話ではSNSと呼ばれるコミュニティーサイト上に発表と交流の場を作った。またi-Padでは、子どもたちがオリジナルの生物解説Webページを制作し、館内での解説活動を援助する道具として活用した。

このように、その機器特有の操作性や機能を十分に認識し、学習教具にする仕組みとアイデアは大切だが、さらに大事なのは、これらを使った学習の授業設計とマネージメントである。それには、授業を作り運営する教員の力が最大に求められる。博物館（水族館）はその

ような学習シーンや環境、コンテンツを提供すればよく、正に学社融合の成果とも言える。

小型の携帯情報端末の開発はまだまだこれから機能や操作性が向上していくものと思われる。いつでもどこでも情報ネットワークに参入できる環境を、学校や社会教育施設は積極的に活用することで、子どもたちが自ら積極的に学習に参加し、楽しく分かりやすい授業作りと運営をする。このような、学びのデザインは、学校だけで作り出すことは難しいかもしれない。そのためにも、本物があり、専門的な情報が揃い、専門家がいる博物館を貴重な学習資源とし、ぜひＩＣＴとの相乗効果で利活用すべきだろう。

8-5.博物館における情報化の未来と課題

本稿では、ＩＣＴを主に博物館教育で活用することを主眼において論述してきた。もちろん、収集した多くの学術資料を多くの博物館と同様のフォーマットで保存しデータベース化すれば、多くの研究者と共有できる資料にでき、Ｗｅｂサイトなどを通じて、一般市民にも公開できる。また、画像や写真画像など必要な情報を効率よく即座に検索し、分かりやすく再生、提供できる仕組みをつくれば、館内での解説や展示に利用できる。さらに、モノの遺伝子を保存し、次世代に残し伝えるという博物館の大きな役割を考えると、モノの遺伝子情報をデジタルデータ化し、世界中の関係機関と情報を共有、共用する仕組みをつくるなど、諸外国と積極的に関わる必要も出てくるだろう。博物館の情報化は、博物館の国際化でもある。このように、博物館のより発展的な活動や運営（経営）のためには、情報化の推進は必須となることが分かるだろう。

ところが、前述してきたように、その実現には多くの課題や壁があることも事実である。情報教育ひとつをとっても、この教育の狙いは情報機器を使いこなすことを学ぶのではなく、①情報活用の実践力（収集、判断、処理、創造、発信、伝達する力）、②情報の科学的理解（情報の特性や活用評価）、③情報社会へ参画する態度（情報の役割やモラル学習）など、たくさんの学習の視点が含まれていなければならない。となれば、情報教育に関わる学校も博物館（社会教育機関）も、連携学習のためにはそれらの内容が包含されたプログラムや教材の開発、授業設計、運営していくスキルが要求されよう。また、単に情報化の推進というと、業務や校務など日常的な仕事の効率や質の向上のためのインフラ整備や機器の使い方を修得することに傾注しがちであると解釈している場合も多いだろう。

改めて、本稿を読み返していただければ、誰のための情報化か、情報化の目的は何なのかが見えてくるのではないでろうか。ＩＣＴの活用により、博物館が発展するだけでなく、そこから得られる多くの恩恵により、地域社会や博物館資料の「幸福と福祉」にも寄与することを願っている。

【研究ノート】

漂着物の四十年（玄界漂着譚）
1968年－2010年

石井　忠

1.花綵列島

日本列島を「花綵列島」と美しく表現する人もいる。花をつづったように東アジアの縁を、アリューシャンから千島・北海道・本州・四国・九州・琉球列島とつづくからである。日本列島だけでも南北三千キロ。海岸の総延長約３万３千キロに及ぶ、まさに四面環海、海の国である。

その列島を囲むように、寒暖（黒潮・対馬暖流・親潮・リマン海流）の海流が海上の道となって流れている。

冬季には大陸から北西季節風、夏季は逆に海から大陸へ南東季節風が吹き、海流に乗った漂着物は、日本列島の津々浦々に届く。（※花綵　はなづな、花を編んで作ったつなのこと）

2.流れ寄るもの

民俗学の巨人、柳田国男[1]は漂着物を「風と潮の生んだ日本海岸のひとつのローマンス」と称したが、風と潮は南北の文化を運び、日本列島を育んできた。漂着物として実証できる最も古いものは、縄文時代前期、５千５百年前の福井県・鳥浜貝塚[2]から発掘された椰子の実である。

ココヤシの実

明治３１年春、柳田国男は愛知県・伊良湖岬[3]で漂着した椰子の実、これがヒントとなって晩年「海上の道」を著し、以後、漂着物の重要さを機会あるごとに説き「行く行くは文化史の新しい一面を開くことも」と予告した。さて、鳥浜縄文人は、冬の荒海や台風が去ったあとには、きまって浜を歩いたことは、椰子の実からも推察できる。沿岸に住む人達は、漂着物に期待を抱き「波の音」「風の声」に耳を敧てながら「浜あるき」「灘ばしり」を行なっていたのである。

伊良湖岬

漂着物は沿岸民に恵みを与えたし、珍奇なものは神や仏として崇められた。大量漂着や赤潮の海を見ると、悪い予兆として畏怖した。海辺の社は

寄木や寄船で造営されたし、また荒天の海を航行する船を誘き寄せたり、海賊的行為も行われた[4]ことは、文献や各地に伝承が残っている。

3.海岸を歩く

玄界灘　勝浦浜

１９６８（昭和４３）年に糟屋郡粕屋中から新宮中に転勤、古賀市の名糖前近くに家を借り、そこから二人の娘達を散歩に連れていった。娘が拾う貝に熱中し、毎朝、津屋崎までを歩き、日祭日は遠歩きをした。また貝類図鑑[5]を買い、貝の名前を調べ、とうとう貝類学会に入会した。頭の中は「貝・貝」だった。学会に入会して、地元福岡に福岡貝類懇話会があるのを知り、主宰の高橋五郎氏[6]（タカハシベッコウマイマイ[7]の発見者）や佐藤勝義氏、福間町の魚住賢司氏[8]等を知り、採集や研究会に参加した。ある日、近くの魚住氏宅を訪ねたところ、貝の膨大なコレクションと見事な展示、整理に圧倒されて、貝採集に限界を感じた。

貝採集は波打ち際とか、漁師の網干場等が好採集地で、かならず目を通す、死殻だけでなく生貝のいい標本が得られるからである。特に波打ち際は、風と潮に運ばれた動植物や異国からの生活用品、いわゆるゴミが多くあり、それらのものも注意してみてきた。

特に佐藤勝義氏は旧軍出身で戦時にはヤップ島守備隊として在島、南方産と思われる漂着果実や種子などを持参し、見てもらったり戦時の話を聞いたりした。

4.渚の百科事典

貝採集は続けるものの、次第に漂着物に目が移っていった。フィールドワークは志賀島から遠賀郡・芦屋までの約５６キロで、それを１５－２０キロと区切り、２，３ヶ月で全コースを歩き、それを繰り返していった。古賀、福間、津屋崎は早朝か夕方、一日のうちどこかで歩いた。採集、記録、写真を撮った。海亀、イルカ、鯨骨、南方果実類をはじめ、分からぬものは、大学[9]、特に戦前の南方を知っている先生に手紙を出し同定を受け、また標本類を持参して見てもらった。民俗学では谷川健一先生や故宮田登先生、国立民族学博物館館長の故梅棹忠夫先生、九大名誉教授の故中村正夫先生等にはずいぶんとお世話になった。谷川先生からは、漂着物を「渚の百科事典」という言葉をいただいた。

5.漂着物との四十年

先述したように、１９６８（昭和４３）年に新宮中に転勤になり、海岸歩きをはじめ、貝殻の採集から、貝掘り、イカ（ソデイカ）拾い、若布（若芽）など海からの贈物にも夢中になり、海亀やイルカ等の死骸が漂着しているのを計測したり、写真に撮ったり、埋めて骨格標本をつくった。自分が面白いと感じたものは、すべて収集した。

5-1.1970年（昭和45年）

１９７０（昭和４５）年は、私には忘れられない年だった。１９７０（昭和４５）年3月３１日、玄海町の浜を歩いていた。昼食に立ち寄った食堂のテレビは、日航機よど号がハイジャックされたことを報じていた。大変なことが起ったと海岸歩きをやめて急いで家へ帰ったら、よど号は13時５９分に福岡空港から朝鮮にむけて飛び立った後だった。各局のニュースは、ハイジャックでもちきりであった。この年の１１月には、三島由紀夫事件があり、日本中に大きな衝撃が走った。

ソデイカ

１２月には私が拾いたいといつも海岸歩きで念じていた「生きている化石」“オウムガイ”を玄海町と津屋崎の浜で拾った。最初に拾った玄海町江口では、強烈な北風、小雪混じりの大荒れの天候だった。何か予感するものがあったのか、その日は年休をとっての海岸歩きだった。波打ち際に割れたオウムガイが転っていた。私は大声で「拾った、拾った」と叫んでいた。１ヶ月前に佐藤勝義氏[10]が糸島郡・深江（現糸島市）で拾っていたので、その夜、氏に手紙を書いた。その日、江口の浜には他にアカウミガメの死骸やココヤシも漂着していた。その暮れの３１日には津屋崎・白石浜の農業排水溝のところのゴミが大量漂着する場所で１個採集した。７０年は激動の年であったが、私にとっては念願のオウムガイを２個も拾ったのである。オウムガイはそれから１９８１年の１１年後に３個目を拾った。

オウムガイ

5-2.1965年（昭和40年）

１９６５（昭和４０）年の貝類雑誌「ヴィナス」[11]に浜田隆士博士が江戸時代以降、日本に漂着したオウムガイをまとめている。それだと日本列島には３０数例であったが、近年は海岸歩きをする人も多くなり、本土でも数十個が拾われ、沖縄、先島では百個以上が採集されている。生きたオウムガイ[12]は１９８６（昭和５３）年、鹿児島・開聞町川尻の定置網にかかったものが２ヶ月間、水族館で生きていた。近年は石垣や与那国島で幼貝や、破損していない表面に火災彩も鮮やかで、巻き込みは真黒なものも採集され、温暖化の影響で、フィリピンなどの生息地から次第に北上しつつあるように感じられる。ニューギニア海域に生息するヒロベソオウムガイ[13]は沖縄県・小浜島や石垣島でも採集されている。

5-3.1973年（昭和48年）

１９７３（昭和４８）年にセグロウミヘビ[14]を古賀市花見浜ではじめて見つけ、１９７３－７５年まで３匹があがった。爬虫類ヘビ目溝牙蛇科、生息はインド洋から太平洋の暖海に分布、南北日本列島の海域からも採補されている。１０月は神無月、出雲では神在月というが、八百万の神様が出雲へ集まり神議があり、出雲の稲佐浜へ神迎えの神事が行なわれる。この時、セグロウミヘビ（竜蛇）が神々を先導する役割を担う。ウミヘビを採集したので、１２月には竜蛇信仰のある出雲・石見地方を巡ってきた。

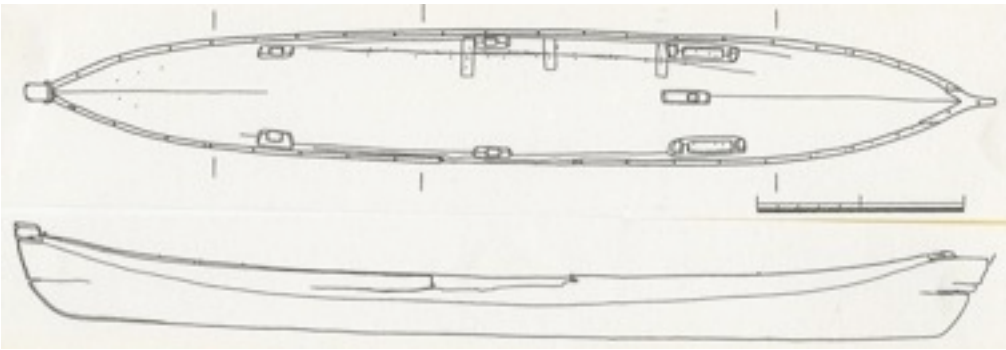
セグロウミヘビ（尾部の波状模様が特徴）

5-4.1974年（昭和49年）

１９７４（昭和４９）年１２月、長崎県・松浦高校の池崎善裕先生から手紙をもらった。松浦海岸に漂着したオサガメ[15]を解剖したところ、大量のビニールを食べ、それが食道に詰ったことが、死因であることが書かれてあった。早速学校を訪ねて話を聞き、詰っていたビニールを見せてもらった。ビニールに印刷された文字はみな日本語で大変ショックだった。オサガメはクラゲやサルパ（※サルパ目サルパ亜目の尾索類）を食べるが、漂っているビニールをクラゲと間違えて食べていたのであった。そういえば、そのころ大量のビニール類の漂着の多さが気になっていた頃である。玄界灘海岸に漂着する海亀[16]は、オサガメ、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ[17]等５種があり、アカウミガメは、福津市恋の浦、勝浦浜、遠賀郡・岡垣浜に産卵にあがる。福津市にはウミガメ課もあり、ウミガメに対する保護は市民と共に行なっている。１９８７（昭和６２）年６月に福岡市・海の中道でウミガメの這った跡を見つけたが、卵は掘られてなくなっていた。

岡垣浜に丸木舟が流れついたということを芦屋の人から聞き、その所在を探していたがなかなか分からなかった。１９８２（昭和５７）年になって、同郡岡垣の久世という料亭の生簀の上に置いてあることが分かった。久世は小役丸卯太郎（１９２２－２０００）氏経営である。発見者の小役丸氏に伺ったら、春に汐入川のところに半分砂に埋もっていたという、全長４．６５m、最大幅６２ｃm、高さ最大３０－４０ｃm。断面は舟首、舟屋がV字形をし、中央部はU字形となっている。舷があったと思われるが失われたようで、木釘で止められた痕跡が残っていた。また内部に鉄釘のあとの錆がある。舟首から見ると左側に長さ約６６ｃmの亀裂があるので、それをふせたようなあとが残っている所があり、そこに鉄釘の錆が集中している。内部は左右に向かい合う３個、計６個の差し渡しを受入れる刳り残しの突起があり、また中央から舟屋側に６６ｃmに幅３７－４０ｃmの前者の２個より広い差し渡

しがある。その中央に３×４ｃｍのくりこみがあり、帆柱をたてる柱受状のものが見られた。巨大なラワン材を刳り抜いて、この丸木舟は作られている。樹種は愛媛大学の原田光教授らによって、広葉樹の南洋材でフタバガキ科のレッドラワングループに属するという。同形の舟はインドネシア・スウラウシエ島に見られる。北九州市立いのちの旅博物館に寄贈。



岡垣浜に漂着したラワン製丸木舟

5-5.1988年（昭和63年）

１９８８（昭和６３）年４月１４日、アカウミガメが古賀浜にも産卵、卵をマリンワールドに移したが、無精卵であったという。ヒメウミガメは、１９８０（昭和５５）年、福津市・勝浦浜で死骸が漂着、日本では漂着例の少ない海亀である。

漂着した手造りの西方丸

１９８７（昭和６２）年７月、塩屋鼻沖１５００ｍのところで底引網に鯨の椎骨がかかった。８月１５日が過ぎると西方丸が白石浜、勝浦浜に多く漂着した。手造りで装飾をほどこした豪華なものが多かった。以後、手造りの西方丸は少なくなり、発泡スチロール製に代わった。７５年から８７年まで、南方のホウガンヒルギ（センダン科）の漂着が多く観察された。

牛乳パックの少年画像

１９８７（昭和６２）年１１月８日、白石浜から勝浦浜を歩いていたら韓国製の牛乳パックが漂着、パックの日付は１０月２８日で、１１月８日に漂着したしたがパックには消息不明の少年を探す写真入だった。今思えば拉致[18]であったのであろう。日本人の拉致もこの頃あっている。

１９８８（昭和６３）年９月１９日に福間・北原の浜にカメの子が孵化、大部分は海に泳いでいったが、うち１０匹が配水管から道路に出て、通りかかった車に引かれている。連絡を受け見に行ったが、４センチほどのアカウミガメであっ

た。１９９０（平成２）年１１月から１２月には、緑色したオヒルギ（蛭木・オヒルギ・メヒルギ）が多く漂着した。

１９９１（平成３）年８月に沖縄を旅し、知念村の浜でアメリカ・南カリフォルニアから流したビンが漂着していた。二年半かけて北赤道海流に乗ってたどり着いたものである。このビンは、カリフォルニア沖から３６０本流した一本であった。早速流したアメリカ人に連絡をした。

アメリカからの漂着ビン

5-6.1991年（平成3年）

１９９１（平成３）年１２月２１、２２、２３日に福井県小浜から京都府・函石浜[19]・久美浜の海岸を歩いた、福井県鳥浜貝塚の出土遺物を見学した後に、京都府函石浜の海岸を歩いたが、ガラス製浮子や、ソ連製の鉄浮子等が漂着していた。ここの砂丘地帯にある函石浜からは弥生時代の遺物や青銅製銅鏃が昭和初期ごろ直良信夫らによって採集されている。松林の中に記念碑が建っていた。浜で漂着している陸亀を発見。甲羅にハングル文字が書いてあったので、持って帰ろうとしたが腐敗がひどく断念。

１９９２（平成４）年６月２８日、九州・沖縄水中考古学会が行った長崎県・鷹島[20]の海底遺跡調査に参加。会員は水中に潜ったため、船に残っていた。午後から周辺の海岸を楠本正氏らと歩いた。その時はちょうど干潮時で、引いた砂利の中をよく見ると大量の陶磁器片が見えてきた。また、元船の煉瓦や硯等も採集。その中にフジツボの付着した半円の陶器を見つけた。中には赤褐色の石化した泥がつまっていた。これがその後福岡市の文化財課に運ばれ分析。蒙古襲来絵詞[21]に描かれている“てつはう”ということが判明した。その後鷹島の海底調査でも完形のものが引き上げられているが、中に物がつまったものはまだ引き揚げられていない。いずれ完形の中に鉄片が詰まったものが発見されるだろう。現在国立九州博物館に展示されている。思えば７百年前、鎌倉武士を震撼させたものである。

てつはう

１９９３（平成５）年１２月２３日、西郷川の北原でタイマイ（鼈甲）３０×２４cm、重

さ２.６ｋｇの死骸を発見。甲羅を標本、頭部四肢はホルマリンにつけて保存した。

１９９４（平成６）年４月１５日、福間花見浜でクジラのようなものの一部が海藻にくるまって漂着、骨の一部が見えたので、解体して椎骨、椎板等をとる、鯨の名称や部位は分からない。

１９９４（平成６）年１１月１９日、白石浜にオサガメが漂着。甲羅を計測したら１５０ｃｍあった。１１月３０日、博多湾でメガマウスザメが漂着。世界で７例目。体長４．７ｍ、体重７９０ｋｇ。２０１１（平成２３）年１月に三重県の定置網に生きたものが捕獲されたとテレビで報道されていた。生きたものは世界初という。博多湾で漂着したものは前日に湾内で泳いでいるのが目撃されている。プロジェクトを組んで解剖、その後、標本としてマリンワールドの目玉になっている。

１９９５（平成７）年１月にアオイガイの漂着が多く見られた。またこの年にはエチゼンクラゲ（２４）が玄界沿岸に漂着した。コウモリ傘ほどの大型で、重量は１００キロ以上、これが数匹網に入ると、その重さで網が破れ、漁業に大きな被害を与える。エチゼンクラゲは黄海あたりで発生し、玄界や日本海へ、一部は瀬戸内海でも捕獲されている。

アオイガイ

5-7.1996年（平成8年）

１９９６（平成８）年１月１２日、福間漁港近くに長さ５ｍほどのミンククジラ（２５）の死骸が漂着。死後１週間ほど経過していた。住民が出刃包丁等で肉を削り取って持ち帰っている。その後、漁協で解体。沖に投棄した。私がこのニュースを知ったのは夜だった。　砂浜に埋めて骨格標本を採ることを考えなかったのであろうか。大変残念だった。５月１１日に散歩コースの浜（福間花見浜）にアカウミガメの死骸が漂着。死後あまり経過してなかったので、すぐ家に戻り準備をして解体。胃には海藻とビニールの糸状、長さ２０cm、５ｃｍ、４ｃｍの３本、ビニール袋の小片だけだった。これが直接の死因ではないようである。解体中に海岸歩きの人なども寄ってきた。こちらは血と匂いとで、気分が悪くなりそうになった。終わって見物者と一緒に松林の中に運んで、標本をとるため埋めた。１９９６（平成８）年６月ごろ、奈多漁港に浮いたり沈んだりしている丸木舟らしいのが目撃され、９月１日に志賀島沖で漂流中の丸木舟を、漁師によって引き揚げられた。断面はU字型、内部はノミで削った跡がはっきりしていた。一部木片を愛媛大学に送って樹種を調べてもらったらトドマツ（２６）ということであった。トドマツは北方材である。引き上げられ３年間ぐらい現場に放置されていたが、譲り受け福間の教育委員会が今保存している。舟は長さ５ｍ弱。未製品であろう。６月に志賀島の勝馬にベトナムの竹籠舟（２７）が漂着。近くの浜幸屋の上田征一郎氏が、自宅の裏の浜で発見。長さ４ｍ、幅１７０ｃｍ、竹を細く割いた、網代編みで、楕円形としている。全体にペンキを塗り、底部にはコールタールを塗って水漏れ等を防いでいる。竹籠舟は昔はココヤシの油と牛糞を混

ぜて塗り、目をつぶしていたという。古事記や日本書紀のマナシカタマ（無目籠、無目堅間小船）等の記載があるが、これを籠とするか、舟とするかは紀の場合、記載が異なっている。まだ現在のところ考古学の発掘は竹籠舟の報告は知られていない。このベトナムの竹籠舟は楕円形（笊形）と、円形のものがある。円形のものは一寸法師の舟と呼ばれている。

ベトナムの竹籠船

１９９６（平成８）年１２月１５日には白石浜でイノシシの頭部が漂着していた。玄界沿岸でイノシシが出没。市街地に入ったり、列車に衝突する等多発していた。２００４（平成１６）年には津屋崎の山手から、海岸に出て福間や古賀の松林をかけぬけて、松林中を散策中の古賀市住民三人に傷をおわせて、新宮町湊付近の山中で射殺されている。猪の死骸や、頭骨も玄界沿岸で多く漂着している。

5-8.1998年（平成10年）

１９９８（平成１０）年８月１１日に下関方面を歩いていたら、横野の海岸で異様に多い漂着物が目についた。多くの漂着物にフジツボやエボシガイが付着している。そしてほとんどのものが中国製品だった。６月に中国の長江[34]で、今世紀最大という大洪水がおこっていた時である。この大洪水で中国のトップが海外に行っていたのを急遽帰国して、その対応に迫られている。８月２７日には福間、津屋崎・白石浜・勝浦浜を歩いたら、大量の漂着物、１１日に下関で見たものと同じであった。８月の炎天に付着物は腐敗し猛烈な匂いを漂わせていた。ココヤシ、瓶類、ペットボトルや流木、建物片、樹木、ライター等大量漂着。玉を抱く獅子の木彫りは、台湾のものであろう。その頃には新聞も報じていたので、８月の２９日に鹿児島・吹上浜の海岸を歩く。海水浴場・漁港のあるところは清掃車やボランティアがでて、ほぼ流木など焼却がすんでいたが、人気の少ない場所には漂着物はそのままであった。吹上浜[35]は以前に数回歩いたが、今回浜を歩いたら「不審者」の注意を呼びかける掲示やビラが多く目についた。ここでも「拉致」が行なわれたからである。吹上浜は、道路や人家から遠く離れていて、北朝鮮の工作員たちが徘徊や潜伏をして機会を狙っていたのであろう。

１９９８（平成１０）年１２月１４日、１０月から毎晩夜８時ごろから津屋崎まで歩いた。ソデイカを拾うためである。雨・風も厭わず浜を歩いた。この日は満月であったが、干潮で花見の波消しブロックのところに出たら、ソデイカの体が青白く浮かんでいた。付近をみるともう一杯を確認。護岸の中に一杯を隠して、一杯を抱いて家に帰る。二杯目を運ぶた

め自転車に乗っていったが、もう一度浜を見たら一杯漂着。約１時間のうちに４杯を拾った。一晩でこの数は今迄になく、家内も「こんなに拾うてどうするとね。」翌朝計測、写真撮影をして半日かかって解体した。２０軒ほど配った。解体中にこの分厚いところと、内臓の部分に寄生虫アニサキスを検出。ホルマリンにつけて保存。

１９９８（平成１０）年２月２１日に福間北原浜に約１００ｋｇ、長さ１ｍほどのマンボウが[28]漂着した。マンボウの漂着は古賀市でも２００３（平成１５）年花鶴川河口で漂着。内臓部分が切り取られていた。マンボウには、生肝が病気にいいという俗信のためという。２０１１（平成２３）年１月に古賀浜に１００キロほどのが漂着している。

マンボウ

１９９８（平成１０）年２月３日、福間花見浜に大量のブンプク（棘皮動物）[29]が大量漂着。歩く時に気をつけたが踏み潰す音がなんとなく気持ちが悪かった。

5-9.1998年（平成10年）

１９９８（平成１０）年２月２７日－３月にかけて、西郷川の北側にあった漁師小屋の撤去作業が行われた。ブルが入って古い漁具や網などを壊して、ダンプでどんどん運んでいく。教育委員会に連絡して、漁具の一部は運んでもらった。滑石製の沈子[30]や土製錘は、拾ってきた。石製錘は昭和３０年代まで、立花山・三日月山付近で滑石を採取して、現場で加工したものである。

３月３日夜イカ拾いのため海岸を歩いていたら、北原浜の波打ち際にキツネが漂着していた。花見の松林まで持っていき、翌日、写真撮影。終わって埋めた。一年後に頭骨部分を標本として掘出す。ホンドキツネ[31]である。首に鉄製針金が巻きつけられていたので捕殺後海へ捨てられたのである。民話には福間のオサンキツネが登場するが、キツネは近年、ほとんど人の目に触れることがない。１２月２１日に福間花見の東（北）２０ｍのところに、バカイカ（正式名称）が漂着。ソデイカもバカイカとかいうし、アカイカともよんでいるが、こちらのバカイカが正式名称で、どうもソデイカ[32]と混同されている。体系は、スルメイカ形のもので、長さ４９ｃｍ、重さ５ｋｇあった。

１１月８日に、花見海岸にシュモクザメの幼魚が数匹あがっていた。網にかかったものを福間の漁師が捨てたものであろう。標本にしようと手にとって見て、その臭いこと。なかなか匂いがとれず何度も砂と海水で洗った。結局家で石鹸をつけて洗い、やっと匂いが取れた。

5-10.2001年（平成13年）

２００１（平成１３）年８月に、古賀・福間・新宮の沖に、巨大なシュモクザメが遊泳しているのをサーファーが発見。空にヘリ、沖に巡視船も出て監視をした。海水浴シーズンだったので、海水浴業者は大きな打撃を受けた。サメと聞けば多くの人があの「ジョーズ」の人食いざめを思い出す。

２００１（平成１３）年ごろから冬になると、玄界沿岸の各所で韓国や中国のポリタンクが漂着する。新聞によれば「日本海沿岸にタンク１万個（２００３．３．２０）。タンクは蟻酸や過酸化水素等の漁具やノリの漂着剤・消毒殺菌剤等に使われるもので、年々増加、日本海、玄界沿岸では数万個に及んでいる。

２００１（平成１３）年8人の仲間と漂着学会を立ち上げた。事務局を高知県黒潮町に置いた。２００２年第２回は古賀市で行い、２０１０年福岡大会を海の中道で行った。会員２３０名、会報『どんぶらっこ』は３５号、学会誌は８巻となった。

２００２（平成１４）年２月２６日には恋の浦[36]にオオギハクジラが漂着。体長４．７m。近年日本海側に漂着が目立っているという。この鯨の実態はあまりよく分かっていない。

この年にはカツオノエボシ[37]が古賀、福間浜に大量漂着。黒潮本流に見られるが、玄界側は初めて見た。有毒なクラゲである。

１０月２９日には古賀花見浜に、大量のギンカクラゲ[38]とルリガイが漂着した。紫色の殻は高貴な色をおび、貝から発する泡に本体はぶらさがり、気ままな旅をする。別名「さまよえる旅人」

２００３（平成１５）年２月１４日。山口県角島に北朝鮮の船が座礁。日本の中古自転車を積載していた。その後、自転車を積み替えて座礁船を放置して退去。放置された船を見に行ったが、怒りがこみあげてきた。

福津市勝浦浜海岸のポリタンク

５月２７日、宗像歴訪の会で、北九州市藍島へ。西側の浜で漂着した男性死骸を発見。波打ち際にマネキンのようにあおむけになって横たわっていた。会員一同「ギャーッ」。死体に外傷などはなかった。北九州市の警察に通報。１９８０（昭和５５）年、宮司で下半身を見つけたことがある。

２００６（平成１８）年１１月ごろから海岸に医療系統薬物の漂着が目立つ。海岸にはポリタンクや薬物に注意する看板が各所に立てられた。

２００７（平成１９）年１月に福津市白石浜に漂着したユウガオ[39]（ヒョウタン）を、宗像市の神田哲氏が持参、割れて海水が入っていたが種子を取り出し、４月に播いてみた。どんどん成長。夏は夕方になると、白い花が咲いていた。庭中の木につるがからみ、葉で被われたが、隠れるように１個実をつけていた。その種子を２００８（平成２０）年４月に播き２個がみをつけた。２００９（平成２１）年にも種子を取り出し播き、毎日水をやり肥料を与えてたところ、４個が実った。２０１０（平成２２）年にも播いたが、花も咲いたが実はつかなかった。酷暑のせいだろうか。

漂着種子から発芽した夕顔

２００７（平成１９）年に心臓手術をして、近年海岸歩きは減少、種子を播いて発芽を試したり、資料の整理が多くなった。

２００３（平成１５）年ごろ、福岡市内の園芸店で、種子から１０ｃｍほど芽が出ていたケベレラ[40]を千円で売っていた。これはキョウチクトウ科に属するもので、原産は東南アジアの熱帯圏である。シンガポールに行ったときには街路樹として植えられていた。また、果実も玄界に漂着する。少しずつ成長し、鉢に移し、土や肥料を入れて、夏は外に出し、冬は部屋に入れて大事に育てた。いつの間にか２ｍ以上にもなった。２００７（平成１９）年の夏には白い花が２，３個ついた。２００９（平成２１）年の夏には全体に花が付き、１０月上旬に最後の花が終わった。１ｃｍの小さな実が１個付いていた。

腐れないように祈る毎日だった。１１月に実がとれた。長さ４．５ｃｍ、緑色をし、白い斑点状のものがつき、縦に浅い筋状になっている。７年目にして実が付いたのには感動した。今年（２０１１年）の冬は外に出したが、寒さに葉がしなだれている。

１０月には、宮司浜にグンバイヒルガオ[41]が観察された。

２００９（平成２１）年７月１８日、福津市花見の刈目川近くの波消ブロックでサケガシラが漂着していた。体長１．１３ｍ、幅１２ｃｍ、エタノールで保存した。

6.漂着植物の変化

40年の熱帯植物[42]の変化について述べておこう。『名も知らぬ遠き島より、流れ寄る椰子の実ひとつ』海岸歩きで、かならず拾ってくるのはココヤシであった。どんな小さな部分でも、見つけ、拾ってきた。ココヤシだけでも７００個は袋に入れて持っている。「一個あればいいっちゃないと」と家内は言うが、これだけはこだわった。ココヤシは果実と果皮と区別した場合は、海岸歩きを始めた頃は、果皮の割合が果実よりも圧倒的に高かったが、次第に果皮の割合が減少し、２００８年、２００９年では、果実の割合が９０％以上となった。この理由としては、流出源である東南アジアの国々で果実の中身を取り出した後、果皮

が海に捨てられていたが、次第に投棄することが少なくなったためと解釈できる。しかし果皮が少なくなったばかりでなく、果実の漂着量が増加しているのはそのことと関係はない。同じように増加しているものにはモモタマナとゴバンノアシがある。モモタマナは海浜にも生育しているが、街路樹として盛んに植栽されるようになった。それによって果実が側溝や下水から川や海に流出するようになったと考えられる。ゴバンノアシとココヤシは熱帯の海浜に優占林を形成しており、海面の上昇や海岸浸食によって汀線が生育地に接するようになり、落下した果実が直接、海に出ることが多くなったものと思われる。サキシマスオウノキ、ミフクラギ（キョウチクトウ科）、モダマ（マメ科）の漂着が多くなったのも、同じ理由によるものと考えられる。

一方、最近になって減少傾向にあるのはニッパヤシ（ヤシ科）とホウガンヒルギ（ヒルギ科）である。ニッパヤシの果実の漂着量は１９７９年ごろまで多かったが、近年では滅多に漂着することはない。かつてニッパヤシは大量漂着が見られ、１９７５年３月に福岡県海の中道の７．３ｋｍの海岸で４６個を、中西弘樹氏（長崎大学・現漂着物学会会長）は１９７９年３月に愛知県常滑市の３kmの海岸で２７個の漂着を確認している。私は歩き始めて、１９８４（昭和５９）年４月までに３２０のニッパヤシを採取している。しかし最近はこのような現象は全く知られていない。ニッパヤシやホウガンヒルギは東南アジアのマングローブ湿地の中に生育しており、栽培はされてはいない。マングローブ湿地の開発により、それらの植物種の生育地が減少しているのが原因ではないかとも考えられる。以上のように日本本土への熱帯起源の漂着果実と種子は、海面上昇や海岸浸食、マングローブ湿地の開発による自然破壊が影響していると考えられ、したがって、地球規模の環境問題を反映していると言える。

まだたくさんの事があるが、紙面の関係で割愛した。漂着物を手に取り、記録を開くと、昨日今日のように思い出される。それにしても４０年間、確実に自然も環境も後退している事だけは言える。

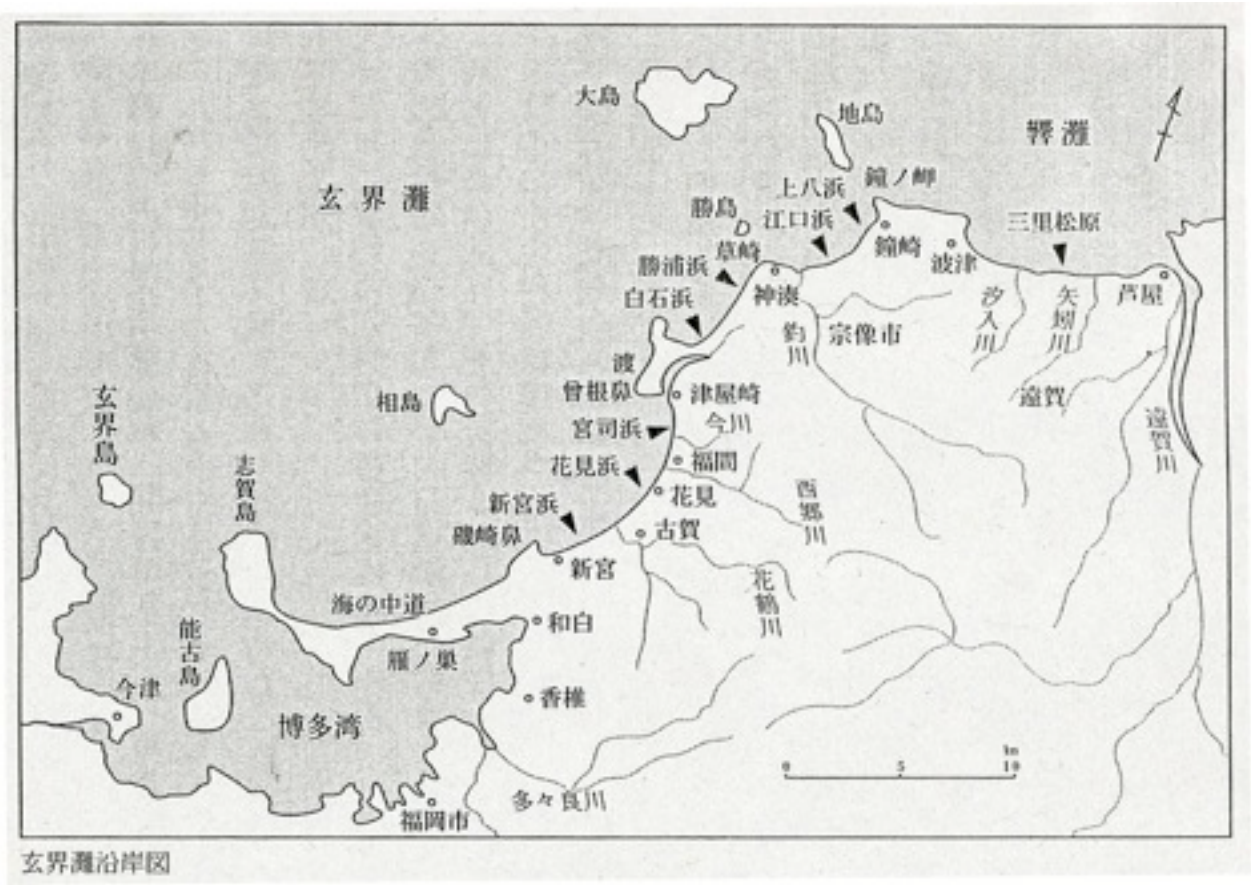
注

１．柳田国男　　民俗学者「遠野物語」「海上の道」１８７５－１９６２
２．鳥浜貝塚　　福井県三方郡鳥浜貝塚
３．伊良湖岬　　愛知県伊良湖岬、柳田国男「海上の道」（１９５２）
４．宗像大社寛喜三年の文書「宗像大社の本末社七十会社の造営・修理が芦屋から新宮湊まで４８キロの間に打ち上げられた漂着物で行われた」
５．貝類図鑑　　波部忠重、小管貞男「貝」保育者（１９６７）
６．高橋五郎　　高橋五郎、岡本正豊「福岡県産貝類図録」（１９６９）
７．佐藤勝義・石井忠「玄界灘に漂着したオウムガイ」ちりぼたん６－６、日本貝類学会
８．魚住賢司「福間町の貝類」福間町史、自然編１（１９９８）
９．戦前の南方植物　渡辺清彦、村田弘之、瀬川弥太郎
10．オウムガイ　石井忠「11年ぶりに漂着したオウムガイ」「ちりぼたん」１２－２（１９８１）
11．貝類雑誌　　日本貝類学会誌、ヴィナス、ちりぼたん
12．生きたオウムガイ　　小畠郁生、加藤秀「オウムガイの謎」（１９８７）
13．ヒロベソオウムガイ　　中西弘樹、海流の贈り物　平凡社（１９９０）

14. セグロウミヘビ　　上田常一「出雲の竜蛇」（１９７２）
15. オサガメ　　海産のカメ、甲長2メートルに達する、背甲に7本、
腹甲に５本の縦に隆起がある。熱帯、亜熱帯の外洋
16. 玄界灘海岸に漂着する海亀　　土本で産卵するアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサガメの五種
17. ヒメウミガメ　1993年12月4日　津屋崎町、勝浦浜で嶺井久勝氏に
よって発見、マリンワールド保存
18. 拉致
19. 京都府・函石浜　　直良信夫、近畿古代文化論考　木耳社（１９９１）
20. 長崎県・鷹島　石井忠　蒙古襲来絵詞の“てつはう”漂着物学会誌第３（２００５）
21. 蒙古襲来絵詞　肥後国の住人、竹崎李長の文永、弘安の役の自身の戦
功をあらわす。絵巻、鎌倉中期頃。“てつはう”の描写がある。
22. タイマイ　　ウミガメ科のカメ、甲は、黄色と黒色の不規則な細斑
がある。甲は鼈甲（べっこう）として、装飾品に製作、絶滅危惧種
23. メガマウスザメ　　メガマウス科のサメ（軟骨魚、全長５メートル）
深海性のサメで実態が不明だったが近年採捕されている。その後、日本で3ケ所、捕獲や死骸があがっている
24. エチゼンクラゲ　ビゼンクラゲ目の鉢虫類、直径1メートル、重さ１５０ｋｇ、東シナ海から日本海へ流入
25. ミンククジラ　ヒゲクジラ類ナガスクジラ科、全長１０メートル前後コイワシクジラ
26. トドマツ　　椴松、普通にはアカトドマツ、北海道北部、カラフトに自生
27. 竹籠舟　ベトナム、ハロン湾や運河等で使われる４ｍほどの竹で編んだ舟。郷司正己、ベトナム海の民　新泉社　2003年
28. マンボウ　フグ目　まんぼう亜目　まんぼう科
29. ヒラタブンプク　棘皮動物　海胆綱
30. 滑石製沈子　（ちんし・おもり）漁業用のおもり 石井忠　寄物の考古学４．石錘　福岡考古懇話会18号　1999
31. ホンドキツネ イヌ科　キツネ属　ホンドキツネ
32. ソデイカとバカイカ　ソデイカをバカイカとも呼んでいる
33. シュモクザメ ハンマーヘッド・シャーク　撞木（しゅもく）は鐘を打ちならすT字形の棒
34. 長江大洪水　平成10年（1998）6月から揚子江（長江）の大洪水被災者、2億数千万人、20世紀最大の洪水
35. 吹上浜　　鹿児島
36. オオギハクジラ　　西脇冨治　鯨類・鰭脚類　東京大学出版会　１９６５
37. カツオノエボシ　　刺胞動物門ヒドロ虫綱管クラゲ目　カツオノエボシ科
38. ギンカクラゲ 日本近海にも分布するギンカクラゲ
　　荒俣宏　水生無脊椎動物　平凡社　1994
39. ユウガオ　　ウリ科の蔓性　一年草　カンピョウ
40. ケベレラ　　キョウチクトウ科
41. グンバイヒルガオ　　ヒルガオ科の多年草　世界の熱帯海岸に広く分布
42. 中西弘樹・石井忠　　「日本本土における熱帯起源の漂着果実と種子の40年間の変化」漂着物学会誌　第８巻　2011

石井　忠　　漂着物の博物誌　　西日本新聞社

石井　忠　　寄物の民俗誌　　新潮社
石井　忠　　漂着物事典 海鳥社
石井　忠　　新編　漂着物事典



玄界灘沿岸図

玄界灘沿岸の地名

【研究論文】

城郭から見た宗像の戦国時代
ー 大宮司宗像氏貞の時代を中心として ー

藤野 正人

1.中世の城郭

1-1.私達がもっている城郭のイメージ

戦国時代といわれる戦乱の時代に、日本全国に多くの城郭が築かれた。城といえば、私たちが真っ先にイメージするのは、姫路城や、熊本城等の高い石垣の上に築かれた高層で白亜の大天守閣や壮大な御殿群、そして櫓や門を備えた、大規模城郭ではないだろうか。 これらの城郭は、群雄割拠の乱世から転換して、織田信長や豊臣秀吉の全国統一事業の進展に伴い築城された安土城や大阪城を出発点とし、江戸前期までの半世紀足らずの内に全国に波及した完成期の築城技術に基づく本格的城郭であり、「近世城郭」といわれている。福岡県内には、およそ千を数える城郭があったといわれている。その多くは、前述の天下人や大名が築いた近世城郭ではなく、群雄が割拠した戦乱の時代に、一郡から数郡を支配する「国人」と呼ばれる領主や、村落を支配する小領主が築いた「中世城郭」といわれる城であった。

1-2.中世戦国期の城郭とは

「中世城郭」とはどのような形態の城だったのだろうか。「城」という文字を分解すると「土」と「成」の二つの文字に分けられる。「土」と「成」の二つの文字が表しているように、中世の城は、土塁・堀・切岸（城壁）といった、土を掘り、削り、盛り上げた防御施設によって形成されるものが大半を占めている。現在の私たちが城の象徴としてイメージしている、近世城郭における天守閣等の高層建築は中世城郭においては、「井楼」（せいろう）と呼ばれる物見矢倉程度の構築物しかなかったと考えられてい

小倉城

る。さらに、城内の建物も、掘り立て柱工法が優位を占め、礎石は御殿や城門などの重要建築物に限定した使用に留まり、建物の屋根も、当時、寺社建築の世界では瓦の使用が浸透していたが、中世城郭においての使用は稀で、高級な建物ならば桧皮（ひわだ）か、柿（こけら）葺き、一般的には板ないし萱葺き屋根が主流であったと考えられている。

また、石垣は、城門袖部や櫓台の袖周りなど、部分的な耐久性向上を目的に取り入れられる程度に過ぎなかったと考えられている。宗像において確認できる城郭遺構も、これら中世城郭と考えられる。

1-3.城郭の探し方

宗像の中世古文書等の文献を集約した「宗像市史史料編中世Ⅱ」には、宗像の戦乱の時代を表すように、当地の領主であった宗像氏に関わる城郭が、城、要害、切寄と記述されている。

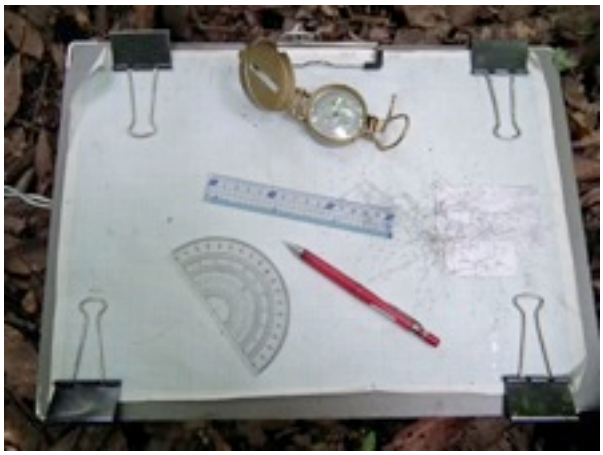
そして、宗像に残る小字等の古い地名や伝承の中にも、城郭が存在したことの痕跡が残っている。例、「城（じょう）」（岳山城、名残城）、「城山」（岳山城）　「城腰、城越」（石丸城、地島城、大島城、腰山城）　「切寄」（亀山城）　「神（じん）屋根」（稲光城）　「城の辻」（勝島城）　※「城」の発音は、圧倒的に「じょう」と発音する場合が多い。「神屋根」の「神」は、「陣」から変化したと推測される。

しかし、以上の事から、城郭があった場所を探し出し、当地を尋ねても、平地や低い台地上にあったと思われる城館の多くは、近代の造成等により消滅している。

また、近代の造成の影響を受けなかった山城においても、城址の現状は、建物等の上部構造物がなくなって、山上にただ平地が残るのみで、山林や深い藪に覆われており、どのような形状の城郭が存在したのか、中々想像することは困難である。

1-4.縄張（平面図）調査とは（地表面観察による現地調査）

上部構造物がなくなった城跡の形状を把握する方法として縄張図（平面図）作成によりその構造を分析する手法がある。 縄張図調査は、城郭を踏査し簡易測量を行い、城郭の範囲を特定し、城郭のもつ防御性（人工的急斜面、堀、土塁、石垣によって守られた削平地の配置）に注目しつつ、城郭全体の平面構成を地形図に載せ図化し城郭構造を把握する。



調査現場で作成中の縄張図

1-4-1.縄張り調査の方法について

簡易測量による縄張図作成は、方位磁石や巻尺等の道具で、こつさえ覚えれば、誰でもできる。距離の測定は、歩測で行なう人もいる。一人でも可能であり、道具はほとんどホームセンター等で揃えることができる。

山中での簡易測量

1-4-2　縄張り調査から何がわかるか

縄張り調査は、縄張図を作成することにより城郭の規模を明らかにする。そして、それを構成する曲輪（城郭内部の平坦面）同士の関係やその配置構成を調べる。これは、現代の私たちが住む家の間取り図を見るのと同じで、家族の構成員の力関係が部屋の配置や広さに表れるように、その領主（城主）の権力構造（当主の権力の強さ・一族や家臣団との力関係）が城郭内部の曲輪配置にどのように反映されているかを調べる。

縄張り研究では、一つの城館だけでなく、周辺に残る多くの城館の遺構を調べ、比較していくことによって、築城主体や時期を検討する。城館の構造は、その立地・構築された時期・目的・構築主体によって差がでてくる。遺構を構成するパーツ（曲輪、堀切、竪堀、切岸等）には、築城主体によって特徴の見られるものもある。さらに周辺の古道・地名・遺跡等もあわせて検討し、一定の地域での役割（場合によると大名領国内での役割）を想定していく。

1-5.城郭の各施設の部位名称について

曲輪（くるわ）

城郭内部の平坦地のことで、建物などの内部施設を配置し、戦時の兵卒の駐屯空間とした。近世以降の城郭では「丸」と称させる（本丸、二の丸、三の丸など）。　室町期以前の山城では、山丘頂部に発生した天然の地形をそのまま利用し、ほとんど土木の手を加えないラフな利用形態の曲輪もあった。そうした曲輪造成の程度の差も、城の年代判定の手がかりとなる。（許斐岳城の攻防戦では、「甲の丸」「詰丸」と文書に現れている。）

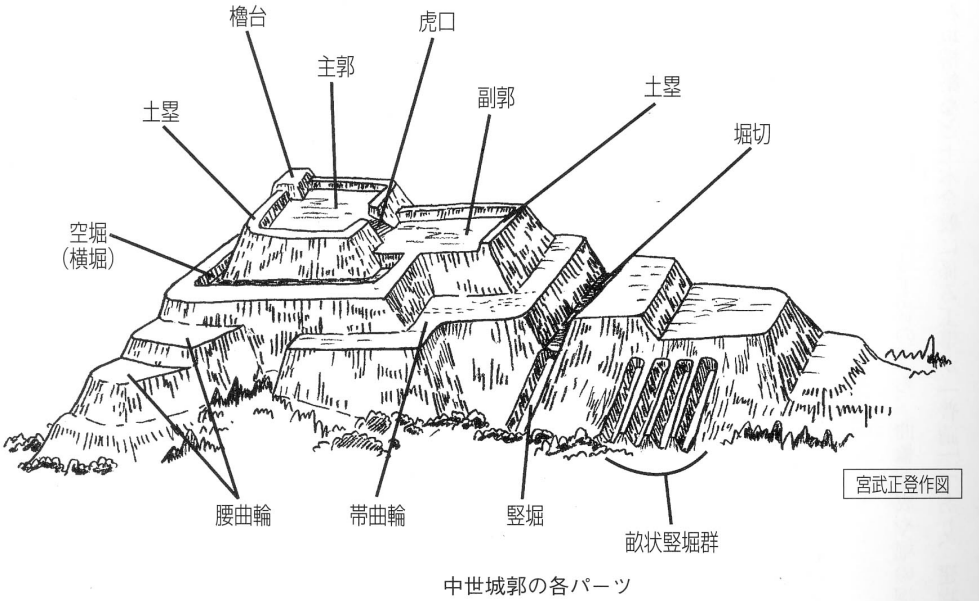
帯曲輪（おびくるわ）、腰曲輪（こしぐるわ）

特定の曲輪を補佐する目的から付設された小規模な曲輪のうち、主要な曲輪の袖周りを廻る狭長な廊下状の形態を取った曲輪を「帯曲輪」と称する。一方、帯曲輪ほど長くなく、主

要曲輪の袖の一部のみを網羅する小曲輪を「腰曲輪」と言う。（帯曲輪の分りやすい例として　名残城）

主郭（しゅかく）・副郭

城郭の中心部に該当する曲輪の名称は、近世以降には「本丸」という用語が全国的に定着していくものの、戦国期以前には統一的名称がはっきりせず、東北・南九州の「上城」や「本城」、東国の「実城（みじょう）」、中部から西国の「一の曲輪」など、地域的相違が著しい。そのため中世城郭研究上の学術用語としては「主郭」と表現される。また、複数の



城郭の各施設の部位名称　宮武正登著「基山町の中世城館」(1)より

曲輪で中心部が構成される場合、その中枢となる「主郭」を補佐し次位に列する曲輪を「副郭」と称する。

切岸（きりぎし）

曲輪の縁辺部（塁線）から外法面にかけての造作では、外敵の登頂を阻むために地盤をできるだけ垂直に切り落として、壁のように仕立てることが多かった。必然、エッジに当たる曲輪「岸」部は、断面直角に近い急崖状となるが、そうした塁線を特に「切岸」と称した。なお、中世前半の城郭は、土木力の投入度が後世より低いために、相対的に曲輪内部の平坦化も不徹底で「岸」も曖昧な例が多い。

土塁

土を盛って築いた土手の一種で、曲輪の岸上に設けて障壁とした。塀・柵の基壇となることが多く、大型のものになると簡単な物見櫓を載せることもあった。（この場合は特にその部位を「櫓台」「物見台」と称する。）なお、耐久性を高めるため、土砂だけではなく石材を用いて塁状に構築したものは、法面に石積みを施しただけのものを含めて「石塁」と別称する。

虎口（こぐち）

曲輪の出入口のこと。門や木戸が設けられた空間全体を指す。時代や地域ごとに特徴のある平面形態をなすために、その城の構造的発達度や遺構の形成時期を判断する上での重要な指標の一つとなる。

空堀（横堀）

外敵の進攻を遮断するため、曲輪の袖回りなどで、等高線を辿るように走行する堀を言う。字句のごとく水は溜められていない。

堀切

空堀の一種に類型つけられるが、曲輪周囲を巡る構造ではなく、二つの隣り合う曲輪間や尾根地形の途中ないし鞍部などで「切り通し」状に設けられる堀で、主に単一方向からの進攻の遮断を意図している。堀両端が「竪堀」と直結し斜面上にまで延長する例が圧倒的に多い。

竪堀

山城の山腹における攻城側の横移動を妨げる目的から斜面に設けられる堀で、等高線に直交する走行で堀削された空堀を指す。ちょうど巨大な「滑り台」が斜面を駆け下りるような形状になる。この堀を何条も連続配列し、各堀の間に土塁を盛って遮断性を高めたものを、特に「畝状竪堀群」とか「畝状空堀」「畝状阻塞」と称する。（畝状竪堀の例として、岳山城、白山城、片脇城、宮永城）

縄張（なわばり）

「テリトリー」の隠語ではなく、築城の最初に用地上に縄を張って、土木施行の予定線を明示する行為を指す。そのため、城造りの最初のプロセスを示す用語として使われる一方、現地での平面設計作業とも同義である。また、曲輪配列や堀と土塁の走行から形成される、城郭の空間構造（グランドプラン）を示す用語でもある。

普請・作事

築城工程のうち、曲輪造成や堀の堀削、石垣構築など土木全般に係る工事が「普請」であり、建物施設の工事が「作事」である。すなわち築城工事は、「縄張」→「普請」→「作事」というプロセスで進められる。

2.宗像郡の地理的状況と宗像氏について

2-1.宗像郡の地理的状況

2-1-1.筑前国の立地と様相

宗像郡のある筑前国は、十五の郡を有する大国であった。その立地は、玄界灘に面し、朝鮮半島や大陸にも近い利点から中世国内有数の国際商業（貿易）都市として発展した博多を有し、またそのことが博多の利権を狙い筑前国を領有化しようとする周辺の大勢力の影響を受ける原因にもなった。そのような状況下、筑前国内の諸国人衆は、戦国大名化の道を模索しつつも、常に周辺の大内氏、毛利氏、大友氏等の、巨大な戦国大名の牽制を受け、筑前一国を支配できるような突出した勢力には成長しなかった。

戦国期の筑前国には、一郡から数郡を有する秋月・高橋・原田・筑紫・杉・麻生等の諸氏が割拠していた。宗像氏も、宗像郡を中心に領主制を展開し戦国大名化を狙っていた国人といわれる領主の一人であった。

2-1-2.関門地域と博多の中間に位置する交通の要衝

宗像郡の立地は、中世、国内有数の国際商業都市博多と九州の玄関口「関門地域」の中間に位置しており、関門地域と博多の中継地点である海陸の交通の要衝であった。時代は下るが、宗像氏の領主としての支配が終わった後、筑前国主となった小早川隆景の時代、関門地域の小倉と小早川隆景の居城名島を結ぶ飛脚の中継地としても、宗像が指定されている。

（「天正廿年正月廿四日豊臣秀吉朱印条」『小早川文書』）

「小早川家文書」　豊臣秀吉朱印状

御本陣より次飛脚事、従（筑前）名嶋宗像迄、何時茂御朱印次第、急速可差遣之旨、堅可被申付候也、

（天正廿年）正月廿四日（秀吉朱印）

羽柴筑前侍従（小早川隆景）とのへ

御本陣より次飛脚事、従宗像小倉迄、何時茂御朱印次第、急速可差遣之旨、堅可被申付候也、

（天正廿年）正月廿四日（秀吉朱印）

羽柴筑前侍従（小早川隆景）とのへ

宗像は、その地理的環境から、博多を狙う中国地方の大勢力（大内・毛利氏）の影響を他の筑前の地域より受けやすい位置にあった。

2-1-3.海岸線に富み多くの島や浦を有している

玄界灘に面し、その海域には、福岡県最大の島「大島」を初めとして地島、勝島、沖の島等の島々や、津屋崎、神湊、鐘崎等の浦を有し、古代から海に生きる民を育んできた。鐘崎は、海域を響灘と玄界灘に分ける。また、宗像沖の海域は、地の島瀬戸をはじめとする海の難所であり、海岸への漂着物である寄物は、古くより宗像社の修理費用に充当される慣わしであった。

2-2.宗像氏について

宗像の中世は、当地の領主であった宗像氏の歴史といっても過言ではない。宗像氏は、古代からの宗像社（辺津宮、中津宮、沖津宮）の大宮司であり、宗像社信仰の頂点に立つ祭祀を執り行う神官であった。それと同時に、宗像郡を中心に展開する宗像社の社領を経営する筑前の有力な在地領主であった 。また、玄界灘に面し、多くの浦や島を有する宗像郡の海域は、古代から、海に生きる民を育み、宗像氏は、対外的にこの海域の倭寇の支配者としても認識されていた。（『李朝実録』世宗十一年（1439）十二月乙亥条） 宗像氏は、浦や島を支配する海上勢力として、内外に認識されていた。

室町時代に北部九州に勢力を伸ばした、周防国を拠点とする大内氏は、宗像郡を含む筑前国をその支配化におき、宗像宮の大宮司職は、大内氏の裁定により決定されるなど、影響力を強めた。宗像地方の領主として最後の大宮司氏貞の父、宗像正氏（黒川隆尚）は、大内義隆に従い山口に居住している。そして、当地で黒川庄を賜り黒川姓に改姓。正氏は、大内氏の信任厚く、大内氏の水軍である警固衆を指揮するなど活躍している。

2-3.宗像氏貞について

2-3-1.宗像地方の領主としての最後の大宮司

天文十四年（1547）生まれ～天正十四年（1586）死去、四十二年の短い生涯を、大内、大友、毛利等北部九州支配を狙う強大な戦国大名の狭間で、時に応じて主家を変えながら、乱世の宗像地方の領主として家臣団を統率、宗像の民を守り懸命に生きた宗像大宮司である。

2-3-2.その勢力範囲

最盛期には、宗像郡並びに、鞍手・御牧（遠賀）郡の一部を領有（現在の、宗像市、福津市、宮若市、鞍手郡鞍手町、遠賀郡岡垣町、遠賀町）

3.宗像氏の城郭

3-1.宗像宮（辺津宮）を囲む諸城と宗像氏代々の居城片脇城

3-1-1.田島

田島は、宗像宮信仰の中心であり、海陸の交通の要衝。また、宗像の政治経済の中心であった。片脇城のある宗像市田島には、古来より海上交通の守り神として、広く知られている宗像三社の一つ辺津宮がある。古来より宗像社の大宮司であった宗像氏は、同時に宗像地方を支配する領主でもあった。

辺津宮は、『筑前国続風土記』によると、古くは海濱宮と記載されており、文字通り当時の田島の地は、入江で海浜に面していたと思われる。同じく宗像三社の一つ中津宮のある大島への連絡船が現在も就航している外海に面した神湊を外港とし、田島は内港的な関係にあった可能性も考えられる。

また、田島の地を東西に古代から道路が通じており、海陸ともに交通の要衝であった。田島の地は、宗像宮信仰の中心であり、宗像の政治、経済の中心であったと思われる。

田島『筑前国続風土記』

「宗像大宮司宅は、田島村の境内、本社の南に在。方百餘間。其跡今は田となれり。是大宮司中世より代々の宅地也。近世の氏男迄は此所に住む。氏貞の時兵乱を恐れて、常には赤間の蔦が岳の城に住し、祭礼の時のみ此宅に来りしとかや。」

※宗像大宮司居館について花田勝広氏は、大宮司居館を表す御内の字名の伝承が、現在では途切れてしまっており、はっきり特定はできないものの、大宮司妻室宅を示す御東のホノケが田島公民館の位置にあったと伝わっていることなどから、大宮司居館は、氏八幡社の東側の水田に比定している。

吉田　京道『筑前国続風土記』

「吉田村の前に道有。京道と云傳ふ。是より垂水内浦へ越す。昔京へ上り行大道成しよしいへり。」

名兒山『筑前国続風土記』

「田島の西の方也。勝浦より田島へ越嶺也。田島の東の麓を名兒浦と云。昔勝浦潟より名兒山を越、田島より垂水越をして、内浦を通り、蘆屋へ行し也。是昔の上方へ行大道也。」

宗像氏貞期の勢力範囲
国土地理院地勢図１：200,000
福岡を基に作成
響灘
玄海灘
麻生氏
赤間庄
野坂庄
西郷庄
若宮庄
杉氏
吉川庄
戸次氏
秋月氏
○○宗像氏領内の城郭
●◆他勢力の城郭
◇◆鉱状堅城が確認できる城郭
推定道路

宗像氏貞期の勢力範囲

3-1-2.片脇城とともに辺津宮を囲む三つの城

3-1-2-1.北　吉田城（十郎ヶ城）　宗像市吉田

吉田城に比定される前障子山

釣川東岸にあり、南を釣川支流の樽見川が流れている。古代からの道路（京道）が、遠賀方面より樽見峠を越え、樽見川沿いに続いている。そこから宗像社付近で釣川を渡河し、そのまま西へ進み、片脇城と勝浦岳城の間を津屋崎方面へ抜ける。吉田城は、この道路を監視するための城と思われる。

「山上に平なる所二反許あり、五月浜に近し、里民は十郎カ城と云」『福岡県地理全誌』

樽見川の北、前障子山に比定される。西の谷に崩れた石塁を伴う削平地あるも、明確な城郭遺構は見当たらない。大障子城との混同も考えられる。

3-1-2-2.東　大障子城（津瀬城）　宗像市多礼

大障子城

麓の「滝の口」には、一時期、大方様（宗像氏貞の母）の居館があったと伝えられている。現在、山頂は、貯水槽が設置され改変されている。城の遺構としては、鎮国寺方面の尾根上に堀切が３条確認できる。

「山上平地二所有。凡三百坪許（略）山中に所々堀切有。宗像大宮司代々の居城なり」『筑前国続風土記拾遺』

3-1-2-3.勝浦岳城　福津市勝浦

勝浦岳城

名子山より南に続く尾根にあり。辺津宮より津屋崎方面へ抜ける通路（大坂越）を直下に望む位置に削平地あり。同通路を監視するための城と思われる

3-1-3.片脇城の遺構について

片脇城の遺構は、現在の興聖寺裏手の山にある。（興聖寺は、宗像氏代々の位牌があり、宗像氏の菩提寺である。）南北に長く伸びる尾根を主として、そこから派生する尾根にも遺構が残っている。その範囲は、東西約300m、南北約500mに渡る。

片脇城

片脇城の構えは、総じて東側を向いており、旧興聖寺跡（Ａエリア）と色定法師墓裏の谷（Ｂエリア）を囲むように、尾根上に曲輪を重ねている。また、それぞれの尾根が連結するＤエリアの南に伸びる尾根の最高所を主郭とした構えになっている。

初期は、麓に近いＡエリアに城館を構え、有事の際、谷部のＢエリアに逃げ込むような構想のもとに作られたのではなかろうか。そして、Ｂエリアを守るために、谷を囲む尾根ＣＥを中心に削平を加え、曲輪を設置してきたものではないか。最終的に、戦国期になり、山上に居住機能も含めた施設の構築が必要となり、ＣＤエリアに大規模な削平を加え、広大な曲輪群を作り出したものと考えたい。

なお、城が占地している山は、標高100m程度の緩やかな山である。戦国後期、宗像氏が拠点とした他の大規模城郭（白山城318m、蔦ヶ岳城369m、許斐岳城271m）に比べると、要害性に劣ると感じざるを得ない。特に、最高所Ｄ1-１につながる西に下る尾根には、

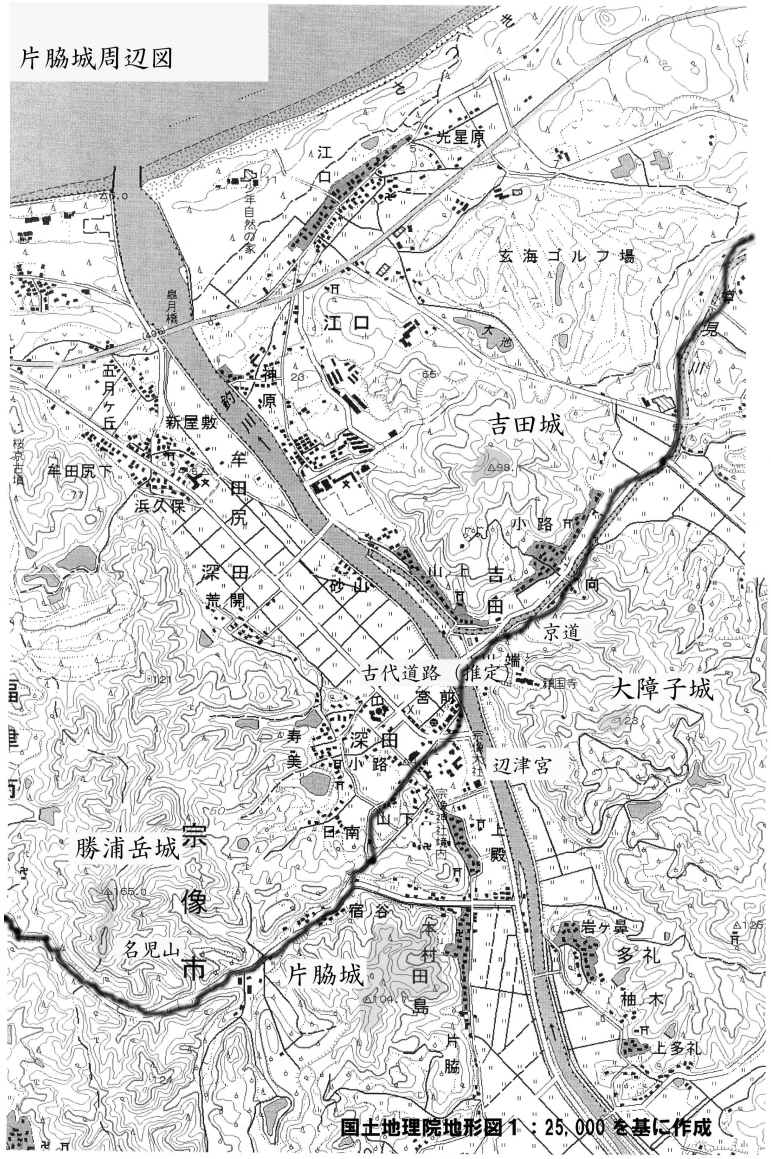
D1-１を掘り切って（ｈ１）独立させた他に防御施設はなく西からの備えは非常に脆弱である。

ただし、Ｆエリアのみは、他のエリアに比べると標高は低いものの天然の要害に畝状竪堀等を使用することにより、厳重な武装をしている。なお、図示できなかったが、CDEエリアに図示した曲輪の周囲には、用途不明幅２ｍ弱の帯状の削平段が複数廻っている。当時のものか後世の造成か判断がつかない。

3-1-4.宗像氏の代々の居城としての片脇城

当城は、伝説上の人物とも言われる初代大宮司清氏が居所を構えたなどの伝承が残り、宗像では、最も古い時代から現れている城館であり、宗像氏代々の居城である。『宗像記追考』には、大宮司職をめぐる宗像氏一族間の争いの記述がたびたび出てくる。古い時代では、天養元年（1144）氏平、氏信が争い片脇館を焼くなどの記述がある。この当時は、山城としての機能はなく、麓に館を構える程度のものだったのかもしれない。

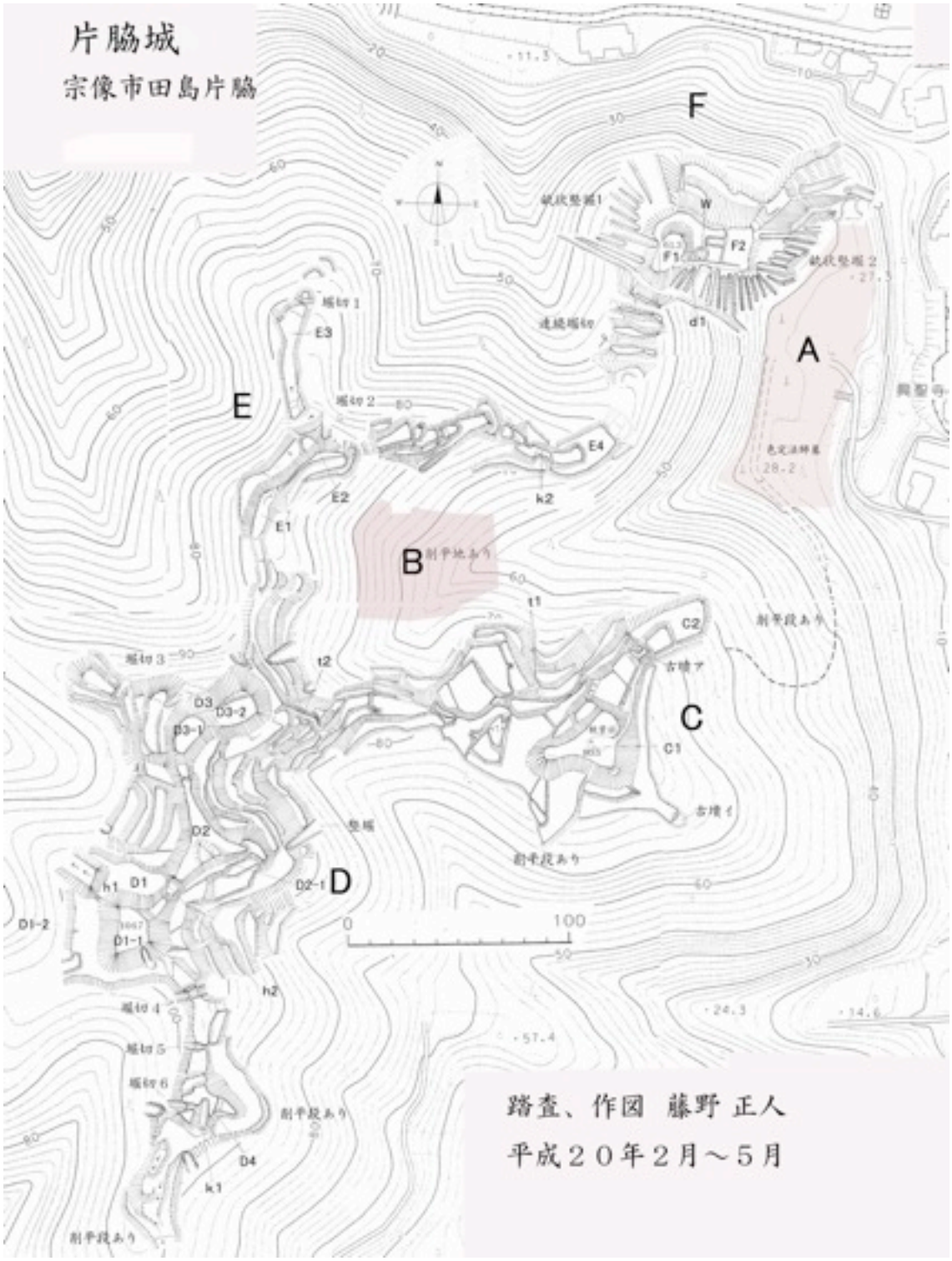
15世紀末明応年間、興氏、氏佐との争いの中ででてくる葦間ヶ谷、岩ヶ鼻などの古戦場は、当城の近くであり、当城も戦乱の中で、次第に山城としての機能を整備されてきたものと考えられる。『筑前国続風土記』によると、宗像地域の領主として最後の大宮司宗像氏貞の先代、氏男の代まで、田島の大宮司館に住むとあるように、氏男のときまで、田島が宗像の政治の中心であり、同時に、辺津宮に最も近い当城が、宗像氏の居城として機能していたと思われる。



片脇城周辺図

宗像氏貞（黒川鍋寿丸）は、天文二十年（1551）九月一日陶晴賢の謀反により大内義隆（周防、長門、石見、豊前、筑前守護）に殉じた先

代宗像氏男（黒川隆像　正氏養子）の跡を継ぐため、陶晴賢に推されて、同年九月十二日宗像に入部する。しかし、片脇城に入らず、亡父宗像正氏（黒川隆尚）の隠居城でもあった白山城（宗像市山田）に入り反対派の制圧に成功し大宮司職を継ぐ。



片脇城縄張図

しかし、大内氏の滅亡後、永禄二年（1559）大友氏の支援する宗像鎮氏の侵攻により大島へ避難する等、動乱の時期を迎えるが、その後、毛利氏の支援もあって、旧領を回復し宗像郡一円及び、遠賀、鞍手郡の一部までを支配し最大領域を確保する。そして、筑前国でも有数の国人領主としての地位を得た永禄三年（1560）より、遠賀、鞍手郡経営をも見据えて、蔦ヶ岳城（宗像市陵厳寺）を大改修し岳山と号し居城をこれに代える。

このような中で、氏貞は、「兵乱を恐れて常には蔦ヶ岳城に住み、辺津宮のある田島には、祭礼のときのみ、仮の館に入り滞在した」『筑前国続風土記』と伝えるところから、田島の地、すなわち田島地域の主城である片脇城の脆弱性を認識していたため、居城をより要害性の高い白山城、蔦ヶ岳城に移したとも考えることができる。また、そのため片脇城は、本城としての機能を失っていったものと思われる。

さらに、永禄十一年（1568）秋、大友勢が田島に乱入し、当城の城域内にあった興聖寺も荒廃した『筑前国続風土記拾遺』と伝える。この時期には、片脇城は、城としての機能自体低下し、廃城同然だった可能性も考えられる。

また、宗像社の信仰の中心でもあった辺津宮もこれに先立つ弘治三年（1557）焼失しており、田島の地は、動乱の時期に本城移転による政治的な機能を失い、さらに祭祀の場としても荒廃していた姿が窺える。

氏貞は、その後、大友氏との和睦後、束の間の平和を得た天正六年（1578）に、長年の悲願でもあった辺津宮第一宮本殿の再建を成し遂げる。

3-1-5　片脇城と小金原合戦

前述のように、戦国後期、本城としての機能を失い、その機能を低下させたと考えられる片脇城であるが、天正十年（1582）に宗像氏貞が、小早川隆景に送った、気になる一通の文書がある。

（史料）無尽集　山口県文書館所蔵

（天正十年）卯月廿六日　宗像氏貞　小早川隆景宛書状

態敬上候、

一　去十一月十二日至毛利鎮真要害高鳥広、戸次道雪兵粮差籠候条、翌日十三待請於吉川庄、敵切寄山下数ヶ度遂防戦、忰者以下尽粉骨候、勿論敵数輩討果、手負不知其数候、家頼之者共、是又手負討死数十人、誠砕手候、同十四日許斐岳取付、人数差籠候所二、愚領分、宮地岳従立花城取候間、即時二田島・宮永両口二向城銘々申付、至今日、鉾楯無寸暇候、仁保隆慰迄遂注進候ツ、於于今者不及申候、宝満、立花相詰候、山道故、無気遣往返候、両家之襲以一家之力可申付事、気遣仕候、（以下、略）

省略しているが、全七か条からなるこの書状は、北部九州の情勢を伝えるとともに、毛利氏に九州へ目を向けて欲しいと訴えている。具体的には、天正六年（1578）の耳川の合戦により、九州の最大勢力であった大友氏の衰退、それに伴う島津氏の北上、竜造寺氏の北部九州での勢力拡大の中で、北部九州の反大友勢力である竜造寺、秋月、筑紫氏等を糾合して、筑前の大友勢力（立花城主戸次道雪、宝満城主高橋紹運）に当たるよう毛利氏より影響力を駆使して欲しいという内容である。当地筑前では、書状に表されているように、前年の天正九年（1581）、後世、「小金原の合戦」として知られる戦国期鞍手郡最大の合戦が起きている。

天正九年十一月十二日立花城督戸次道雪は、同じく大友方の毛利鎮真（実）の鞍手郡鷹取城（直方市）へ兵糧を輸送した。翌十三日に、戸次勢の帰途を、宗像勢が待ち伏せし同郡吉川庄（宮若市）で合戦となった。宗像勢は、奮戦し戸次勢数人を討ち取ったが、味方も、多数の戦死者並びに負傷者を出した。そして、この合戦以降現在に至るまで、戸次勢と戦闘状態が継続していることを伝えている。
この書状の中で、気になる箇所がある。

この合戦で、戸次氏と戦闘状態になったことにより、宗像氏貞は、合戦の翌日十四日、宗像領西部防衛の拠点、許斐岳城（宗像市王丸、福津市八並）に、兵員を増強した。しかし、戸次勢の動きは早く、宗像領、宮地岳城（福津市宮司　写真3-1-5）を攻略した。そのため、さらに戸次勢の宗像領内侵攻に備えるため、宗像領北部宗像郡田島（宗像市）と宗像領南部鞍手郡宮永（宮若市）に、急遽、城の整備を行ったことを伝えている。

この、田島と宮永の二つの向い城であるが、位置から判断すれば、宮永の向い城は、宗像氏の若宮庄支配の拠点である、宮永城と思われ、田島の向い城は、片脇城と思われる。では、片脇城に、この文書に現れる、氏貞が指示した、向い城としての痕跡は残っていないだろうか。宮永城と片脇城に共通した部分は、多数の畝状竪堀群の設置である。

畝状竪堀は、宗像領の他の城郭（岳山城、白山城）にも使用例があり、それだけで、天正九年の改修と断定することはできないが、片脇城の畝状竪堀を設置している場所がＦエリアのみに限定されていること。また、このFエリアが、５条の堀切を設置することにより、他のエリアから独立した一城別郭の造りになっていること。そして、何よりもFエリアの位置が、前述したように、片脇城の最も北に位置し、当時立花勢が奪取した宮地岳城のある津屋崎方面と辺津宮を繋ぐ道路を押える場所に立地している。これらのことを考えると、Ｆエリアがこの時期改修された、田島の向い城と考えてよいのではないだろうか。

なぜ、Fエリアのみの改修に留まったのか？片脇城は、かつて宗像氏の本城として広大な城域を持った城である。しかし、天正九年（1581）当時、本城としての機能を失った片脇城には、その広大な城域に見合った人数を籠もらせること、そして、決して要害に富んだとはいえないその城域すべてを維持することは困難であったと考える。

小金原合戦後の政治情勢から急遽最前線の城になった片脇城をコンパクトにまとめ、当時宗像氏の有する最高の技術として畝状竪堀等を設置し、針ねずみのように武装させ要塞化した姿が、Ｆエリアの遺構として残っていると考えたい。また、このFエリアの規模自体が、当時氏貞が田島方面の防衛に動員できた戦力そのものを反映しているとも言えるだろう。

おそらく、宗像氏の本城であったときの中心であったＤＣＥエリアは、放棄せざるを得なかったため、畝状竪堀などの設置が行われなかったと考える。

3-1-6.唐傍氏の勝村岳在番について

年未詳であるが、立花山城を拠点とした大友氏の城督戸次道雪、統虎父子が、唐傍氏に出した一通の書状がある。内容は、鍋嶋氏とともに、勝村岳という城砦に配置された唐傍氏の在番の功績を労い、それに報いるために恩賞として四町の土地を預け置いたというものである。

戸次道雪（鑑連）・統虎連署預ヶ状　『小金丸文書』

毎々如申、去年以来鍋嶋長門守以同心、於在々所々別而励粉骨、或分捕高名被疵、或戦死之輩、慰々事毛頭無忘却候、殊至**勝村岳**聢在番、名（各）辛労之次第、難尽紙面候、仍於両郡中間四町分坪付有別紙事、預置候、可有知候、恐々謹言、
二月廿八日

（戸次）統虎（花押影）
道雪（花押影）

唐傍新四郎（虎政）殿

天正十四年(1586)島津軍の大軍を相手に三笠郡岩屋城で玉砕した高橋鎮種の子で、天正九年(1581)頃戸次道雪の養子となった戸次統虎（後の柳川藩主立花宗茂）が唐坊虎政に発給したこの文書に記載されている勝村岳は、どこにあり、そして、唐坊虎政は、いつ勝村岳の城砦に城番として籠り、どの勢力と敵対していたのであろうか。

戸次氏がその領域として支配した糟屋郡、蓆田郡の城砦の中に勝村岳は現在のところ確認できない。

文書に記載された戸次氏の家臣と思われる鍋島氏については、前項の天正九年に起きた小金原合戦の着到状に鍋島姓が数名確認できることから鍋島の一族が小金原合戦に参加していることがわかる。

さらに、戸次氏側の記録である、「豊前覚書」には、この小金原合戦の直後、戸次氏は、宗像領に侵攻し、宗像領内の宮地岳城（福津市宮司）と灰塚（位置不明）という城砦を奪取し、戸次氏側の城番を置いていることがわかる。

その中で、宮地岳城の番将として配置されたのは、鍋島飛騨守であった。そして制圧した宮地岳地域の郷人（地侍か）を鍋島飛騨守の指揮下に入れていることがわかる。

五　立花御籠城之次第　『豊前覚書』

（上略）
一　右同年（天正九年）、院内、宮司嶽・灰塚両切寄せ御捕被成、灰塚ニハ内田源暑・足立対馬、番代ニ被仰付、院内之衆御付御番被仕候、宮司嶽ニハ鍋嶋飛騨守へ郷人手ニ付、番仕候へと被仰付候、
一　右同年、つくミ嶽御捕誘、院内之衆御番被仰付候、其後、大津留宗衆御番被仕候、

この宮地岳の山麓には、中世の国際貿易都市博多の外港として機能したのではないかと推定される、津屋崎の港湾があり、唐坊の地名が残っている。

そして、『宗像大宮司天正十三年分限帳』によると当地宮地郷には、その地名を名字とした唐坊氏の一族が居住していたことがわかる。

「**宗像大宮司天正十三年分限帳**」
宮地郷衆　七町　唐坊帯刀丞
　々　　弐町　唐坊新八

『小金丸文書』の唐坊虎政は、旧姓は小金丸姓であり、その中で小金丸一族は、志摩郡小金丸（糸島市）を名字の地とした地侍であった。泊・元岡・古庄氏らとともに「志摩郡衆」と呼ばれ、大友氏の麾下、柑子岳城（現在の福岡市西区今津・草場）城衆として活動した。

天正六年（1578）大友氏が、日向高城の戦いにおいて島津氏に大敗すると、北部九州における大友氏の影響力は著しく低下し、筑前でも各地の国人領主たちが、大友氏からの自立の動きを見せる。小金丸氏の名字の地志摩郡においても怡土郡高祖山城の原田氏が大友氏の志摩郡における拠点柑子岳城を圧迫し、大友氏の派遣した柑子岳城督木付氏は、城を退去し戸次氏領内へ移転する。恐らく小金丸氏を初めとした志摩郡衆も反大友氏の原田氏の幕下になるか、名字の地からの退去を選択せざるを得なかったのであろう。虎政の一族は、原田氏の幕下になるのをよしとせず、戸次氏の領内に退去したものと思われる。その後、戸次氏と宗像氏が小金原合戦後戦闘状態となり、戸次氏が制圧した宮地郷の唐坊の一族との関わりが想定される唐傍虎秀の養子となったものと推定される。

小金原合戦により始まった戸次氏の宗像郡侵攻は、天正十二年（1584）三月二十四日五国二島の太守とまで言われた龍造寺隆信が肥前沖田縄手で戦死したのに乗じ、北部九州における失地回復を目指す大友氏の筑後出兵に、戸次氏が参加するまで継続する。

以下文書は、宗像氏貞が、田島衆の深田氏に発給した感状である。年未詳であるが、深田氏が敵対勢力と戦いに及んだのが、戸次氏が制圧した宮地郷と宗像社辺津宮の間にある勝浦（福津市勝浦）であることから、時期的に最も可能性があるのは、小金原合戦後の戸次氏の宗像領侵攻時と考えられる。

宗像氏貞感状　『嶺文書』

去月廿一日勝浦年毛表伏勢之時、懸合遂防戦之、氏栄高名無比類候、并良（郎）従又四郎被手火矢疵左股一ケ所、粉骨之次第、誠感悦也、弥可抽馳走事肝要之通、可被申与候、恐々謹言、

三月十二日　　（宗像）氏貞（花押）

深田中務少輔（氏栄）殿

戸次氏の小金原合戦後の宗像領侵攻が、勝浦まで及んでいたとすると、戸次統虎、道雪の唐坊虎政宛の連署状に記載された勝村岳城は、宮地郷と、宗像社辺津宮のある田島との間にある、勝浦岳城（福津市勝浦）と考えられないだろうか。

もし、そうであれば、宗像氏は、天正九年の小金原合戦の大敗により戸次氏の領内侵攻を許し、領内北部方面においては、宗像氏の信仰の中心地である宗像社辺津宮を眼下に望む勝浦岳までを戸次氏の制圧下におかれていたと考えられる。

当然、勝浦岳城と向かい合う宗像氏の田島の拠点城郭、片脇城は宗像氏領防衛の最前線となるに至ったと考えられる。多数の畝状竪堀で防備された片脇城のハリネズミのような武装はこのような緊迫した軍事的緊張状態を伝えているとも言えよう。

3-2　宗像氏貞が当初拠点とした白山城

3-2-1.白山城のある山田と宗像氏

釣川支流山田川の上流山田にあり、山田の地蔵尊で知られる増福院の背後の山である。増福院の前には、駐車場もある。（※「白山城址を守る会」により、麓や山中の城郭の施設には、分かりやすい表示板が設置されている。）

宗像と遠賀の境に並ぶ、四塚連山の一つ、孔大寺山（499m）より、西に派生する独立峰に白山城はある。

白山城

山田川は、百合嶺（地蔵峠）を源流として白山と金山に挟まれた山田を通り、須恵、土穴、稲元の土地を潤す。宗像大宮司七代氏高一族は、山田を拠点とし、山田川流域を開発し、勢力を増したと言われる。

3-2-2.白山城の構造

白山城は、白山山頂を中心に、南西に本村増福院へ続く尾根、西に横山方面へ続く尾根、そして、東北、孔大寺山へ繋がる尾根上に曲輪群や、竪堀、堀切、土塁など遺構が残っている。城域は、東西約800メートルに渡る大規模な城郭である。広大な曲輪群や畝状竪堀や堀切を組み合わせた備えは、戦国期の城郭の様相をよく残している。現在の遺構は、宗像地方の領主宗像氏貞が、宗像入部より、岳山城へ居城を移す永禄五年（1562）まで本城として機能していた時期の姿を残している。主曲輪は、各尾根が連結する最も面積が広い白山山頂曲輪Ⅰ(318.8m)だと思われる。特徴的なのは、増福院へ下る尾根と、西へ続く尾根の間に、畝状竪堀Ａを設置し、尾根の遮断と緩斜面における敵の移動を

白山城縄張図

阻害している。竪堀の数は20数条を数える。西へ続く尾根は、竪堀の先端に横堀とも言えそうな土塁を伴う大きな堀切を設置し、西尾根からの侵入に備えている。

西方横山方面へ長く続く尾根には、やせ尾根に曲輪群（Ⅳ）や竪堀、堀切を設置しているが、特に尾根を遮断する目的で設置されたと思われる麓まで続く長大な二条の竪堀（竪堀Ｃ）は圧巻である。

城域の最も東、最高所324mのピークにも主郭を縮小したような二段からなる曲輪（Ⅲ）と孔大寺山へ続く尾根を破壊する目的で6条の竪堀からなる畝状竪堀Ｂを設置し孔大寺方面からの侵入に備えている。

増福院へ下る尾根は、竪堀の先に三段の曲輪（Ｖ）が設置され、さらに、そこから増幅院方向に尾根を遮断する竪堀が数条あり、竪堀の先には、掘切が二条確認できる。

尚、曲輪Ⅰ、Ⅴでは、少数ではあるが白磁片が採取されており、居住空間として整備されていた可能性も考えることができる。

白山城竪堀

3-2-3.黒川鍋寿丸（宗像氏貞）は、なぜ当初、白山城を拠点としたのか？

白山城の最初の築城は、『宗像記』によると、鎌倉時代の大宮司氏国の築城によると伝えられている。明応年間（1492～1500）興氏と氏佐に始まる宗像氏の大宮司職を巡る争いは、筑前を領国化しようとする周防山口の大内氏の介入を招き、大内氏は、これ以降宗像氏を家臣化していく。また、大宮司職そのものも大内氏の裁定により相続されることとなる。

天文十六年（1547）宗像正氏（黒川隆尚）は、大内義隆の裁許により、大宮司職と宗像の領主との地位を統合し、宗像氏続の実子、宗像氏男（黒川隆像）に相続させることとなる。正氏は、正室との間に生まれた菊姫を娶わせる。家督を譲った正氏は、白山城のある山田に隠居する。そして、この年、山田で没する。

天文二十年（1551）九月一日、中国地方から北部九州に勢力をもっていた大内義隆が、陶隆房の反乱により長門大寧寺で自害した。義隆に従っていた氏男は、義隆に最後まで付き添いともに自害した。その後、大内家督は、陶隆房により、豊後国主大友義鎮の弟晴英（大内義長）を迎え入れ継承させることになる。

義隆と氏男の死は、再び宗像氏の家督争いを生むこととなる。 陶晴賢は、宗像家督を正氏の側室の子である六歳の黒川鍋寿丸（宗像氏貞。以下「氏貞」とする）に継承させるため擁立し、天文二十年（1551）九月十二日周防国吉敷郡黒川より宗像に下向させた。

当時宗像の地には、先代氏男の遺族は健在であり。強行入部と伝えられるように氏貞の相続に反対する勢力も多かったため、氏貞は、当時宗像の中心地であったと思われる辺津宮のある田島の地に容易に入ることができなかったと考える。

白山城は、天然の要害であり、実父正氏が隠居した山田の地にあり、父の遺徳を偲ぶ者も多く、宗像に地盤を持たない氏貞にとって唯一拠点となりうる地であったであろう。氏貞擁立派は、白山城を拠点に、反対派を制圧していくことになるが、その中で白山城も整備改修されていったものと考える。

その後、永禄二年（1559）七月二十四日、十五歳になった氏貞は、自分の家督相続の犠牲となった異母姉らを祀る増福庵に田地を寄進してその菩提を弔っている。

3-3　大友氏との講和を有利にした当国（筑前国）無双の城「岳山城」

岳山城は、宗像市と岡垣町の境、城山（標高369m）に位置。宗像地方の領主としての最後の大宮司、宗像氏貞の本城である。蔦ヶ嶽城・赤間山城とも呼ばれる。

岳山城から白山城

城址は、宗像市陵厳寺、三郎丸、石丸、遠賀郡岡垣町上畑にまたがる。登山口は、いくつかあるが、宗像市側からは、ＪＲ福岡教育大駅前より西鉄赤間営業所横の登山口表示に従っていくと、駐車場のある中道寺登山口に着く。

3-3-1.交通の要衝赤間

城の麓、赤間の町は、現在、鹿児島本線や主要国道である国道三号線が通る。古より博多往還（唐津街道）の宿場町として栄えた古い町並みを今も残し、芦屋方面と、長崎街道の木屋瀬宿（北九州市八幡西区）への分岐点ともなっていた交通の要衝である。

3-3-2.岳山城の規模と構造

岳山城は、山上に残る城の遺構だけでも、東西800m、南北500mの範囲に及び福岡県内でも屈指の大規模城郭である。山頂を中心とする尾根の要所に、曲輪を配置し、それを守るように尾根筋に堀切を設置、特に、山頂より東尾根（門司口）には、急斜面のやせ尾根が続いており、八本に及ぶ大きな堀切を設置している。

曲輪の斜面は切岸（人工的な急斜面）が形成され、その下方斜面には、畝状竪堀群を設置している。特に主郭となる山頂周辺（約70本）や石峠方面（約100本）の尾根に集中的に配置し敵の侵入を許さない構えを今も感じることができる。竪堀の総数は、約170本を数え、北部九州でも最多の部類になるのではないだろうか。

竪堀
茶臼山城
宗像市三郎丸一の構口
100
150
200
宗像市陵厳寺
畝状竪堀
250
至 尾降神社
畝状竪堀
石列
至 石峠
329.3
石列
二重堀切
二重堀切
344.6
300
300
登山道分岐点
通路
至 中道寺登山口
十本杉
防空壕
369.3
三重堀切
城山閣跡
防空壕
畝状竪堀
通路
346.5
通路
遠賀郡岡垣町上畑
328.2
通路
四重堀切
宗像市石丸
至上畑、門司口
0
100
200
岳山城（蔦ヶ岳城）
宗像市陵厳寺、三郎丸、石丸
遠賀郡岡垣町上畑
踏査　平成20年7月～21年1月
田中 伴次郎　大塚 紘作
塩川 三千伸　是永貴志
藤野 正人
作図　平成21年1月19日
藤野 正人

岳山城縄張図

※ 赤間山古城『筑前国続風土記拾遺』
(前略)　今も一の丸　二の丸　三の丸　芦屋堀　新堀　馬立場　馬責場　広丸　城道　陣ヶ尾　水落谷　先陣楠　屋形口　大門口等の名残れり、（後略）

『筑前国続風土記拾遺』が作成された頃には、城の名残を示す地名が残っていたようだが、大半の地名が残念ながら、筆者の聞き取り不足もあると思うが、現在ではどの場所を指しているのか特定できない。

山頂直下の石塁

岳山城尾根筋に設置された堀切

曲輪斜面の切岸

3-3-3.瓦、鉄滓等の出土物の意味するもの

山頂周囲から瓦、鉄滓（てっさい）、土師器、備前焼の陶器片等を採取されている。瓦の採取からは、山上に、当時としては珍しい、瓦葺の建築物があったことが想定される。備前焼等の陶器片は、水瓶等に使用されたことが想定され、ある程度、山上での居住空間が整備されていたことが想像できる。また、鉄滓は、鉄等の金属類を溶かしたときに出る滓である。鏃（やじり）等を製作する鍛冶工房等があったことも想定される。岳山城は、籠城戦に備えた施設が整備されていたことが考えられる。

鉄滓

3-3-4.氏貞が城山（蔦が岳）を本城に選定した理由

岳山城が、現在遺構として残る規模になったのは、宗像地方の領主として最後の大宮司である氏貞の時期の改修によるものと思われる。

氏貞は、大内義長、陶晴賢政権の後援により天文二十年(1551)六歳で宗像に入部し白山城（宗像市山田）

を拠点にしたといわれる。大内氏滅亡後、筑前国領有を目指す大友氏の支援を得た、宗像鎮氏の侵攻により、十五歳の氏貞は、永禄二年(1559)に宗像の地を維持できず大島に家臣とともに渡海する。

独力で大友氏に対抗できない宗像氏は、毛利氏に援助を頼む。毛利元就の支援を得た氏貞は、永禄三年（1560）大島より渡海、鎮氏の拠点許斐岳城を奪回することにより、旧領を回復、その領域は、宗像郡、鞍手郡若宮庄、御牧（遠賀）郡芦屋、広渡まで広がった。

岳山城山頂周辺から採取された瓦

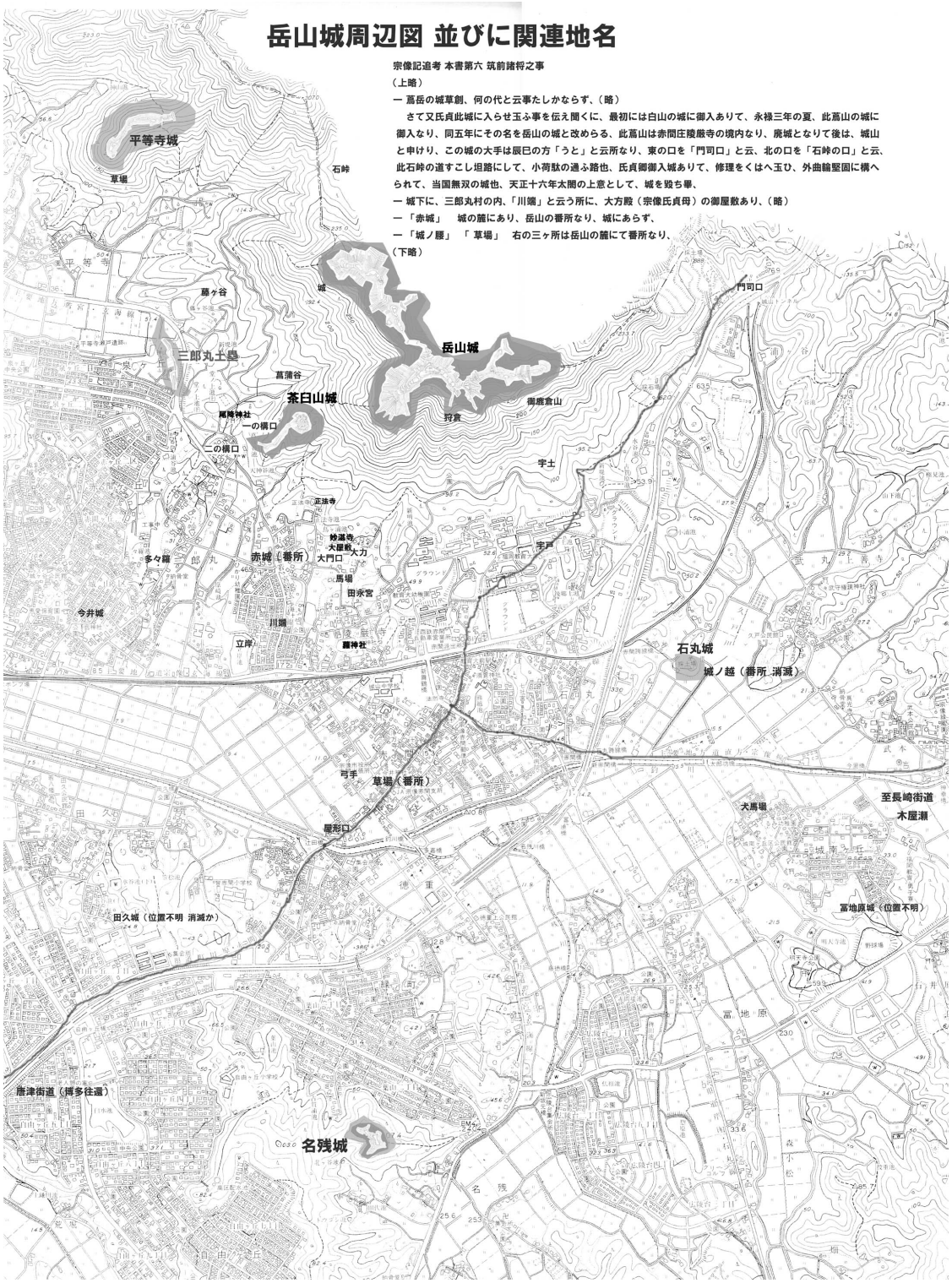
そのような中、同年氏貞は、それまでの居城であった白山城に代え、新たな居城とするため蔦ヶ岳古城の改修を開始する。蔦ヶ岳は、御牧（遠賀）郡、宗像郡の境に位置し、また、宗像郡の南部に位置、鞍手郡にも近く、拡大した領域支配のための選地と考えられる。

また、急峻なその山塊は、天然の要害であり、前年、鎮氏の侵攻により、大島に渡海せざるを得なかった苦い教訓を生かし堅固な城郭の必要性を痛感したものと思われる。その後も、糟屋郡立花城を拠点とする大友勢の宗像領侵攻は続き、宗像氏の西部防衛拠点の許斐岳で双方は激しい戦いを継続する。宗像氏貞は大友氏の攻勢を耐え抜き、永禄五年（1562）遂に蔦が岳の古城は、宗像氏の本城として規模を拡張し完成する。氏貞は、新たに蔦が岳を岳山と命名する。

3-3-5.永禄十二年の立花陣と岳山城

岳山城がその要害の効果を発揮するのは、永禄十二年（1569）の大友勢が岳山を包囲したときである。永禄十二年、大友、毛利の北部九州の支配を巡る抗争も最終段階に到り、吉川元春、小早川隆景に率いられた毛利勢は筑前に侵攻、立花城を開城させる。情勢は、宗像氏が与する毛利氏優位に推移していく。数万の両軍は立花城を中心に対陣し長期に及ぶが、大友氏の支援を受け大内氏再興を目指す、大内輝弘が山口に侵攻したことにより情勢が一変する。

本国に侵入を許した毛利本軍は、撤退を開始。宗像氏貞は、飯盛山の陣を引き払い、すぐさま岳山に籠城する。その後、敗走する毛利勢を追尾する大友勢は、岳山城山麓に陣を取る。



岳山城周辺図並びに関連地名

二十五歳の青年武将となった氏貞は、領民や家臣の家族を、再度、大島、地の島に避難させ、自身は渡海せず、居城岳山城で抗戦の構えを示す。最終的に、氏貞は、必死の外交努力等により、宗像郡西郷など領地の削減を受け入れ和睦するが、下城することなく大友方に宗像の領主として認めさせ、和議をまとめることに成功する。岳山城は、まさに、『宗像記追考』が記すように、当国（筑前）無双の城であったと言っても過言ではないだろう。

3-3-6.城下並びに周辺の諸城砦番所

「本書第六　筑前諸将之事」『 宗像記追考』

（上略）

一　本書に宗像赤間庄蔦ヶ岳の城、宗像四郎氏貞、云々、此氏貞の御事、前に記す事詳なり、

一　蔦岳城の草創、何の代と云事たしかならず、尊氏公建武三年西国下向の時、宗像が館に入せ玉ふとあるは、此蔦山の城に入せ玉ひたるなりと云伝へたり、さて又氏貞此城に入せ玉ふ事を伝え聞くに、最初には白山の城に御入ありて、永禄三年の夏、此蔦山の城に御入なり、同五年にその名を岳山の城と改めらる、此蔦山は赤馬の庄稜（陵）厳寺の境内なり、廃城となりて後は、城山と申けり、此城の大手は辰己の方うとと云所なり、東の口を門司口と云、北の口を石峠の口と云、此石峠の道すこし坦路にして、小荷駄の通ふ路也、氏貞卿御入城ありて、修理をくはへ玉ひ、外曲輪堅固に構へられて、当国無双の城也、天正十六年太閤の上意として、城を毀ち畢、

一　城下に、三郎丸村の内、川端と云所に、大方殿（氏貞母）の御屋敷あり、初は田礼村瀧の口と云処に御座ありけれ共、城よりほど遠ければ、後ここに移り玉へるなり、(略)

一　赤城　城の麓にあり、岳山の番所なり、城にあらず、

一　城の腰　草場　右の三ヶ所は岳山の麓にて番所なり、（下略）

支城もよく配置されており、北に比較的なだらかな峠道である石峠を監視するために、金山より西に派生する尾根に平等寺古城、西に城山中腹標高150mに茶臼山城（宗像市三郎丸一の構え口　※当該丘陵は地元では弥勒山と呼ばれている）を配置、さらに東には、城の越城（石　丸城　宗像市石丸　造成により消滅）を配置している。

山麓には、赤城、大門口、馬場、（宗像市陵厳寺）そして氏貞の母が住んだという川端、一の構え口、二の構え口（宗像市三郎丸）等の城との関連を想像させる小字が今も残っている。

特に陵厳寺の地形は、城山から派生する二つの丘陵に挟まれた要害の地である。西は、赤城から造成によりなくなった高樹山の丘陵ラインと、東は、田永宮から蔦神社に伸びる丘陵ラインに挟まれた要害の地である。

3-3-7.岳山城の城下について、氏貞の館はどこにあったか？

氏貞の平時の居館位置は、不明であるが、推定させる場所として南山麓陵厳寺小字「大力」付近に地元の古老が「大屋敷」と呼ぶ畑があり興味深い。

「大屋敷」の地名については、他の城郭の参考事例として福岡市東区、新宮町並びに久山町にまたがる立花山城がある。柳川藩立花山城絵図には、山麓に建物はないが大屋敷の広大な敷地が描かれており城主居館敷地を推定させる。現在も粕屋郡新宮町立花口の立花山登山口には、「大屋敷」の地名が残っている。

小字「大力」について、佐賀県内の城館調査を行なっている教育庁の担当者より教示頂いた話によると、佐賀県の事例において　「館」→「太刀」→「大力」と地名が変化した事例もあるとのこと。これらを総合すると、陵厳寺大力付近を氏貞の居館の有力候補地としてよいのではないだろうか。

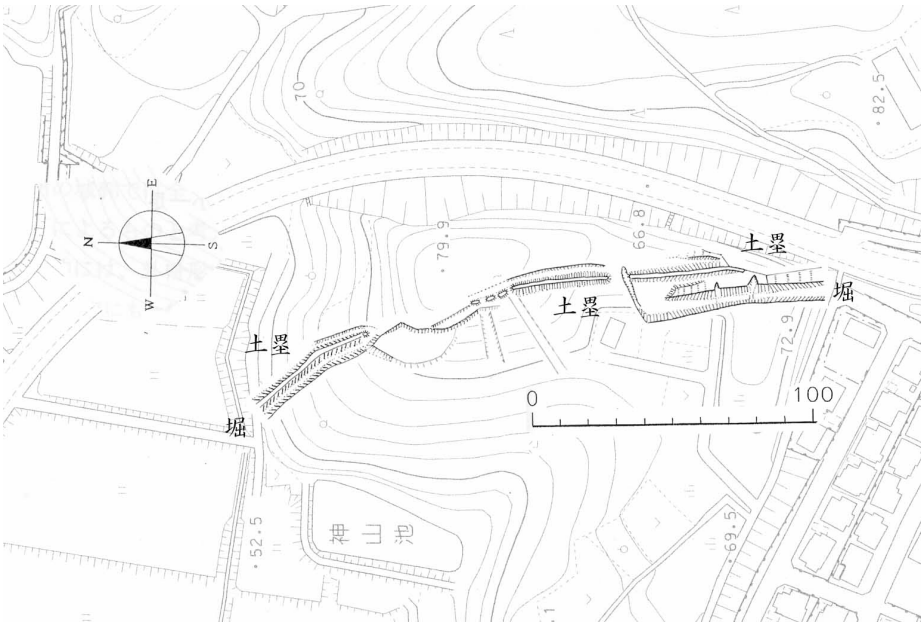
さらに、宗像市図書館蔵陵厳寺区有文書には、陵厳寺地区には馬場屋敷、蔵屋敷など城下集落を推定させる地名が明治初期まで残っていたことが確認できる。

陵厳寺大屋敷

3-3-8.三郎丸土塁

西山麓、宗像市泉ヶ丘付近の主要地方道若宮玄海線沿いには、道路造成等により破壊を受けているが、現在も南北約200mに渡り幅４mの堀を伴う土塁が残っている。おそらく、造成以前は、さらに長かったと思われる。設置時期、主体ともはっきりしないが、岳山城の城下防衛施設の一つであった可能性もある。付近にある地名「一の構え口」、「二の構え口」は茶臼山城を含めこれらの防御施設との関連が地名の由来ではないだろうか。

三郎丸土塁は、近代の破壊でその一部しか現在確認できず、当初はもっと長大に伸びていたと推定されるものの氏貞の居館が陵厳寺だと仮定すると距離が離れており、氏貞の居館のある陵厳寺を防衛する施設としては即断できない。



三郎丸土塁

さて、天正十五年（1587）の豊臣秀吉の対島津九州統一戦において、秀吉が、現在陵厳寺にある正法寺に宿泊したとの伝承がある。この正法寺は、時期は不明ながら、当初、三郎丸の藤ヶ谷にあったという。藤ヶ谷の位置は、ちょうど三郎丸土塁の後背地にあることから考えると、秀吉の居所防衛のために設置された施設の可能性もないだろうか。

当時九州は、秀吉の支配の及ばない地であり、極論すれば敵地である。当然、敵地に入った秀吉は、圧倒的な兵力は有していたもののその交通路や宿泊の警戒には万全を期していたと考えられる。まだまだ、今後の研究が必要であるが、宗像地域の山城には余り見受けられない横堀施設を持つ茶臼山城を含め、三郎丸土塁の設置主体について、豊臣秀吉の可能性も提起しておきたい。

3-4.西部防衛の最重要拠点許斐岳城

許斐（このみ）城、許斐要害とも言われる。

所在地は、宗像市王丸、福津市八並にまたがる許斐山（標高271m）の山頂に位置。

許斐山の標高は、郡内の城山（岳山城369m）や孔大寺山（499m）には劣るものの、宗像郡の中央部に位置する独立した山塊であり、その頂上からはほぼ宗像郡全域を見渡せる。

3-4-1.博多往還(唐津街道)に沿って並ぶ諸城

南側山麓には、博多往還（唐津街道）が東西に走り、八並には、豊臣秀吉に関連する太閤水などの遺跡、さらに西に街道に沿って進むと、許斐岳の支城とも考えられる、螻蛄羽子（けらはご）城（福津市本木）、高宮城（福津市畦町）、さらに、立花領糟屋郡との境に、飯盛城（福津市内殿）が、配置されている。

許斐岳城

3-4-2.許斐岳城の規模と構造

遺構は、標高271mの山頂を中心に谷を挟んで南側の尾根（尾立山）まで曲輪が展開している。山頂で確認できる遺構の範囲は、南北約600m、東西約400mに及ぶ大規模な城郭で

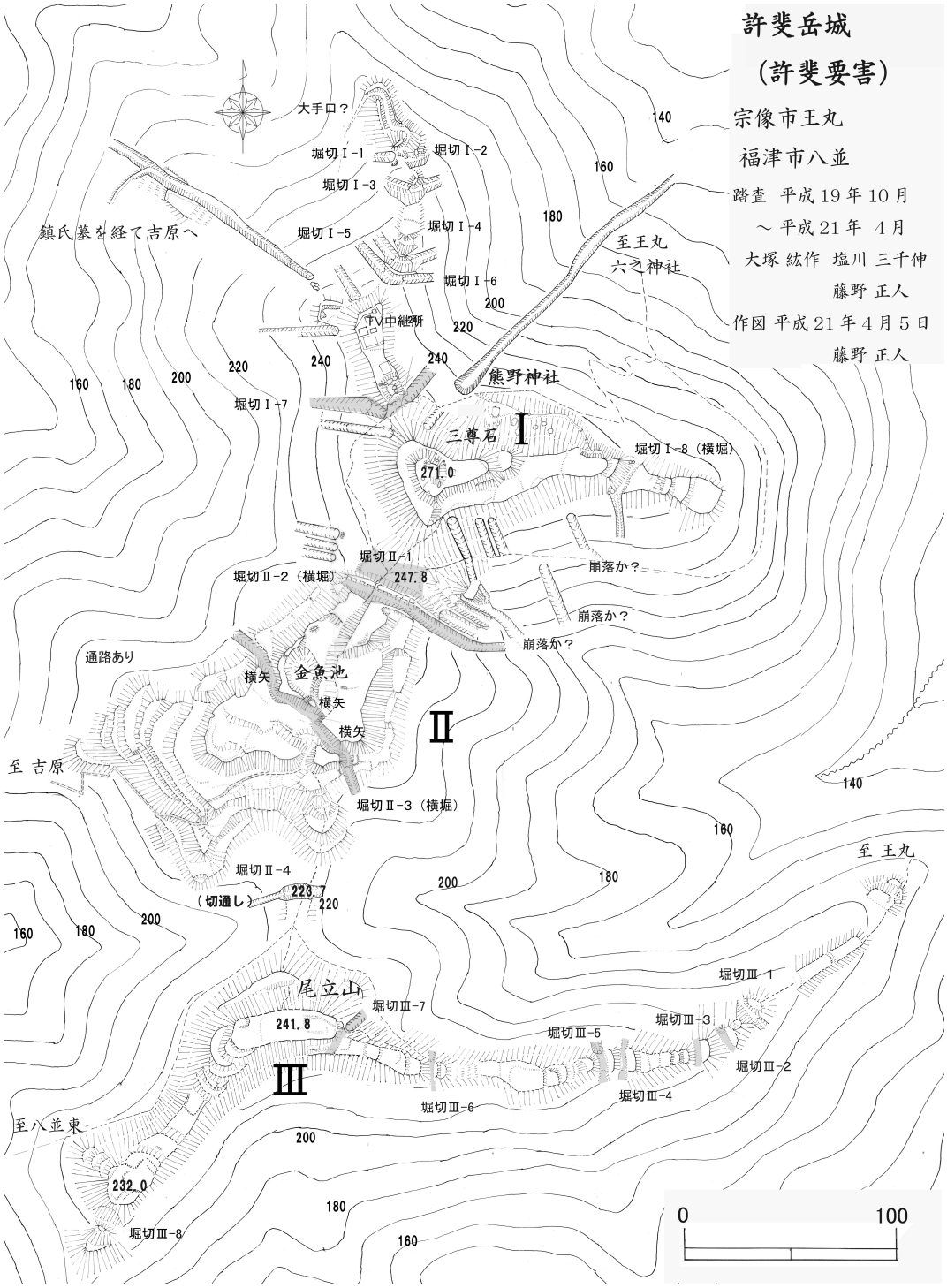
博多往還(唐津街道)に沿って並ぶ諸城

ある。

山頂の遺構は、大きく分けると三つの区画に分けることができる。

Ⅰ区　山頂271ｍを中心に、北と西に展開する郭群である。山頂周囲からは、土師器片や青磁、青花片が採取できる。

東には、山頂郭を取り巻くように階段状に曲輪群が展開している。また、北尾根には、大きな堀切（堀切Ⅰの７）を隔てて、現在テレビ中継塔等がある曲輪がある。特徴的なのは、



許斐岳城縄張図

この曲輪より北に続く尾根に多数の深い堀切が尾根筋を遮断し厳重に防備していることである。堀切Ｉの１の先端は、堀底道となり西の吉原方向に続いている。谷筋の道ははっきりしないが、途中郭も確認できる。『筑前国風土記』が記す、「三尊石の前に吉原へ続く道あり、これ大手なり」とあるのはこの尾根を指している可能性もある。

II区　Ｉ区より西南に大堀切を隔てた一城別郭の曲輪群である。特徴的なのは、南北に区画を分ける長い横堀（堀切IIの２、３）が二条確認できる。『筑前国続風土記』が記すところによる城の用水池と伝えられる「金魚池」がある。現在でも雨が降った後には、水が溜まっ

許斐岳城山頂遺物

ているのを確認でき、その周囲は土塁で囲まれている。三つの区域の中で土塁や、横矢掛り、横堀を設置した最も技巧的な曲輪群が展開しているエリアである。

III区　II区の南に、切通し（堀切IIの４）隔てた尾根筋に展開する。尾立山と呼ばれ、東西に二つの郭を中心とした郭群がある。王丸方向へは、長く緩やかに下る尾根が続いており、この緩やかな尾根からの侵入を警戒して、現在は、ほぼ埋まってはいるが、多数の堀切（堀切IIIの１～７）を設置している。南麓には博多往還（唐津街道）が東西に走る。古くからあったと思われるこの道路を意識し設置されているとも考えられる。

3-4-3.歴史

許斐岳城が、戦の舞台として度々現れるようになるのは、弘治三年（1557）四月、当時の宗像大宮司氏貞を後援してきた大内義長が毛利元就に攻められ自刃し、中国地方、並びに北部九州をその領国とした大内氏が滅亡してからである。大内氏の滅亡後、大内氏の領国であった宗像を含む筑前国は政情不安に陥る。氏貞も自立の道を模索せざるを得なくなる。このような状況下、豊後を拠点とする大友義鎮（大内義長の兄）が、筑前を領国化しようと動き始める。

弘治三年七月八日、大友方立花氏の支援を受けた多賀隆忠による、許斐岳西の本木畝町河原（福津市畦町）侵入を初めとして、この後、連年、立花城を拠点とする大友方との間に戦いが続くことになる。大友勢の攻勢は強まり、永禄二年（1559）九月二十五日大友勢に支援された、宗像鎮氏の侵攻に、宗像氏貞は支えきれず、家臣や領民とともに大島へ渡海することになる。

宗像氏貞を大島へ追いやった鎮氏は、許斐岳城を拠点とするが、その支配は長く続かず、毛利元就の支援を得た宗像氏貞は、翌永禄三年（1560）三月二十八日許斐岳城を夜襲し、鎮氏を討ち、これを奪回、旧領を回復する。これから以降、宗像郡を含む筑前国は、その領有を巡って大友氏と毛利氏の争奪の場となっていく。

同永禄三年八月十六日、大友勢は、赤間表に侵入、翌十七日には、許斐里城に攻め寄せる。この両日の戦いは激しく宗像氏貞は、占部尚持を始め家中に多数の戦死者を出すこととなるが、許斐岳城を堅守。その後も大友勢の攻勢を耐え貫き筑前の有力国人としてその地位を固めていくことになる。

なお、永禄初期の頃の発給文書と思われる、大友宗麟が、筑後の国人麦生鑑光に宛てた年未詳六月二十八日付文書に、氏貞が、許斐城に立て籠もっていると記したものがある。氏貞の大島渡海前後のものと思われるが、この時期の文書からは、初期の居城白山城の記載が見られず、許斐岳城しか現れない。領内の東北部に位置する白山城周辺では、戦闘が行われている記録は見受けられない。特に、前述の氏貞の許斐岳城回復後、永禄三年八月十七日の許斐里城を巡る戦闘には、宗像氏の主要な家臣の多くが参加していることが、氏貞の発給文書から窺える。このことから、宗像氏が総力を挙げて許斐岳城防衛に当たっていたと考えられる。氏貞を大島へ追いやった鎮氏も許斐岳城を居城としたように、宗像郡の中央に位置する許斐岳城を領有できるか否かが、宗像支配の鍵になっており、氏貞にとって絶対に渡すことができない城が許斐岳城であった。そのため、自身も許斐岳に籠城し、領内の総力を挙げて許斐岳城防衛に当たったと考えることもできないだろうか。岳山城の完成する永禄五年までの時期、実質的な氏貞の居城は、許斐岳城だった可能性もあるのではないだろうか。

大友義鎮書状写　『大友文書録』

各如存知、宗像氏貞至許斐城盾籠之条、早々一勢差遣、雖可誅伐候、爰元勢衆相催候者、定而不能一戦可退散候、適彼城迄浮出候之条、此砌不抜足様討果度存、于今差延候、然者海陸共相調、寄々衆頓取懸、可打崩之段、豊筑衆江申遣候、（略）

（永禄元年カ）六月廿八日　　（大友）義鎮　在判

麦生五郎三郎（鑑光）殿

その後、大友氏と毛利氏の筑前領有を巡る争いも最終局面を迎え、永禄一二年遂に、毛利本軍が筑前をその支配下に置くため、博多を目指し筑前に侵攻、大友氏の筑前拠点立花山城を開城させる。宗像氏も毛利氏に与し、立花山城への通路上の要地である許斐岳城には、毛利氏家臣小笠原兵部大輔が入城している。

大友毛利の戦いは、毛利氏優位に進むが、大友氏の支援により大内氏再興を目指す、大内輝弘の山口侵攻により、毛利氏は退却し、筑前国は大友氏の領国となり以降、平穏を取り戻す。

しかし、天正六年（1578）日向高城を巡る合戦（耳川合戦）において大友氏が島津氏に大敗すると筑前においても反大友の動きが出てくる。天正九年（1581）十一月十三日、大友氏に反旗を翻した秋月氏の圧迫に苦しむ、鞍手郡永満寺（直方市）の鷹取城主毛利鎮実に兵糧輸送をした大友方戸次勢の帰路を宗像氏領若宮庄衆が襲ったことから宗像氏と戸次氏との和睦が崩れ、戦いが再燃することとなる（小金原合戦）。宗像氏は、許斐岳城を防衛拠点に、北に片脇城（宗像市田島）、南に宮永城（宮若市宮永）を両翼に戸次勢に対する防衛ラインを固めることとなる。戦いは、天正十一年まで続き、許斐岳城も戸次勢により、吉原口まで押寄せられるが、総じて許斐岳城は、防波堤の役目を果たし、戸次勢を許斐岳以東の宗像領への侵入させることがなかった。

天正十五年（1587）豊臣秀吉の九州平定により、新たに小早川隆景が筑前国主として入部し、宗像郡における宗像氏の支配が終わり、宗像領西部防衛拠点としての許斐岳城は役割を終えることとなる。

3-4-4.許斐岳城における横矢掛りと氏貞死去後の宗像

許斐岳城の廃城の時期は定かではない。しかし、現在の遺構の中で気になる点が一つある。

Ⅱ区金魚池に近い横堀（堀切Ⅱの３）である。許斐岳城には、他に堀切Ⅱの２、堀切Ⅰの８の横堀が見られる。横堀は、堀の中でも最も発達した手法であり、かつ堀切Ⅱ－３については、中央登山道付近また、両端において「横矢掛かり」の手法を見ることができる。

横矢掛りは、守備側が側面射撃を攻城側にかけるために、わざと曲輪の塁線に折れを作る技巧的手法であり、北部九州では、豊臣秀吉の九州平定以前には余り見ることができない。このことから、宗像氏の支配が終わる天正一五年以降、許斐岳城が改修された可能性を考えることはできないだろうか。

豊臣秀吉の九州平定により、筑前の地は、毛利元就の三男で当時毛利家の当主輝元の叔父に当たる小早川隆景が領主として任命される。小早川隆景は、当初立花城を居城とし筑前の地に入る。当時、朝鮮出兵を計画する豊臣政権により、筑前を任された隆景にとって、未だ戦国の余韻が残り政情不安定な筑前の地を速やかに安定統治することが大きな使命であったと考えられる。

小早川隆景は、その後、本城として名島築城を開始、その意図は、当初、秀吉が朝鮮出兵における本営を博多に置こうとする構想があった影響も大きいと考える。宗像の地は、ちょうど小早川隆景の本城名島と関門の中間に当たり、その通路上の要路に当たるこの許斐山を筑前統治のための支城として、さらに、朝鮮出兵の軍用道路になる博多往還を抑える要地として改修し、使用した可能性は考えられないだろうか。

許斐岳城の南、大穂にある宗生寺は、許斐岳城主と伝えられる多賀氏が建立し、また、宗像氏の一族許斐氏の墓もある許斐岳城との関係が深い寺である。ここに小早川隆景の墓（写真3-4-4）があるのも興味深い。

3-4-5.許斐岳城に関する文書

（１）以下文書は、大内義隆死去後、大内義長政権下における軍事行動であるが、一体宗像氏は、誰の拠る許斐岳城を攻め落としたのであろうか？

宗像氏重臣連署奉書写　『新撰宗像記考證』

天文廿四年(1555)七月八日**許斐岳**被切執之刻、太刀打分捕功名無比類之旨、慥被知召候、向後弥不可有忘却之段、能々相心得可申旨候、恐々謹言、

（弘治二年か）正月十九日

寺内備後守　尚秀
占部越後守　賢安
許斐三河守　氏任

占部右馬助（尚持）殿

以下、文書において、鑓（やり）による負傷者が多いのは、接近戦が行なわれた状況を表している。城の守備陣が十分に敵の攻撃を予想していれば、飛び道具による負傷者（石疵だけでなく矢疵、手火矢疵）が多かったと思われる。負傷者の疵の分析からも城方の油断を突いた奇襲による奪回であったことがうかがえる。

宗像氏貞手負注文　『宗像神社文書』

「承候畢、（花押）（毛利隆元）」

（永禄三年）去三月廿八日**許斐岳**被切執之刻、太刀討鑓初分捕切矢高名被疵人数備左、

深田美作守（氏俊）　鑓疵、左手二ヶ所
許斐三河守（氏任）　石疵　右股
占部右馬助（尚持）　鑓疵　右指
石松備前守（備宗）　鑓疵、左手二ヶ所
吉田左馬助（安治）　鑓疵　右股
鑓初
吉田和泉守（秀時）　鑓疵　右手
吉田伯耆守（重致）　左股右腕　石疵
石松摂津守（典宗）　左腰右腕　石疵
石松加賀守（秀兼）　左手一ヶ所　石疵

（２）文書発給者が異なると同一の城郭内部の場所も名称が異なる事例（城郭内部を表す「丸」の名称が使用されている古い貴重な例）

『新撰宗像記考証』

至去三月廿八日**許斐要害**取懸、任案（カ）中節、於城内**詰丸**、被遂防戦被疵　左手一箇所、殊鑓初粉骨次第、寔無比類候、何様可賀与候、恐々謹言、

永禄三年庚申四月朔日

氏貞

吉田和泉守（秀時）殿

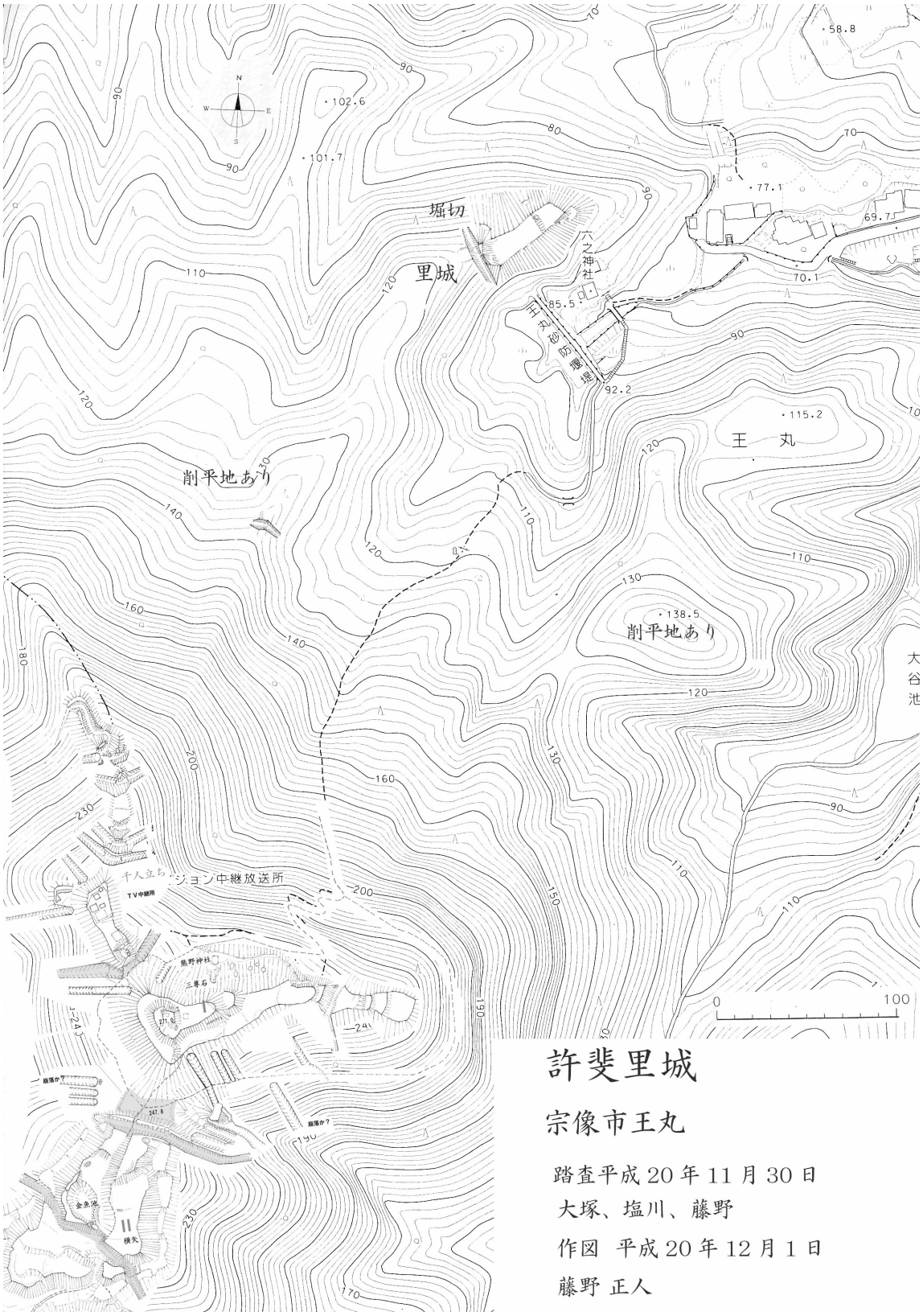
至去三月廿八日**許斐岳**被切執之刻、切入城内**甲丸**防戦、殊鑓初、同被疵右手之通注進到来畢、誠抽諸輩粉骨之次第、神妙之至頼敷存候、弥御馳走専要候、猶氏貞江令申候、恐々謹言、
（永禄三年）六月廿八日
（毛利）元就　（花押）

吉田和泉守（秀時）殿

（３）永禄十二年毛利氏の筑前侵攻時（立花陣）、許斐岳城も毛利氏の指揮下に入る
宗像第一宮御宝殿置札　宗像大社蔵
（略）翌年（永禄十二年）筑前表可有陣替之由、到芸州註進之、故元就御父子三人、輝元長府江御着陣、驚（警）船数百艘乗浮之、為通路小倉津構平城　伯州住南条勘兵衛尉被差籠在津、**許斐岳取付**、**小笠原兵部大輔在城**、海陸被取寄、可成行之刻、（略）

（４）許斐岳城の改修を表す文書（永禄十二年の毛利氏による筑前侵攻時か？）
『吉田ツヤ文書』
就（宗像郡）**許斐岳普請之儀**、炎天時分日々御辛労之通、（吉川）元春・（小早川）隆景申上遣候、誠御入魂祝着候、以（宗像）氏貞御一分、彼山普請被相調之由、御馳走難申聞候、猶自是以夫（来カ）者、可申述□（候カ）条、□□（先以カ）不能躰候、恐々謹言、
（年未詳）七月十一日
（毛利）輝元　（花押）
（毛利）元就　（花押）
○宛名スリ消え。写には「深河讃吉田和」とある。

3-4-6.里城について
文献などから許斐里城、吉原里城と呼ばれる里城の存在が指摘されている。
3-4-6-1.許斐里城
所在地　宗像市王丸
北山麓に当たる宗像市王丸、六の神社裏の尾根に堀切を伴う曲輪が確認できる。王丸登山口最深部の、住宅より六之神社方向には、昔、屋敷が並んでいたとの伝承がある。トウロク屋敷、カキツ屋敷などの地名が伝えられている。


許斐里城
宗像市王丸
踏査平成 20 年 11 月 30 日
大塚、塩川、藤野
作図　平成 20 年 12 月 1 日
藤野 正人
堀切
里城
六之神社
王丸砂防堰堤
王　丸
削平地あり
削平地あり
大谷池
千人立ちジョン中継放送所
TV中継所
熊野神社
三番石
金魚池
横矢
0
100

許斐岳里城縄張図

3-4-6-2.吉原里城

所在地　福津市八並

吉原里城については、明確な城郭遺構は現在のところはっきりしないが、吉原登山口に近い、吉原池の西下の田は古くは、上屋敷と呼ばれていたようだ。

南北にそれぞれ許斐山から派生した丘陵が伸びており、それらの丘陵に挟まれた要害の地である。

また、吉原池下で、昔、戦があったとの伝承を知る人もおり、このあたりを吉原里城の有力な推定地としてよいのではないだろうか。

吉原里城

さらに吉原の登山口付近には、右近（うこん）屋敷、治部殿谷（じゅうとんだん）の地名が残っている。

吉原里城推定地

※以下文書の里城は、王丸、吉原いずれの場所を指してしるのであろうか？また、許斐岳城を巡る戦いには、占部氏だけでなく、許斐氏や大和氏が奮戦していることもわかる。

宗像氏貞感状写　『新撰宗像記考證』
去十七日至里城構口敵責懸之処、（許斐）氏任相共被差籠之趣、慥承知候、殊太刀打高名、各御心懸神妙候、随而前十六日於長尾原合戦之時、僕従源左衛門討死不便之至候、各被仰談、弥馳走此時候、猶石松摂津守可申候、恐々謹言、
（永禄三年）八月十九日　　氏貞
占部越後守（賢安）殿

宗像氏貞感状写　『新撰宗像記考證』
去十六日敵動之時、至赤馬表、被懸合別而馳走、息右馬助尚持事、頓登城、翌十七日於里城構口、頓討死不便之至、愁傷令察候、忠義之至令祝着候、各被仰談御馳走珍重候、猶石松摂津守（典宗）可申候、恐々謹言、
（永禄三年）八月十九日　　氏貞
占部甲斐守（尚安）殿

宗像氏貞感状写　『新撰宗像記考證』
去十七日至許斐要害里城敵攻懸候処、遂防戦、同名左近允太刀打高名、殊分捕頸一名字不知之、剰討死之候、不便之候、不便之至愁傷令察候、忠義寔無比類候、何様何賀与候、恐々謹言、
（永禄三年）八月廿三日　　氏貞
許斐安芸守（氏鏡）殿

宗像氏貞感状写　『新撰宗像記考證』
至去十五日立花・奴留湯吉原里城相絡之処、遂防戦、被疵左指一ヶ所、粉骨之次第、神妙之至候、向後弥可被抽忠貞事肝要候、恐々謹言、
三月廿日　　氏貞
占部甲斐守（尚安）殿

宗像氏貞感状　『新撰宗像記考證』
於昨十六日（宗像郡）吉原里城構口敵取懸之処、堅固被遂防戦、毎度御粉骨之至候、弥御馳走此時候、不可有油断候、恐々謹言、
（永禄十二年カ）十月廿日　　氏貞
占部八郎（貞保）殿

宗像氏貞感状写　『宗像記追考』
於去十六日吉原口、立花衆被懸合、遂防戦、被手火矢疵左頸一ヶ所、粉骨之次第、誠感悦也、弥可被抽忠儀事肝要候、恐々謹言、
（天正十一年か）三月二十八日　　氏貞
大和右近充ドノ

3-4-7.許斐岳城には、どのような家臣が配置されていたのであろうか？

※『宗像大宮司天正十三年分限帳』による許斐岳周辺の有力家臣

1	村山田郷衆	許斐	左馬太夫	百六十一町	
2	東郷衆	占部	大膳進	百五十町	
3	村山田郷衆	大和	治部丞	七十二町六反	
			（吉原の地名で残る治部殿谷との関係がある人物か？）		
4	村山田郷衆	吉田	河内守	五十町八反	
5	村山田郷衆	占部	源内右衛門	四十八町五反	（高宮城番か）
6	本木郷衆	許斐	兵部少輔	四十五町八反	（螻蛄羽子城番）

占部氏だけが、クローズアップされるイメージのある許斐岳城であるが、王丸と吉原の二つの里城と、山頂の各々独立する三つの区画は何を意味するのだろうか。

天正十三年の分限帳に見る許斐岳城山麓周辺の有力家臣との関係を無視できないのではないだろうか。許斐岳城防衛戦には、占部氏だけでなく、許斐氏や大和氏も文献に現れてくることに注目すべきではないか。

宗像氏の最も重要な拠点城郭である許斐岳城は、その規模は、本城である岳山城には劣るが、他の拠点城郭と比較すると著しく規模が広大である。各区画の新旧の問題もあると思われるが、複数の城将が配置されていたことも検討すべきではないだろうか。

3-5.大友勢力との接触点「飯盛城」

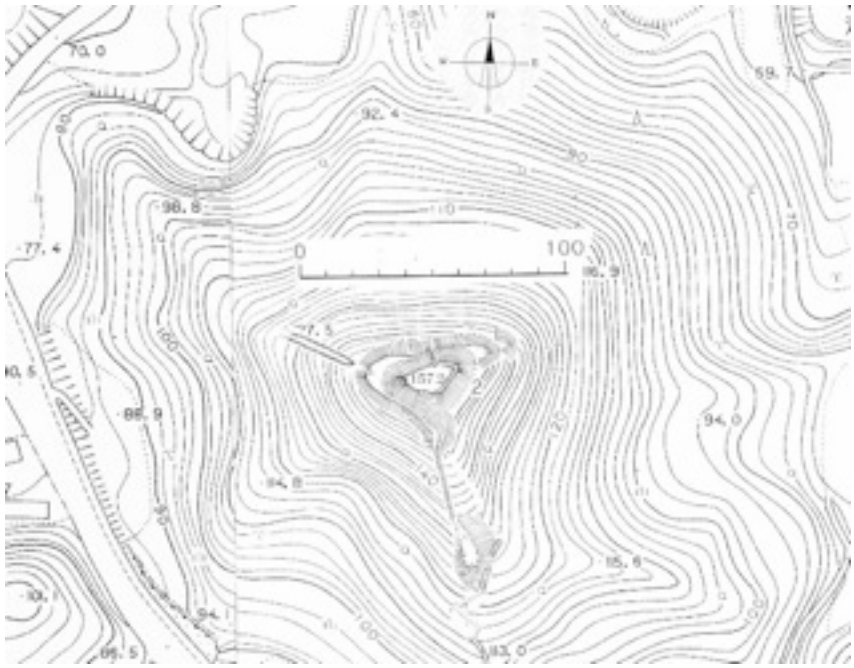
所在地　福津市内殿

飯盛城

城址は、内殿の南にある飯盛山（標高157.2m）の山頂にある。付近は、團氏の伝説が残る旦ノ原という標高約90mの台地になっており、名前のように飯を盛ったような円錐形の山容は、周辺の地からよく見える。山頂までは、遊歩道がよく整備されており、また麓に駐車場もある。

現在、山裾の北を東から西に走る県道町河原赤間線は、博多往還と重複している。この道路に沿って東には、螻蛄羽子（けらはご）城（本木）、高宮城（畦町）等の許斐城を拠点とする宗像氏の西方防衛の城砦が道路に沿うように設置されている。

また、糟屋郡との境目に近く、山頂から西には、眼前に立花山の山容を望むことができる。隣接する舎利蔵、薦野、米多比等の地は、立花山城を拠点とする大友氏勢力が支配した地である。鵜岳城（舎利蔵）、薦野城（薦野）米多比城（米多比）そして、鷺白城（莚内）の大友方の諸城が飯盛城を囲む。



飯盛城縄張図

遺構は、東西約20m南北約10mの削平地を主郭とした小規模城郭である。主郭には、郭の縁を東から南にかけて土塁が巡っている。また、東西には腰郭が各々ある。西の腰郭から西北に下る尾根に約25mの竪堀を見ることができる。この尾根は、そのまま内殿集落へ続き、尾根に通路が残っていることから、この竪堀状遺構も通路の一部ではないかと思う。

飯盛城をめぐっては、永禄十年（1567）九月十日に、宗像勢は、立花山を拠点とする大友方の立花・怒留湯勢と飯盛山山麓で戦っていることが、宗像氏貞が合戦に参加した家臣に送った感状として残っている。

また、永禄十二年、毛利氏は、筑前を手中にしようと、筑前に侵攻、立花山を巡って、大友氏と合戦に及ぶ。毛利勢は、立花山攻めの際に「だん」に中陣を敷くとあるが「森脇飛騨覚書」、飯盛山周辺の旦ノ原のことと思われる。『宗像記追考』によると、この時、氏貞は、毛利方に与し、飯盛城に陣を敷いた。

3-6.大島城を初めとする浦と島の城

3-6-1.宗像水軍と海上ネットワークを形成する諸城

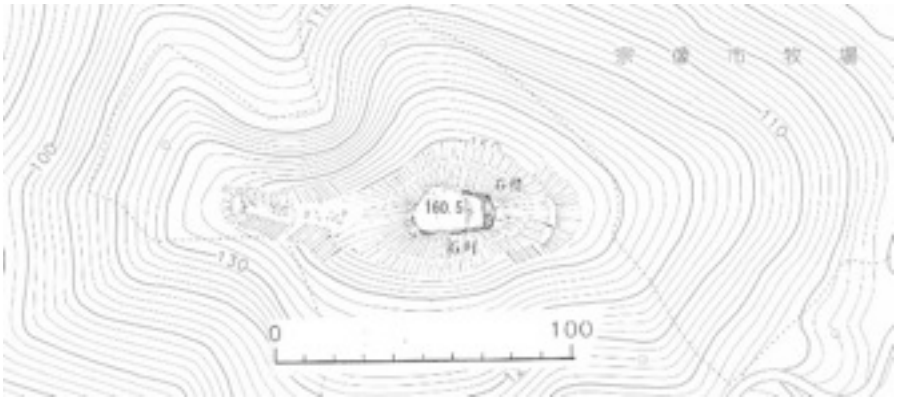
大島城のある大島は、釣川河口に位置し、宗像水軍の拠点でもあった神湊より、市営渡船で約25分の玄海灘にある。

大島城は、大島の港から中津宮を経て、島の西部、津和瀬に向かう途中にある、独立した円錐形の急峻な城山（標高160.5m）の山頂に位置している。

城の遺構は、南北約20m、東西約10mの削平地があり、周囲に土留めと思われる石列（南東隅に一部石積みあり）が見られる。遺構の規模は狭小で、多くの人数が籠もることは望めない小規模な城郭である。

大島城のある城山

城山は、大島の最高峰ではないが、山頂からの眺望は良好であり、北方は、大島最高峰の御岳（標高224m）に遮られるがそれ以外は、東は鐘崎から西は津屋崎の海岸線を望み。宗像氏の主要城郭である白山城、岳山城、そして、許斐岳城を望むことができる。すぐ南東の直線上に宗像氏にとって重要な港湾である神湊の守城として、勝島城（勝島）草崎城（神湊）を間近に見ることができる。この城の築城年代は、不明であるが、島の西海岸近くに位置し、その立地から玄界灘の制海権を確保するための海上監視のための城と考える。



大島城縄張図

3-6-2.乱世の避難場所としての大島、地島（泊島）

大島が、戦国期に脚光を浴びるのは、永禄二年（1559）、大友氏に支援された宗像鎮氏の宗像侵攻に対し支えきれず、時の大宮司宗像氏貞は、家臣や領民を連れて大島、地島へ避難する。毛利元就の後援を得て在島を続けた氏貞は、翌三年渡海し、大友方勢力の拠る、許斐岳城を攻め落とし本領を回復する。

その後、永禄十二年大友氏と毛利氏が、筑前の覇権を巡り争ったとき、毛利氏に与していた宗像氏貞は、岳山城に篭城し、領民や家臣の家族合わせて数千人を再び、大島、地の島へ恙無く避難させたと「宗像第一宮御宝殿置札」に記載されている。

大島、地島は、島自体が、海に囲まれた天然の要害であり、その周囲の海を、玄界灘の浦、島の人々で構成された強力な宗像水軍に守られた名実ともに宗像氏の詰城であったのであろう。

3-6-3.宗像水軍の最後の活動（秀吉の九州統一戦のため薩摩へ向った宗像水軍）

以下文書は、豊臣秀吉の九州出兵（島津征伐）時、木下吉隆（半助）が中村一氏（式部少輔）ら京で留守を守る豊臣秀次付の諸将にあてたものである。秀吉配下の諸国の水軍が、島津攻めのため、九州の東西両側から、南下していることを示している。その中に、西回りで薩摩へ向かった水軍衆の中に、麻生氏とともに、宗像水軍も参加していることがわかる。氏貞の死後、確認できる宗像水軍の最後の活動と思われる。

『古文書類纂』

好便ながら申せしめ候、

一、関白様去る月廿八日、関戸より小倉へ渡御なされ候、翌廿九日豊前の国馬之嶽へ御座を移され候、

（略）

一、日向浦へ警固の事、長宗我部宮内少輔・肥（備）国けいこ・芸州けいこ・豊後けいこ遣され候、

一、薩摩浦へけいこ舟の事、九鬼大隅守・脇坂中務少輔・加藤左馬助・間島兵衛尉・野島・くるしま・伊予の徳井・壱岐国けいこ・まつ浦けいこ・龍造寺けいこ・麻生・**宗像**・草野その外、諸警固差し遣され候、

一、九州の国々見物仕り候に、所柄の見事さ限りなく候、路次中も一段能く御座候、六月中には必ず御納馬たるべく候、猶これより申し入るべく候、恐惶、

（天正十五年）卯月八日　　木下半助

中村式部少輔殿

山内対馬守殿

一柳伊豆守殿

日根野織部殿

堀尾帯刀殿

同　勘右衛門殿

3-6-4.詰めの城としての大島

『天正六年（1578）六月朔日、第一宮御宝殿置札』

依大内多々良御児孫中絶、豊筑両国属豊劦大友之御幕下之条、当社茂雖被準其儀、有御内敵、動諍社職、御炎上三箇年目、永禄弐年己未九月廿五日豊家祗候之鎮氏、語御家人、数万騎俄襲来、成社乱之間、一社之軍兵、奉守護社務様、到**大島**取退、其節豊芸義絶、偏為胡（呉）越隔之条、憑毛利元就、御在島堅固也、而横入之族者、許斐要害仁在城之間、同参年庚申三月廿七日、従大島相催一千余騎、夜籠押寄、翌朝乗執要害、討果人躰畢、任其勢、古本領被斬返在所事、遠賀庄限芦屋津・広渡両村、若宮庄、西郷、野坂、赤間庄領家分、須恵村、稲元村、平等寺村、久原村、大穂村、内殿郷、無所残御進止也、豊筑之諸侍、昨日之敵、今日者成味方、

3-6-5.領民数千人を大島、地島へ避難させる宗像水軍の輸送力

『第一宮御宝殿置札』

岳山事、誠一国一城雖為躰、離社地可就他国土事、神明仏陀之冥鑑難遁之由、依　上意、不傾于他一人、公私御在城之処、三箇日之後、豊家之諸勢、当城山下仁、執近陳、送数日、可挫催雖為必定、城内堅固事、恰巨霊神以守固太華山、至**大島・泊島、御家人妻子勿論、郷民数千人、取渡無恙之**、終自豊陳、和睦之大望在之、

大島城址 『福岡県地理全誌』

　村の西一里許り、御岳の西海岸の丸く高き峯なり、上は広からす、陶器の破砕したるか、今も出ると云、宗像大宮司氏貞の時、乱世なれは、大島を以て、宗像のつめの城とせり、要害よけれはなり、是に依て、許斐安芸守氏鏡、占部八郎貞保、吉田兵部少輔貞勝三人を遣て、常に守らしむ、永禄二年己未には、氏貞も隣国の敵を此に避けて、翌年まで在城せり、

3-6-6.その他の諸城

3-6-6-1.大島城（城腰）

　大島港の北の台地に城腰の地名が残る。港を押える位置にある。『筑前国続風土記付録』大島図にあり。地名から城郭があったものと推測される。

3-6-6-2.地島城（城腰）

地島は中世には、泊島、或いは大島に対し小島ともよばれていた。地島と対岸の鐘崎との間には地島曽根とよばれる暗礁が連なっており、地島への渡海には天然の防衛線となる。『玄海町誌』では、祇園山（標高142m）を比定している。白浜港を見下ろす山頂付近に削平地あり。

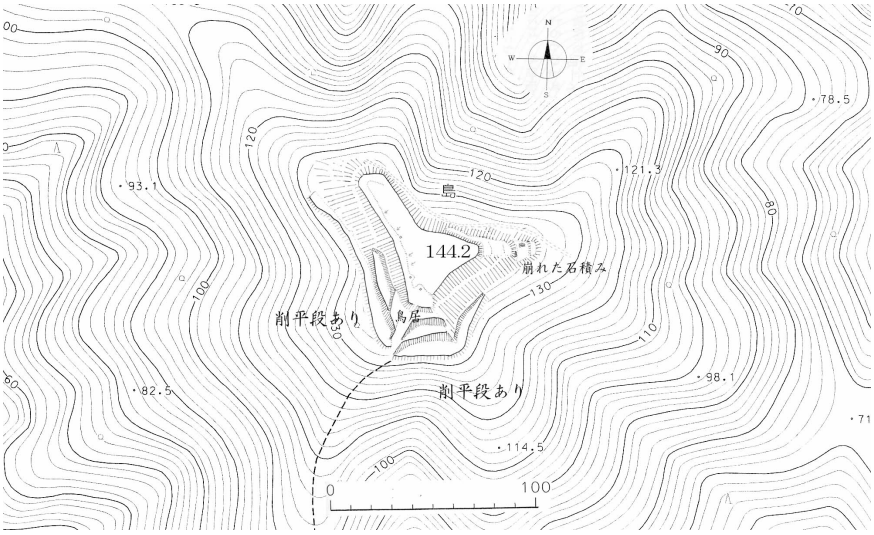
祇園山

『筑前国続風土記拾遺』

白濱の上に高山あり。城腰と云。城址有。城主詳ならす。

城腰城址『福岡県地理全誌』

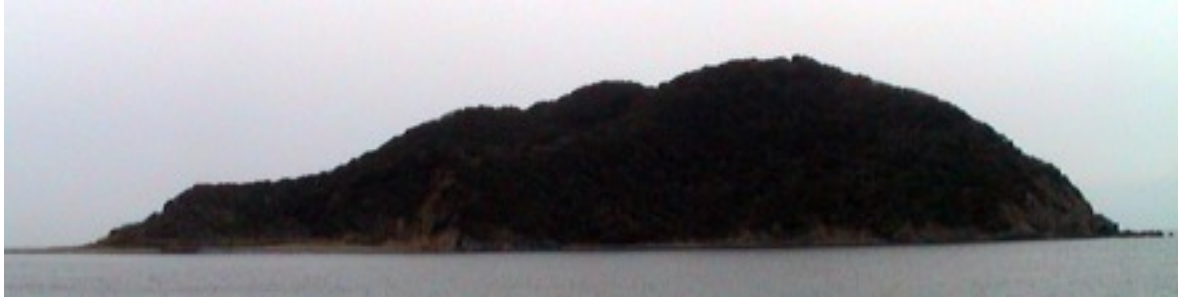
白濱の北の山なり。山上に平地一町四方許り。城主不詳



地島城縄張図

3-6-6-3.勝島城（城の辻）

勝島は、草崎半島から北西約300mに位置し、海上からの攻撃に対し神湊を防御する位置にある。島の最高地点に「城の辻」という地名が残る。『筑前国続風土記』は宗像氏貞が永禄の頃、隣国の敵を避けて渡海した時の端城としている。



勝島

『宗像記追考』

（略）永禄三年に占部甲斐守尚安、勝島に取渡り、夫より神湊の草崎の城を拵へて盾籠り（略）

3-6-6-4.草崎城

草崎半島は、南の一の岳から四の岳に到る四つの峰から成り、四塚とも呼ばれる。この一の岳と二の岳に城跡と思われる削平地がある。

『宗像記追考』などは、永禄三年の春、占部尚安が大島から渡海して築き、尚安は、ここで謀をめぐらし許斐要害を取り返したと伝える。眼前の勝島・地島・大島と連絡を取り合う重要な位置にあり、海上からの攻撃に対し神湊を防御する城にもなったと考えられる。

神湊は中世には湊浦とよばれていた。また、釣川の河口にも近く、釣川を船でさかのぼれば、宗像社の辺津宮に行くことができ、宗像氏にとり最も重要な浦であったと考えられる。

草崎城

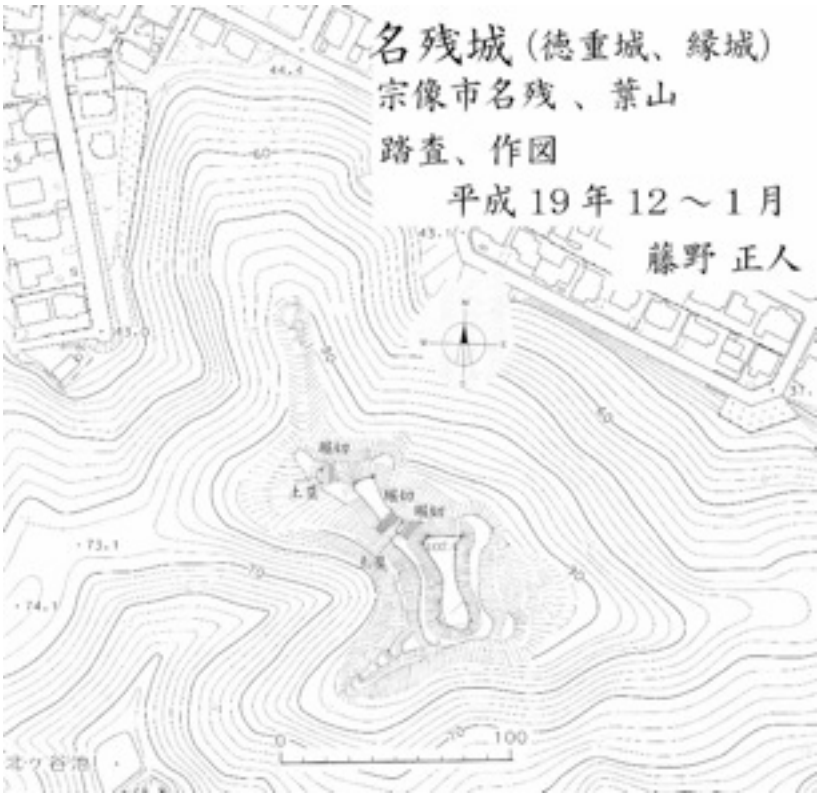
草崎城
宗像市神湊
踏査 平成21年２月～３月
作図 平成21年３月10日
藤野 正人
神湊漁港
神湊漁港
宗像漁業協同組合
神湊港フェリーターミナル
宗像大社
高宮宮
射平地あり
射平地あり
0
100

草崎城縄張図

3-7.大内氏による宗像郡の直轄領化と赤間庄にある名残城
（西郷庄の粕屋郡編入と鞍手郡に編入された赤間庄と野坂庄）
所在地　宗像市名残、葉山

名残城

徳重村古城、縁（へり）城とも云う。宗像市の南部、名残と葉山の境にある、標高107.4ｍの山頂に遺構が残っている。北に、博多往還（唐津街道）を望み、東南に鞍手郡（宮若市）境の赤木峠を睨む位置にある。また、岳山城（蔦ヶ岳城）から見ると、岳山城（蔦ヶ岳城）と宮永城（宮若市）を結ぶ直線上に名残城が位置しているのがわかる。現況は、立ち入る人もなく山林に覆われている。



名残城縄張図

城は、『筑前国族風土記拾遺』に詳しい、拾遺が記するように主郭は、五畝（約500㎡）、その北西に三畝（約300㎡）の曲輪がある。また、主郭の周囲を帯郭が巡っており、このことが、縁（へり）城の所以かもしれない。

主郭と北西の曲輪との間には、土塁を挟んで掘切が二条確認できる。また、北西の曲輪の先には、尾根が続き、土塁を設けた堀切が一条あり、北西尾根からの侵入を防いでいる。

『筑前国続風土記拾遺』によると、この城は、宗像大宮司氏続が、大友勢力の侵入に対し、赤間庄三百町を城領として大内義隆に援兵を請い、筑前守護職の大内義隆は、先代の大

宮司で、山口に出仕していた、黒川隆尚（宗像正氏）を派遣、名残城に入城させたと伝える。

宗像氏続、黒川隆尚（宗像正氏）の活躍した、天文初期（1532～）以前より、大内氏は、北部九州に進出し、少弐、大友氏の勢力を圧迫、筑前守護として筑前国の領有化を進め、宗像においても、大宮司職の相続にも介入し、さらには、宗像正氏に周防国吉敷郡黒川郷を与え、山口に出仕させるなど、宗像氏の家臣化を進めていた。

宗像郡内においても、赤間、野坂庄を鞍手郡に編入し、また、西郷庄を糟屋郡に編入し直轄領とし、大内氏の郡代の統治下に置き、宗像地方の直轄領化を進めていた。

名残城は、赤間庄にあることから、大内氏直轄領防衛のための拠点城郭であったとも推測される。『筑前国続風土記拾遺』の大内氏の家臣となった黒川隆尚の入城は、このように大内氏勢力が宗像郡に浸透したことを婉曲的に伝えているのではないだろうか。

また、時代は下り、弘治三年（1557）大内氏は、滅亡し、宗像地方の大内氏直轄領は、再び宗像氏の支配するところとなる。

宗像氏貞は、永禄五年（1562）赤間庄の蔦ヶ岳（宗像市陵厳寺）を大改修し、本城（岳山城）とするが、名残城は、岳山城の西南を守る支城として、また、宗像氏の若宮庄の拠点城郭宮永城や、西部防衛拠点の許斐岳城との通路上の要地にもあることから各拠点城郭との繋ぎ（連絡用）の城として機能したものと推測される。

縁古城『筑前国続風土記拾遺』

（前略）此城を置し事宗像軍記に永正の始宗像氏続社務となり、其頃豊後大友より田原、田北、瓜生を大将として豊前田川越をして筑前を攻しむ、所々の城、或は落され、或は降る、大友則岡城に瓜生左近貞延を城主として岡千町を領しけり、瓜生ややもすれは打出て、宗像の植田をこめ郷人をなやまし、或は許斐城を攻て領分を犯す、行末如何と思ひけれは石松但馬守尚季、畦口伊予守益勝を両使として大内義隆に此由を告て援兵を乞、其上可然大将一人宗像へ召置れ候ハ、名残城に入申、赤間三百町、古物・神崎三百町を名残城の軍用に奉るへしと有けれは、義隆聞給ひて氏続の乞所に任せ、黒川刑部少輔隆尚（宗像正氏）を遣して名残城にこめ置けれは、大友重て宗像に攻来る事なしとあり。

3-8.拡大した領域（鞍手郡と遠賀郡）支配に苦慮する氏貞と城郭

3-8-1.若宮庄の拠点宮永城

所在地　宮若市宮永

宮永城の位置する若宮盆地は、他の勢力との接触点とも言える。宮永城は、この若宮盆地のほぼ全域を視界に収める雁城（がんぎ）標高333mに立地している。

宮永城

宮永城の東には、杉氏の本城『竜ヶ岳城』や『祇園岳城』を初めとする城砦群、南の鞍手郡と嘉摩郡境に、秋月氏の拠点城郭『笠置城』、西に吉川庄の拠点城郭『湯原草場城』がある。宗像氏の若宮庄経営の拠点城郭『宮永城』とともに、これらの各氏の拠

点城郭が若宮盆地をいる。また、これらの拠点城郭の他に、若宮盆地には、20を超える小規模な城郭が存在している。

宮永城は、北西に糟屋郡と鞍手郡の境に横たわる西山連山を臨む。そして、薦野越の峠道を越えた糟屋郡側は、立花山を拠点とする大友氏勢力の地であり、宗像領に対するように西山連山から派生する尾根上につぐみ岳城、薦野臼ヶ岳城、米多比城が確認できる。

その構造は、標高333mの山頂を中心に、南北に長い尾根及び、その尾根上に削平地が確認できる。特徴的なのは、明瞭な畝状竪堀が、山頂周囲を巡っている。山名の雁城（雁木）「がんぎ」は、畝状竪堀の形状を雁の群れがジグザグに並んで飛ぶ姿に例えた名称と考えられている。

この、畝状竪堀で防衛された、南北約100mの曲輪群が、宮永城の主要部分と思われるが、畝状竪堀の範囲外にも、南東に派生する尾根や、南の標高300mのピークにも曲輪らしい削平地が確認できることから、当初は、これらの削平地を含めた広い範囲が城域だったものと推測される。

何回かの改修の後、最終的には、畝状竪堀の設置された範囲にコンパクトにまとめられたと考えたい。この畝状竪堀の設置を行った改修時期として考えられるのは、天正九年に起きた戦国期鞍手郡最大の合戦、後年「小金原の合戦」といわれる吉川庄における、宗像勢と戸次氏との合戦である。

宮永に隣接する、南東の吉川庄稲光で双方は最終的に激突し、宗像勢は大きな打撃を受け敗退する。この合戦により、宗像勢は、文献で確認できるだけでも天正十一年頃まで、立花山城を拠点とする戸次氏と全面戦争となり。戸次氏の攻勢により、宗像領に侵入を許すこととなる。この軍事的緊張は、天正十二年北部九州に大きく勢力を拡大していた竜造寺隆信の戦死により開始された大友氏の北部九州における攻勢に連動した、戸次氏の筑後出兵まで続くこととなる。

宮永城縄張図

宮永城の畝状竪堀（青い部分が竪堀）

この間、宗像氏は宗像領防衛のために、立花山を拠点とする対戸次氏防衛ラインを築くこととなる。その中心となったのが、許斐岳城であり、その両翼を支えたのが、田島の片脇城と、若宮庄の宮永城である。

片脇城の項で説明したが、両城砦の共通点は畝状竪堀である。

片脇城も、その広大な城域を畝状竪堀によりコンパクトにまとめたように、宮永城もこのとき改修されたものと考える。

3-8-2.遠賀庄にある手野（三吉）城

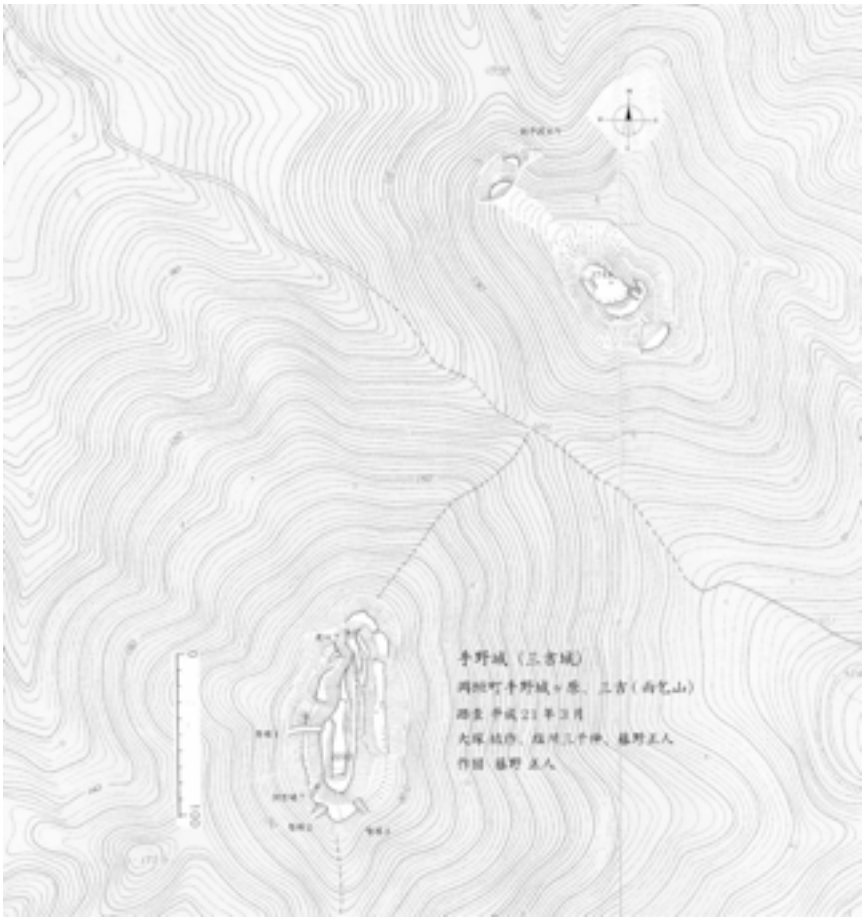
所在地　遠賀郡岡垣町手野、三吉

孔大寺山（499m）から北東に派生する岡垣町手野と三吉の境にある雨乞山（城原山）標高223.2mの山頂とその北東約200mに位置する標高174.9mの山頂に遺構が確認できる。

手野（三吉）城

北に波津浦を望み、田島から樽見峠を越えて芦屋に向う古代からの大道を押える位置にある。南東には、永禄二年遠賀川西岸に影響力を失った麻生氏の拠点岡城（岡垣町吉木）を眼下に押える。

雨乞山の遺構は、山頂を中心南北約100mに確認できる。南北に細長い山頂の223.2mの曲輪を中心にその周囲に腰曲輪が幾重にも廻っている。南は、尾根が孔大寺山に繋がっていることもあり、東西に2条の竪堀を設置し、尾根を遮断している。この竪堀のある曲輪は不整形なところから、もとはこの二つの竪堀は繋がっており、堀切だった可能性がある。



手野（三吉）城縄張図

また、北東の174.9m

の山頂には、楕円形状の曲輪を中心に南東と北西に尾根が伸びており、南東に二段の曲輪、北西にも小規模な二段の曲輪が確認できる。

この二つのピークの間には、現在は、廃道となっているが東西に手野から三吉を経て岡城のある吉木に向かう峠道が存在している。この道路を押える立地である。

3-8-3.宗像氏の御牧（遠賀）、鞍手郡における領主権力の限界

「 筑前諸将之事」『 宗像記追考』の項に記述された宗像氏の城砦（番所や臨時的な陣も含む）は、１８を数える。これらの城砦の多くは、宗像一族に関連する記述と城の番人が派遣されていることから、宗像氏の直轄城と考えられる。このうちの１６の城砦は、宗像郡内に集中し、それ以外の地域では、鞍手郡と御牧（遠賀）郡には、各々一城のみである。

御牧郡における宗像氏の勢力圏は、遠賀川西岸地域（以下「遠賀庄」とする）であり、永禄二年頃、同地域から影響力を失った麻生氏が支配していた地域であり、鞍手郡における宗像氏の勢力圏は若宮庄であった。若宮庄を含む鞍手郡は、弘治三年に滅亡した大内氏がその郡代により直轄支配していた地域である。

これらの地域は、宗像氏貞の永禄三年の大島からの復帰により新たに組み込まれた地域といえる。

宗像氏の支配した、鞍手郡若宮庄や、御牧郡遠賀庄には、『宗像記追考』が記載する以外にも複数の小規模城郭が確認できる。

これらの小規模城郭は、宗像氏の直轄城でないとするならば、各々の村落に地盤を持つ、在地領主の城砦と考えられる。これらの在地領主たちは、自分たちの村落の持ち城たる小規模城砦を維持しつつ、その上級領主たる宗像氏の直轄城（宮永城、三吉城）に勤番したと考えられる。

多くの戦国大名は、その成長の過程で、村落を支配し在地領主を家臣化し、再編成する過程で在地領主の自治権を否定し、在地領主の自治権の象徴である村落の城砦を廃城にし、村落の軍事力をその直轄城に吸収していったものと考える。

そのことから考えると、宗像氏における、若宮庄と遠賀庄におけるその支配は、小規模な在地領主を家臣化する再編成の過程で、彼らの自治権を否定し完全な家臣化まではいかず、ある程度の在地領主層の自治権を残したままの状態ではなかったであろうか。

そのことを裏付けるように、天正三年から始まった、宗像宮第一宮造営における両庄衆の負担が、宗像郡内に比べると軽いことなどから推察される。特に、宗像氏の遠賀庄支配は、遠賀川西岸から影響力を失った麻生氏の旧臣と思われる、在地領主瓜生（吉田）氏や竹井氏を通じて行われていた。遠賀庄衆は、庄内の高倉宮への段米（税負担）を理由に、宗像宮造営に対する負担軽減を瓜生氏や竹井氏に宗像氏へ交渉するよう嘆願している。

推測でしかないが、『宗像記追考』に記す、手野（三吉）城が、築城半ばで、工事中止に追い込まれたと記すのは、当然、普請に動員要請されたであろう、遠賀庄衆の反発もあったのではないだろうか。

手野城の築城目的は、『宗像記追考』には、船手押さえ（港湾の押え）として築城されたと記されている。しかし、眼下に麻生氏が支配の拠点とした岡城（岡垣町吉木）を見下ろし、また、垂水峠を越えて芦屋へ向かう道路を押える立地を考えると、築城目的は、宗像氏が新たに手に入れた遠賀庄支配強化を考えたものではないだろうか。

そして、宗像氏を上級領主として認め、その傘下に入りつつも在地領主として、旧来からの権利をある程度維持したいという遠賀庄衆の意向が、手野城築城を中断させた要因の一つではないだろうか。

また、そのような遠賀庄衆の自立性が、宗像氏が遠賀庄支配において譜代の代官を派遣せず、在地の有力者である瓜生氏や竹井氏を通じて遠賀庄支配を遂行せざるを得なかったことを表していると考えたい。

若宮庄の状況は、複雑である、宗像氏は、大内氏滅亡後、大内氏の直轄領であった鞍手郡にその勢力を伸ばし若宮庄を領有化したと思われる。その後、永禄十二年後半、北部九州の支配権を巡る毛利氏と大友氏の争いも、毛利氏の北部九州からの撤退により、大友氏が暫時筑前の支配権を握るが、毛利氏に与していた宗像氏は、西郷庄を割譲し大友氏と和睦することになった。大内氏の筑前支配時、その守護所ともなった糟屋郡高鳥居城衆の城領であった西郷庄に当時いたのは、河津氏を初めとする西郷党と呼ばれる旧大内家臣団であった。西郷党は、大内氏滅亡後、宗像氏と同盟し、糟屋郡立花山城の大友勢力と対立する。

毛利氏撤退後、大友氏が宗像氏に和睦の条件として提示したのは、西郷庄割譲とともに、西郷党の領袖河津氏の殺害も含まれていたと考えられる。宗像氏貞は、盟友河津氏を殺害後、西郷党を西郷庄より、若宮庄へ移住させたとされる。

宗像氏貞は、大友氏との和睦で犠牲にした負い目もあったのであろうか、河津氏の遺族を厚遇したと伝えられる。氏貞は、西郷党を若宮庄へ移住させたものの、小規模勢力とは言え大内氏政権下において同じ大内氏の家臣であり大友勢力に対抗する盟友であった西郷党諸氏を宗像郡内の譜代の家臣と同様なまでに家臣化することはできなかったのではなかろうか。

小金原合戦について、宗像氏貞は、鷹取城へ兵糧補給を行なった戸次勢に対し戦闘をしかける意思はなかったと言われる。小金原合戦の原因は、小勢力ゆえ和睦の犠牲となった西郷党の大友氏（戸次氏）に対する遺恨とされるが、その背景には、このように、宗像氏による在地領主（西郷党）の家臣団への再編成が緩やかで、在地領主自身に、ある程度の自治権を残した緩やかな統制状態が、小金原合戦のような、上級領主である宗像氏の意思に反し村の論理による独自の行動に走らせたとはいえないだろうか。

また、前述したように若宮盆地は、他勢力との接触地点である。特に、穂波郡との境には、筑前における最大の反大友勢力である秋月氏の拠点城郭である笠木城が、宗像氏領若宮庄を眼下に治める位置にある。小金原合戦における戸次氏の着到状からは、秋月氏の家臣も参戦していることが確認できる。西郷党の若宮庄移住に対する大友氏への遺恨と宗像氏による緩やかな統制、さらに反大友勢力秋月氏領と接し、影響を受けやすい地理的条件が重なったことが小金原合戦の原因と考えたい。

若宮庄地域の城郭を踏査された、中村修身氏（3）は、中央では、織田信長、豊臣秀吉が在地領主層の家臣団化と常備軍化に成功していた時代、宗像氏支配下の当地域において村落ごとに小規模城郭が確認されることを分析し、在地の小領主たちは、経済的基盤の在地（村落）と小規模な城郭ではあるが独自の軍事施設を持つことで（上級領主宗像氏に対し）自己の意思を貫きえることができたのではないかと推察している。

４.まとめ

4-1.宗像氏の本城の変遷と岳山城

本城は、戦国の乱世を反映するように、より高く、より堅固な山へ移り、宗像氏の支配領域拡大とともに規模も拡大し、氏貞の権力の強化を象徴するように構造も主郭を中心に求心力を高めていく。片脇城（104m）→白山城（主郭318.8m）→岳山城（369m）

構造も、主郭と対等な高度の独立した曲輪が並ぶ白山城に比べ、岳山城は明らかに、山頂主郭部が、他の曲輪を従属関係においている。この山頂主郭を頂点に階層化された曲輪群の配置は、氏貞の権力基盤が強化され安定してきたことを反映しているものとも考えられる。

それと同時に城郭内部の施設も充実している。岳山城は、高い石垣こそないものの、曲輪の縁には、土留の石材を多数使用し法面が補強されているのを現在も確認することができる。また主曲輪より一段降りた東曲輪には、昭和初期に建築された城山閣の瓦に混じって、赤茶けた中世瓦を見ることができる。織田、豊臣政権の城郭が浸透する以前の山城における瓦の使用は、他の地域ではあまり見られず北部九州の独自性を示しており、立花山城（戸次氏）、古処山城（秋月氏）、高祖城（原田氏）等北部九州の領主の本城クラスに特に使用が確認されている。

岳山城の瓦が何の建物に使用されたのかは、埋蔵されている瓦の量を発掘調査し総合的に判断するしかないが、当時としては高価であった瓦の使用は、建物の屋根が板葺きや茅葺きが主流であったことを考えれば、城内のすべての建物に使用されたのではなく、氏貞の権威を示すべく城内の象徴的な建築物に限定的に使用されたのではないだろうか。重厚感のある城門等の施設に使用された可能性を想定したい。

さらに、各々の城郭の周辺に配置されている城砦の数も、片脇城や白山城に比べると圧倒的に岳山城の周辺は多い。城下の三つの番所や、支城と思われる多数の城郭の設置は、氏貞が赤間を宗像領の政治経済の中心として城下整備を行なっていたことを反映している。

4-2.城郭配置から見とれるもの

城郭配置から考えられるものとして、水陸の交通を押えることと同時に、ほぼ3キロ程度の距離内に城郭が連絡していることを考えると、狼煙や鐘等による情報伝達を考えての配置であったと思われる。

特に、本城岳山城は、その連絡網の中心にあり、各地域の拠点城郭である、許斐岳城、宮永城、手野城をその視界に押えるとともに、それらの城郭への間には、中継のための役割を果たすと思われる城郭が配置されているのを確認できる。

4-2-1.陸路を押える

芦屋～樽見峠～田島～津屋崎～博多

手野城、吉田城、大障子城、片脇城、勝浦岳城、宮地岳城

唐津街道（博多往還）

石丸城、岳山城、名残城、田久城、許斐岳城、高宮城、螻蛄羽子城、飯盛城

4-2-2.水路や農業生産基盤の水利権を押える

西郷川流域

亀山城(福津市福間駅東)、高宮城（福津市畦町）、螻蛄羽子城（福津市本木）、城の浦城（福津市本木）

釣川流域

草崎城、吉田城、大障子城、片脇城、須恵城、田久城

4-2-3.海上交通の押え（宗像水軍を支援する海の城砦群）

大島城（城山・城腰）、地島城、勝島城、草崎城

4-2-4.宗像宮（辺津宮）を防衛する四城郭

片脇城、吉田城、勝浦岳城、大障子城

4-2-5.氏貞の拠点赤間を防衛する城砦群

岳山城、平等寺城、今井城、田久城、名残城、須恵城

赤間城下にある、三つの番所　赤城、石丸城、草場

4-2-6.許斐岳城を中心として、宗像氏の対立花防衛ラインを形成する諸城

片脇城、宮永城、宮地岳城、冠城、高宮城、螻蛄羽子城、飯盛城

4-3.岳山城を中心にほぼ南北にならぶ諸城と戦国期の情報伝達

携帯電話やインターネットが普及した現在、私たちは、電子メール等を利用して離れた場所にいる複数の相手に対して、瞬時に、同じ情報を伝達することができる。しかし有事に際して、迅速な対応をとることが求められた戦国時代において、情報伝達は、どのような手段で行なわれたのであろうか？

天正九年（1581）十一月十三日、後世、小金原合戦と呼ばれる、鞍手郡吉川庄での戸次氏との戦いにおいて、『宗像記追考』等の記述において、遠賀庄衆の吉田左近允貞延が参戦している記事がある。遠賀庄は、宗像氏領の中で、合戦の行われた吉川庄から最も遠い位置にある。遠賀庄から吉川庄までの距離は、直線距離で約20kmである。この戸次氏との戦闘が発生したことは、どのような経路で宗像氏貞に伝わり、また遠賀庄衆への吉川庄への出兵要請が伝達されたのであろうか。宗像氏の支配領域内での情報伝達に関わる城郭の役割が、その配置から考えられないだろうか。

当時、宗像氏貞の本城は、宗像市陵厳寺にある岳山城である。小金原合戦における若宮庄衆と戸次氏との戦闘が勃発したことは、直ちに、若宮庄から岳山城下に連絡されたと考える。

当時の伝達方法としては、　①狼煙、烽火　②鐘、太鼓　③旗　④馬、飛脚などが考えられる。より遠くへ、そして早く伝えられる順にすると、おおよそ①→④の順になるのではないだろうか。ただ、狼煙は単純に言えば煙の有無で伝達する方法であるため、早馬や飛脚など人自身による伝達に比べると圧倒的に伝達できる情報量は少ない。情報や命令をより多くそして、正確に伝えられる優位な順に考えると、④→①の順になると考えられる。

狼煙は、煙の有無、そして夜間は火の灯りによるものである。有事の勃発を伝達するだけであれば、気象条件の阻害要因がなければ、狼煙が最も遠くにそして迅速に伝えることができる。宗像氏貞の本城岳山城からは、ほぼ宗像氏の拠点城郭をその視界に捉える事ができる。小金原合戦が生じた、若宮方面の拠点城郭宮永城までの距離は、直線で約10kmであ

り、宮永城において狼煙を起こせば、岳山城には中継を要することなしに連絡は可能であったと思われる。

しかし、どのような事件が起きたのかその内容やそれに対応する指示を伝えることは困難である。鐘、太鼓は、音を伝達手段としている。鐘、太鼓が聞こえる距離は、現代社会の自動車等の騒音もなかった戦国期においては、狼煙には劣るもののある程度遠くまで伝達可能であったと思われる。鐘、太鼓においては、打ち方の種類において、ある程度の信号化が可能であり、信号化することにより簡単な事件の内容や指示を行なうこともできたのではないかと推測される。

宗像氏とは関係ないが、糸島市にある山城で、旗振嶺城という小規模な城砦がある。眺望のよい地点に立地しており、山名の由来は、旗による伝達を行なった連絡用の城砦であったことの名残ではないだろうか。旗は、狼煙と同じように視覚に訴える伝達方法である。旗の大きさも関係するが、旗を目視できる距離には限界があることから、狼煙、鐘、太鼓程には遠方に連絡はできなかったのではないだろうか。ただ、旗の種類や、振り方にバリエーションを持たせることにより信号化することは可能であり、狼煙より多くの情報を伝達できたと考える。

馬、飛脚については、前述の①狼煙、②鐘、太鼓、③旗に比べると伝達速度は遅い、しかし、連絡者が文書や口頭で詳細な情報を伝達することが可能である。

では、どのような伝達方法が可能であったか岳山城を中心に、吉川庄へ駆けつけた吉田左近允貞延ら遠賀庄衆の居所遠賀庄と合戦が起きた若宮庄間の城砦配置について考えたい。

岳山城を中心に遠賀庄手野（三吉）城と若宮庄の拠点城郭宮永城を結ぶとほぼ南北に直線上に三城が並ぶことがわかる。

北　手野（三吉）城－5㎞―岳山城－10㎞－宮永城　南

さらに、手野城－岳山城間には、おおよそ直線上に、確認できる中継できそうな城砦を加えると以下のようになる。

手野（三吉）城－1.5㎞―龍昌寺山城―2㎞－上山堡－1.5㎞－岳山城

なお、吉田左近允貞延が所在した遠賀庄吉木には、旧領主麻生氏の居城と言われる岡城がある。岡城と遠賀庄の城砦との距離は、以下のとおりである。

手野（三吉）城－1.5㎞―岡城―1.5㎞－龍昌寺城

※上山堡『筑前国続風土記拾遺』平等寺古城の項にあり、金山北岳付近にある削平地と思われる。

また、岳山城－宮永城間において、同じく直線上に確認できる中継できそうな城砦を加えると以下のようになる。

岳山城－1.5㎞―草場（番所）―1.5㎞－名残城－2㎞－朝城－2.5㎞－山口の諸城（茶臼山城、山下城、尾園城）―2.5㎞－宮永城

以上のように、岳山城から遠賀庄、若宮庄への伝達は、約1.5㎞～2.5㎞の距離で中継可能な城砦を確認できる。

狼煙を利用することだけを考えれば、中継地点は必要とせず、有事を本城の岳山城に伝達可能であると思われる。ただ、このように、1.5㎞～2.5㎞の距離で中継可能な城砦が確認できることから考えると、雨天には使用できない狼煙の代替策として、鐘、太鼓等の方法も利

用されていたと考えたい。さらに、どれだけの軍勢を召集し、どの方面に向うか等の具体的な出兵命令を伝えるには、人が口頭なり、文書で伝えるしかないと思われる。

おそらく、中継可能な城砦の麓には、伝令要員や馬が配置されており、有事の際に駅伝のように決められた区間を文書の配達や口頭連絡のために走っていたものと推定される。従って、有事の際には、複数の伝達手段を併用していたと考えたい。

有事の発生の伝達、初動警戒態勢の指示を伝達速度の速い狼煙や鐘等により行い、具体性や正確性を必要とする指示命令などの情報伝達については、馬の利用や飛脚等の伝令要員による伝達により行なっていたのではないだろうか。

以下は、私の貧しい想像によるものだが、小金原合戦で、若宮衆が鷹取城から立花領へ帰る途中の戸次勢を待伏せし合戦となった情報は、おそらく宗像氏の若宮庄の拠点宮永城から狼煙や鐘等で、宗像氏貞の居城、岳山城へ伝達されたであろう。岳山城で宮永城から立ち上る狼煙を見た氏貞は、何らかの有事が起ったことを知り、同じく岳山城において狼煙を上げ、鐘を鳴らし、領内各地へ警戒態勢をとるよう警報を支城網により伝達し、領内の家臣団に岳山城下や各々の居住地を管轄する支城等へ武装し集合することを伝達したであろう。岳山城からの狼煙を、吉木の岡城において知った吉田貞延は、すぐに岡城において伝令により近隣の遠賀庄衆へ警報を伝え、また、鐘を鳴らし、岡城周辺に居住する家臣達に岡城下への集合を命じたであろう。

氏貞は、領内各地へ警報を出すとともに、宮永城から、駅伝のように中継して、事件の具体的な情報を伝える伝令を待ったであろう。伝令により、若宮庄衆が戸次氏と戦闘になったことを知った氏貞は、直に戦闘を停止させるために派遣可能な軍勢のいる地域に伝令を走らせたと思われる。特に、遠賀庄衆は、戦闘状態となった戸次氏領と直接境を接しないため、派遣の対象になったのではないだろうか。氏貞の若宮庄への派遣命令を携えた伝令が吉木岡城に到達したときには、既に吉田貞延の率いる遠賀庄衆の出発準備は完了していたのではないだろうか。

恐らく、岳山城を中心として、宗像社のある田島方面や、西方防衛拠点の許斐岳城へは、釣川や博多往還（唐津街道）に沿って、伝令要員が配置された中継地点が設けられていたものと考えたい。

城郭は、当時の情報ネットワークを形成する施設としての側面も有していたのである。

4-4.畝状竪堀を設置する城

土造りの城において、究極の防御施設である畝状竪堀は、宗像氏のすべての城郭に設置されているわけではない。本城と特に軍事的緊張が高い他勢力との境目地域の城郭にのみ設置されていることがわかる。

畝状竪堀の設置が確認される宗像領内の城郭

・本城（白山城、岳山城）

・その他（許斐岳城、片脇城、宮永城、腰山城）

上記のうち、片脇城と宮永城は、天正九年吉川庄合戦（小金原合戦）による軍事的緊張により設置されたと考えられる。

特に、宮永城の立地する若宮盆地は、各勢力の接触地点であり、その軍事的緊張を表すように、畝状竪堀を設置した城砦の密度が高い。若宮盆地東の杉氏の本城、竜ヶ岳、祇園岳の城砦群、南の秋月氏の拠点城郭笠置城、西の小田氏（大友家臣）が吉川庄の拠点城郭としたと考えられる、湯原草場城等は、いずれも畝状竪堀の設置が確認できる。

また、小規模城郭であるが、腰山城（鞍手町新延）にも畝状竪堀が確認できる。腰山城の立地は、赤間城下より猿田峠を越えて鞍手町の平野部に出る入口にあり、鞍手方面から赤間城下への侵入を防ぐ重要な位置に立地している。またこの道路は、後世の長崎街道の宿場町木屋瀬に向かっており、腰山城は、当時も重要な道路を押さえる役目を果たしていた。そして、龍ヶ岳城（宮若市龍徳）を本拠にする杉氏の勢力圏に隣接し、また、豊臣秀吉の九州出兵直前、天正十四年頃秋月氏が兵を入れていた剣岳城（鞍手町中山）にも近い他勢力との境目の地である。

さて、天正九年小金原合戦以降、宗像氏と敵対することになった立花城督戸次氏領域内において、畝状竪堀が確認できるのは、本城である立花山の城砦群を除いては、宗像氏領である宗像郡や鞍手郡境に近い、鵜岳城（福津市舎利蔵）と米多比城（古賀市米多比）においてのみ確認できる。

「豊前覚書」によると鵜岳城は、天正九年の小金原合戦後、戸次氏によって築城（改修）されていることがわかり、畝状竪堀もその折に設置された可能性が高いと考えられる。
なお、隣接する在地領主薦野氏の本城薦野臼ヶ岳城には、畝状竪堀は確認できない。

米多比城は、小規模であるが、里城と山城の関係がわかる貴重な城郭遺構である。立地から薦野氏とともに戸次氏の与力として立花城衆として活躍した在地領主米多比氏の管轄化にあったと考える方が、自然であるが、隣接する薦野氏の領域内にある薦野氏の本城臼が岳城（古賀市薦野）と畝城竪堀のある鵜岳城を考えるとき米多比城の畝状竪堀も鵜岳城と同時期に戸次氏の意思決定により畝状竪堀を設置したと考えることができないだろうか。

米多比城の立地は、鵜岳ほどではないが、やはり宗像氏領宗像郡に近く、また、背後の西山を越えれば、秋月氏を初めとする反大友（戸次）諸勢力との接触地点吉川庄であり、また、宗像氏の若宮庄の拠点城郭宮永城とも対面する位置にもある。
畝状竪堀の設置事例については、岡寺良氏(4)が、秋月氏領内の城郭を事例に、秋月氏の支配下にある城館の中でも、畝状竪堀群を備える城館の分布を見ると、本城（御隠居城含む）あるいはそれに近く、密接な関係にあったと考えられる城館と、支配領域の「境目」領域に当たる城館に認められ、それら以外の城館、たとえば、本拠地と「境目」領域との中間領域にあるような城館には、ほとんど畝状竪堀群は確認できないことを明らかにしている。

そして、全ての「境目」領域に当てはまるわけではないがとしながら、秋月氏が城館の改修についての考え方は、ただ闇雲に全ての城郭に対して畝状竪堀群の敷設を行なったのではなく、防衛戦略上、特に重要であった本拠地と、領域拡張によって急激に軍事的緊張が高まった方面の「境目」領域の城館にのみ行なうという、効率的な改修方法であったとの見解を示している。
このことは、宗像氏領内や戸次氏支配下にある城郭についても当てはまるように考えられる。

4-5.城郭の存在意義、落城した記録がある城郭は意外に少ない

落城した記録がある城郭は、宗像郡内では、宗像氏貞が、密かに大島より渡海し、大友勢力を領内から一掃した永禄三年（1560）三月の許斐岳城落城と、天正九年（1581）小金原合戦直後に、恐らく宗像氏の防衛体制が整わないうちに戸次氏が宗像領内に侵攻し、落城した宮地岳城であるが、いずれも相手の虚を突いた奇襲により陥落したと考えられる。

文献に残る城郭を巡る戦いが最も多く表れるのは、許斐岳城であるが、記述内容からすると山城本体においての戦いはほとんど認められず、里城等の山麓での戦いが圧倒的に多いことがわかる。

軍事的緊張状態が発生した地域にある城郭は、天正九年の小金原合戦後の、片脇城や宮永城に見られるように畝状竪堀を初めとして、堅固な改修が行なわれると同時に、兵員の増員も行なわれたと推定される。軍事的緊張状態にさらされている城郭は、改修のうえに改修を重ねられますます堅固な城砦となり攻めにくくなったと考えられる。そのような中、畝状竪堀や多数の連続する堀切が設置されていったと考えられる。

山城の攻める側は、山上にある曲輪を目指す。しかし、山上の曲輪の周囲は、切岸と言われる人工の崖が守備側により設置されている。さらに軍事的緊張状態の高い地域の山城の切岸下の斜面には、畝状竪堀が設置され曲輪への接近を阻む。攻城軍を切岸にさえ近づかせない。また、許斐岳城に見られるように、麓から山上へ向う尾根筋には、これでもかというほど幾重にも尾根を遮断する堀切が設けられ山上への接近を阻んでいるのがわかる。

このように戦国の山城は改修のたびに難攻不落となり、攻める側も、攻略するには守備側に対し圧倒的多数の兵力を要しなければならない山城での戦いを避けるようになっていったのではないだろうか。

山麓の里城での戦いが多いのは、攻める側も、攻撃は山上の城郭より要害性の低い山麓の里城までしか行なうことができず、多大の犠牲を覚悟しなければならない山上の城郭までは追撃しようとは考えなかったからかもしれない。そして、戦国期の各地域に見られる、攻め手が、山城の麓において、稲薙ぎや麦薙ぎなど、収穫物を搾取する行動をとるのも、山上での戦が困難なため、山城に籠城する敵を山下に引き出すことを目的に行なわれたことも十分ありえるのではないだろうか。

では攻める側が圧倒的兵力を有していた場合の戦国期の城攻めは、どうであったろうか。永禄十二年（1569）四月毛利氏は、数万の軍勢で筑前における大友氏の拠点糟屋郡立花山城を攻める。宗像氏貞も毛利氏に与している。毛利側の史料『森脇飛騨覚書』によると守備した大友勢の篭城軍は六百人程度だったと記載されている。

これだけ圧倒的な兵力差があるにもかかわらず、毛利は、本城の周囲まで攻め寄せながらも、救援に来た大友本軍と篭城軍を遮断し、完全に補給路を断ち、城方が干上がるのを待つという作戦を取っている。結果的に完全に補給を断たれた大友の立花山篭城軍は、二ヶ月後の閏五月開城を選択した。毛利軍は力攻めで攻め落とすのに十分な兵力を持ちつつも、最後まで、積極的な攻城戦を行わなかったのである。

永禄十二年冬、立花山を奪取し、大友軍と同地で対陣していた毛利軍は、本国に大内輝弘の侵入を許し北部九州から撤退する。それと同時に、追撃に移った大友軍は、宗像領内に侵攻し毛利氏に与した宗像氏貞の本城岳山城下に押し寄せたと伝えられている。

大友氏も北部九州五ヵ国の軍勢を率い圧倒的な兵力を有しながらも、岳山城を攻めることなく、筑前の小領主に過ぎない宗像氏に対し、外交交渉により西郷庄割譲等いくつかの条件を宗像氏が受け入れ大友氏の傘下に下ることを条件に宗像氏の領主としての権利を保障し和睦した。

兵力的には落城させることが可能な状態であってさえも、攻城戦を行なわないのはなぜだろうか。正面からの城攻めは割に合わないのである。木村忠夫（5）

天正十四年（1586）九州制覇を目指す島津氏が筑前における大友勢力の一掃を狙って北上し、九州戦国史上、最も激しい攻城戦といわれる岩屋城（太宰府市）の戦いにおいて、圧倒的兵力により筑前における大友氏の孤塁を守る高橋鎮種の篭城する岩屋城を力攻めにした。

島津軍は、激戦の末高橋鎮種を自害させ岩屋城を落城させたが、岩屋城（標高281m）は、巨大な城郭である立花山城（標高368m）や宗像氏の岳山城（標高369m）に比べると高度も低く小規模で要害に劣る城郭であるが、死を決した城将高橋鎮種に指揮された城兵の猛烈な抵抗に遭い、島津軍は、夥しい数の死傷者を出している。

その後、筑前における大友勢力最後の拠点立花山城を包囲するも、攻撃する余力がなく、大友氏を救援する豊臣秀吉軍の九州上陸を聞き撤退する。結果的に島津氏は、当初の目的であった筑前における大友勢力の一掃を果たすことができなかったのである。

岩屋城の戦いからわかるように、兵力的に圧倒的優位な状況にあってさえも、正攻法による攻城戦を行なえば、その後の作戦に支障をきたすような被害を被りかねない。このような事を想定すれば、攻め手の指揮官は十分に防衛準備された城郭に対し正面切っての戦いを決断できなかったと考えられる。戦国時代城郭の落城原因を見ると、攻め手の調略による城方の内応が数多くあるのも自軍の被害を極力抑えたいという意向が強く反映されていると考える。

また、永禄十二年の宗像氏貞の岳山城籠城において、大友軍の攻城戦を躊躇させた要因として、急峻な山塊に立地した天然の要害であること、曲輪群の延長が１kmを超える巨大な要塞であり、曲輪群の斜面に設置された約170本を数える長大な畝状竪堀群は、当時岳山城を包囲した大友軍に、視覚で要害堅固さを認識させるのに十分な効果を発揮したのであろう。この城を落城させるには自軍に多くの血が流れることを覚悟しなければならないと。

さらに、氏貞も開城し降伏を迫る大友氏に対し、毛利氏の撤退により、救援を求める相手もない不利な情勢の中で、攻城戦になれば決死の覚悟で防戦し、死しても大友軍に甚大な損害を与えようとその気概を伝えたであろう。

この難攻不落の城郭の存在が、圧倒的な兵力で岳山城を囲んだ大友軍に対し、攻城戦を行なうことを躊躇させ、外交交渉による和義を選択させた大きな要因の一つと考えられる。

『宗像記追考』が、この岳山城を「当国無双の城」と記述しているのは、永禄十二年宗像氏の存亡の危機を難攻不落のこの要害が救ったことを表しているものと考えたい。

城の存在意義は、実戦のために使用されることより、攻める側に戦いを躊躇させる戦いの抑止力として存在していたことの方が大きかったのではないだろうか。そして、現在は樹木の陰に隠れている畝状竪堀を初めとする城郭を防備するための施設は、もともと見せること

により攻める側の戦意を減退させることも念頭に置き設置されたと考えるべきなのかもしれない。

５.最後に

宗像における中世遺跡、特に平地や低丘陵上にあったと思われる城館の遺構については、近代の開発による造成等により、その多くが失われたものと思われる。しかし、城山、許斐山、白山などの山城は、近代の登山道建設による破壊は見受けられるものの良好な状態で遺構が残っている。

また、宗像には、『宗像宮第一宮本殿置札』を始めとして、北部九州の戦国史の貴重な史料が多数残っている。また、これらを集約した『宗像市史史料編』などが編纂されている。

中世宗像氏の動向については、文献史学の視点から、『中世筑前国宗像氏と宗像社』を執筆した桑田和明氏を始めとする研究もある。

中世筑前に勢力を持った秋月氏等他の領主の文献が散逸しているのにくらべ、宗像氏は、近世大名へと存続できなかったものの史料面では恵まれた環境にある。

そうした下地の中で、宗像地方に残っている山城の踏査を行なうことにより、総合的に中世戦国期における宗像氏の動向を検証していく環境ができつつあるのではないだろうか。

宗像といえば、世界遺産を目指す沖ノ島や多数ある古墳等の古代遺跡が、どうしても注目される。そのため、中世は比較的注目されていない。しかし、私たちの身近なところにあり、市民の憩いの山となっている城山や許斐山を改めて訪ねてみると、そこには、大勢力の狭間で、懸命に宗像の地を維持し、乱世を生き抜こうとした宗像氏の痕跡を見ることができる。これらの遺跡は文献史料上欠落している事象について、補足材料を与えてくれる。

宗像地方については、中世・戦国期城館の研究はまだまだ進んでおらず、不明な点も多い、今回の報告がその研究の一助になれば幸いである。

また、城郭の場合、事件が起こらないと文献に現れないケースもしばしばあることから考えれば、宗像の山中には、知られていない小規模な城郭がまだ眠っている可能性もある。筆者に、今後もいろいろなご教示を賜りたい。

なお、山城の測量においては、大塚紘作氏、塩川三千伸氏の多大な協力により縄張図を作成することができました。また、桑田和明氏や花田勝広氏には、資料の提供や力強いアドバイスを頂いたことを感謝したい。

「1-5城郭の各施設の部位名称について」は、佐賀県教育庁宮武正登氏の好意により転載させて頂いたことにお礼を申し上げたい。

以上は、2010年むなかた見聞学講座「宗像氏の城郭」資料を加筆訂正したものである。

引用文献

（1）　宮武正登：「基山町の中世城館」『基山町史上巻』　第4編中世477～479頁　2009
（2）　花田勝広：むなかた見聞学講座資料「古代中世の宗像神社と大宮司居館跡」2009
（3）　中村修身：「北部九州の戦乱と城館　一中世の在地勢力の城郭　１若宮盆地の小規模城郭」『日本中世の西国社会１西国の権力と戦乱』（清文堂）275～281頁 2010

(4)　岡寺　良：「戦国期秋月氏の城館構成－福岡県朝倉市・杷木地域を事例に－」『城館史料学第4号』城館史料学会1～22頁　2006
(5)　木村忠夫：「筑前の概要」『福岡県の城郭』福岡県の城郭刊行会編　銀山書房　87～89頁　2009

参考文献

中世筑前国宗像氏と宗像社　桑田　和明　岩田書院　2003
福岡県の城郭　福岡県の城郭刊行会編　銀山書房2009
基山町史　上巻　2009
宗像市史　通史編第二巻（古代・中世・近世）1999
宗像市史　史料編第二巻（中世Ⅱ）1996
若宮町史　第三章　戦国時代、第四章　若宮町の城郭2005
2010 新修福岡市史資料編中世①
地域相研究20下「宗像氏の居城である片脇城に付いて」小川　賢

【研究ノート】

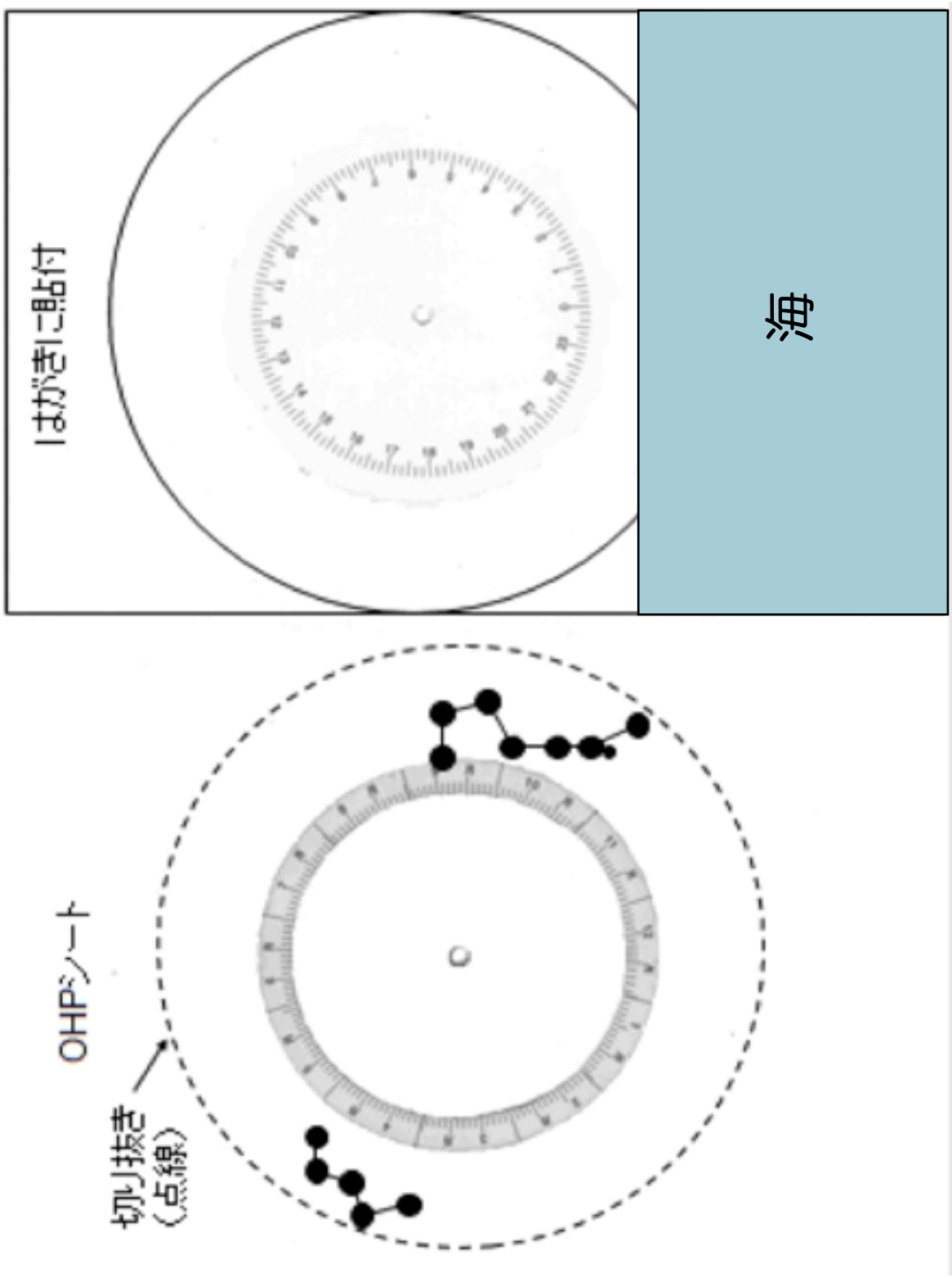
北斗水くみ研究
－北斗ダイアルをつくろう－

平井 正則

「北斗ダイアル」を使えば、年中の何月何日に何時ごろ「水くみ」が起こるかを知ることができます。「北斗ダイアル」を作ってみましょう。
（福岡県青少年科学館で来館者に配布している紙工作を参考にしました。）

1.準備するもの
プリンターとＡ4用紙1枚、ＯＨＰシート1枚、のり、古はがき1枚、割ピン1個

2.作り方
次ページをＡ4の用紙にプリント（印刷）しましょう。
次に、プリントしたＡ４紙を半分に切り離し、
左半分（ダイアルA）は市販のOHPシートにコピーします。
右半分（ダイアルB）は黒線で切って、使い古しのハガキか、
少し硬い紙に糊付けます。
コピーしたＯＨＰシートがダイアルAで「北斗ダイアル」の上板です。
点線に沿って丸く切り取って下さい。
丸く切り取ったＯＨＰ（ダイアルＡ）をダイアルB（台紙）に中央に穴を開けて
割ピンで留めます。
これで出来上がりです。
ハガキ大のダイアルB（台紙）の上に丸いダイアルA（OHPシート）がくるくる回りますね。ダイアルAには北斗七星とカシオペア座、内側に丸い目盛（月日）、
ダイアルB（台紙）に丸い目盛（時刻）、下辺に海、回転中心は北極星です。



3.使い方

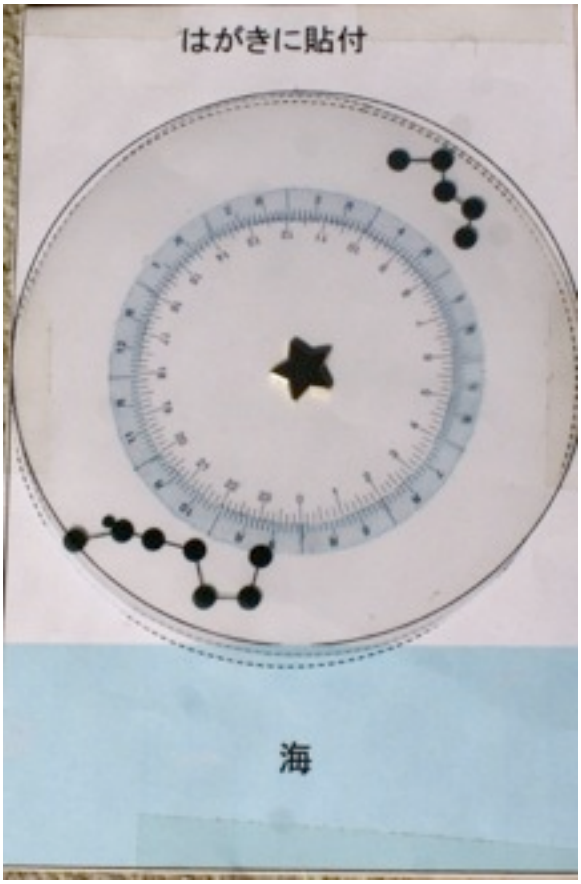
ダイアルB（台紙）の下部分は海、上部は北の空です。その境界線が水平線です。

中心（割りピン）はほぼ北極星（正確には天の北極）です。星はこの星を中心に左周りに1時間に15°動きます。（北を向いて左回りで、これが日周運動です。）

＜ダイアルA＞を回すと北斗七星とカシオペア座（W形）が北極星の周りを回りますね。
ダイアルBの内側に時間目盛があります。数字1時から23時まで24時間（1日）、各時間内は6等分の長い目盛が30分、小さい１目盛は10分です。
＜ダイアルA＞の丸いダイアルは１月から12月まで、さらにひと月を15等分、各月はほぼ30日ですから、大きい目盛が10日、小さい目盛が２日です。ただし、2月は28日とか29日ですが、月は30日になっていますから日付目盛はそのくらい大雑把です。

＜ではやってみましょう＞今日が4月1日と考えてみます。
“北斗の水くみ”は北斗七星のコップの底が水平線に平行になる場所で回転を止めます。
この時、4月1日の位置は右上、カシオペア座の中央付近にあり、この位置の内側目盛から9時40分と読めます。9時40分は昼間（午前中！）で空は明るく、北の空で北斗七星の“水をくみ”見えません。でも、もし太陽のスイッチを切れば（空は暗くなって）！“水をくんでいる”のです。

今年の夏はこの「北斗ダイアル」を使って「北斗の水くみ」を観察しましょう。



【実践ノート】

むなかたの弥生時代の人々のくらし（2）
～ 石包丁をつくろう ～

鎌田 隆徳

1.はじめに

平成22年度『子どものための郷土史講座 －第１回－』（宗像市民図書館主催）の「むなかたの弥生時代の人びとのくらし(2)」～米づくりのはじまり、石包丁をつくろう～　で、むなかたの弥生時代の話と体験「石包丁づくり」をしました。

むなかたの弥生時代の遺跡分布図

2.むなかたの弥生時代

今から約２，３００年前、むなかた平野は、まだ奥まで海が入り込んでいて、潮の満ち引きの繰り返しと古釣川の上流から少しずつ流れ運ばれてきた土砂によってできた肥沃な湿地が広がっていました。その湿地に突き出るようにのびた丘陵に、海

を渡り大陸から人びとがやって来て住みつきました。そして、人びとは米づくりをはじめました。

それは、むなかたの弥生時代のはじまりでした。 その地は、現在の宗像市東郷の県立宗像高等学校のある辺りと考えられています。

東郷登り立て遺跡（とうごうのぼりたていせき）からは、約２，３００年前の弥生時代はじめの頃の土器や住居を取り囲んでいたかと思われる環溝（かんこう：深いＶ字型の溝）など、弥生時代の最も古い人びとのくらしの跡がみつかりました。

ここから周辺の丘陵へと人びとは移り住み、むなかた平野へ人びとのくらしが広がっていきました。

弥生時代中頃の初め（約2,200年前頃）になると、ムラ、ムラができ、それぞれのムラの米づくりのくらしは安定していきました。しかし、ムラのくらしが安定してくると米づくりで必要な水の確保や収穫などをめぐってムラの間でしばしば争いごとがおこりました。やがてムラ、ムラは互いに協力し合うようになり、収穫された米は一つの場所に集め、貯蔵穴（ちょぞうけつ：地面に穴を掘って米などを貯える）に共同保管するようになりました。

光岡長尾遺跡（みつおかながおいせき）では、いくつかのグループ（ムラ単位？）の貯蔵穴の周りを直径約４３メートル、Ｖ字型に切り込んだ深さ３メートルもある環溝で取り囲み、出入り口は二ヶ所、そして柵を設け簡単には中に出入が出来ないよう厳重に保管・管理がなされていました。これは、むなかたの弥生の人びとのくらしの特徴ともいえるものです。

むなかた周辺の地域（福岡、糟屋、筑豊地方）ではみることがありません。独自の文化を持ったくらしがあったようです。

田熊石畑遺跡（たぐまいしはたけいせき）からは、９基の木棺墓（もっかんぼ：木をくりぬいて作ったひつぎ）が発見されました。調査された６基の中から青銅の武器である銅剣や銅矛、銅戈の副葬品（ふくそうひん：葬られた人とともに納められたもの）として次々とみつかりました。

その数は合計１５本で、弥生時代の墓からみつかった数としては日本で最多です。

特に１号墓では、銅戈１本、銅剣３本も納められていました。１号墓に葬られたのはどんな人だったのでしょうか？

青銅の武器は、誰もが持つことはできません。力の強さを示すもので権威（けんい）の象徴でした。

その青銅の武器を持った首長（しゅちょう：かしら）が、ムラ、ムラをまとめ、小さなクニとして治めていたことがわかってきました。

この頃の日本について、中国の史書、漢書「地理誌」には「倭人（日本人）あり、分かれ百余国・・・」と記されています。むなかたが、その百余国の中の一つであった？とも考えられるようになりました。

弥生時代の後半（約2,000年前頃）になると、小さなクニがさらに大きなクニとして発展していったかどうかはまだわかっていません。
ただ、朝鮮半島でみられる土器などが遺跡からみつかることから、朝鮮半島の人びと深いつながりをもちながら、独自の人びとのくらしは続いたと思われています。
そして、次の古墳時代をむかえていくことになります。

3.石包丁をつくる

3-1.弥生時代の石器

弥生時代には、米づくりに欠かすことのできない特徴的な石器がありました。前の縄文時代の石器とは使い方が異なります。
その石器とは、太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）とよばれている磨製（ませい：磨かれた）の大型の石斧です。（縄文時代は打製石斧）
柱状片刃石斧（ちゅうじょうかたはせきふ）とよばれている石斧です。
石包丁（いしぼうちょう）とよばれる石器で、石製穂摘具（せきせいほづみぐ）ともいわれていいます。

① 太型蛤刃石斧

② 柱状片刃石斧

③ 石包丁〔飯塚市歴史資料館〕

この３つの石器の ① は、樹木の伐採、木材を割る道具、 ② は、木材を加工し、田の畝の土留めや水路のはめ板、木製農具などをつくる道具、 ③ は、稲の収穫時に穂を摘む道具として、いずれも米づくりのくらしにおいて欠かせないものでした。
むなかたの遺跡からもこれらの石器はみつかっていて、人びとが使っていたことがわかっています。

3-2.石包丁をつくろう

弥生時代の米づくりでもっとも特徴的な道具、稲の穂を摘み取る石器である石包丁をつくります。

○　材料と道具

・平たい石　・石の握鎚　・砥石　・石錐　・ボウル　・電気ドリル

○　つくる順序

① 石を割る → ② 整える → ③ 石を磨く → ④穴を開ける →

⑤ 刃を研ぐ　そして、⑥ 試し摘み

材料の石は、当時と同じ石材を使おうと宮若市の笠置山麓の千石峡の凝灰岩や福津市恋の浦海岸、宗像市神湊海岸の岩場で採集した凝灰質砂岩を使用しました。

〔石づちで割り、形をつくる〕

水をつけ、根気強く砥石で磨く

子どもたちは、あらかじめ加工していた材料（①、②まで）の石を水で濡らし、砥石で磨くことからはじめました。

・「水をつけて、力をいれ、少しずつ砥石で根気強く磨いていきましょう。刃の部分は、砥石の角度を変えて研いでいきましょう。」

水をつけ、石錐で穴を開けていく

・「なかなか磨けません。手が痛くなりました。」

・「一生懸命にやっているから、だんだん磨かれ形が整ってきているよ。」

ある程度全体を磨きあげ、刃の部分を研ぎ終わったら、棒状の石の先を尖らせた石

錐で穴を開けていきました。
・「穴はどうやって開けるのですか、これで（石錐）できるのですか。」

〔石錐で穴を開ける〕

砥石で刃を研ぐ

・「水で濡らし、この石の錐で開けるのだよ。根気強くやってね。」
・「擦ってでてきた粉がポイントで、石を削り、穴を開けていくのだよ。」
・「なかなか開きません。」
・「あっ、穴が開いた！」
・「やったね、あとはもう一つ穴を開けて、２つの穴に麻ひもを通せば完成だね。」
・「麻ひもは、人差し指が入る長さでいいよ。輪っかに指を入れてしっかり握れるようにするためだよ。」
・「これでいいですか。やっとできました。」
・「完成したね。出来ばえはどうかな。」
・「本物とそっくりだ。うまくできたね。」

〔刃を研ぎ、ひもを通し結ぶ〕

最後の仕上げ刃を研ぐ

最後に、実際、試しに摘んでみました。
・「切れ味はどうかな。」

やっと完成！

〔摘んでみる〕

うまく摘むことができるかな？

稲穂を摘む弥生の人びと（想像図）

時期的に稲穂がないので草を摘む。

・「この時期は、稲穂がないから、稲穂に似た草で試してみましょう。うまく摘むことができるかな。」

・「秋になったら本物の稲を摘んでみましょう。」

４.おわりに

むなかたの弥生時代に関心が高まっています。田熊石畑遺跡の集団墓から出土した青銅の武器の数は、これまで考えられていました北部九州の弥生時代前期・中期

初め頃の社会の定説を覆すものでした。遺跡は国指定史跡となり、これから保存整備がなされていきます。

今回、弥生時代のくらしの基盤、米づくりで最も特徴的な道具の一つである石包丁づくりをしました。

材料の石は、当時と同じ石材を使おうと宮若市の笠置山麓の千石峡の凝灰岩や福津市恋の浦海岸、宗像市神湊海岸の岩場で採集した凝灰質砂岩を使用しました。
子どもたちは、熱心に一生懸命に石包丁づくりに取り組みました。時間の関係で仕上げの穴開けは少し文明の利器（電気ドリル）の力を借りましたが、子どもたちは、弥生の人びとと同じように砥石で石を磨き・研ぎ、石錐で穴開けるという手作業を通しながら、ちょっぴりと弥生人になり、むなかたの弥生の人びとのくらしに想いを馳せていきました。

最後に、今回の講座にあたりまして、宗像市民図書館の柴田富貴子さん、柴田やよいさんには開講、企画等で、また「むなかた歴史を学ぼう会」会長の平松秋子さんには石包丁づくりで、そして、石材加工で〔株〕「共和石材」の倉成慎司さんには大変お世話になりました。感謝申し上げます。

〔参考文献、資料〕

1.むなかた電子博物館　歴史・文化財・自然（2010年版）http://d-munahaku.com/
2.発見！探検！むなかた　－ふるさとの歴史－　2006年　宗像市教育委員会
3.宗像市史　第１巻　通史編　自然・考古　1997年　宗像市史編纂委員会
4.東郷登り立て遺跡調査報告書　2001年　宗像市教育委員会
5.概報　田熊石畑遺跡　　2009年　宗像市教育委員会
6.ものづくりの考古学　　2001年　大田区郷土博物館編
7.日本の歴史　原始・古代　　2003年　週刊朝日百科37

【レポート】

「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展」を終えて

白木英敏

1.開催にあたって

平成20年4月、宗像市田熊二丁目に残された約3.1ヘクタールに及ぶ土地開発に先がけ、田熊石畑遺跡の発掘調査が始まった。調査開始からほどなく、弥生時代中期前半頃の墓域が見つかり、6基の墳墓から銅剣・銅矛・銅戈の武器形青銅器が計15点出土した。ひとつの墓のまとまりから出土した点数としては日本最多級となり、通説に反して宗像地域の弥生時代に有力者集団の存在が確認されるとともに、北部九州における弥生時代の集落や墓制を考える上でも、きわめて重要な発見であることがわかった。関係者の尽力の結果、全面保存されることになった。

平成22年2月22日「田熊石畑遺跡」は、早くも国史跡に指定され、本市では昭和46年指定の「宗像神社境内」、昭和51年指定の「桜京古墳」に次いで34年ぶりに誕生した3件目の国史跡である。これを記念した企画展を開催し、指定の周知化や現在計画策定を進めている市民参加による史跡整備へとつなげていくことを趣旨とした。

企画展オープン時の会場

2.開催概要

名　　称：国史跡指定記念企画展
　　「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展　－海人たちの足跡－」
場　　所：宗像ユリックス2階　市民ギャラリー（約140㎡）
開催期間：平成22年10月9日（土）～10月31日（日）
開館時間：午前10時～午後5時（入室は4時30分）
その他：入場無料。DVDで映像資料放映。期間中の10月19日に展示替え。

3.内容

本企画展は、田熊石畑遺跡の武器形青銅器をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡出土品を展示し、内陸部の穀倉地帯を生業の基盤とし、大海原を舞台に活躍したムナカタ海人族の足跡をたどるものである。このほか、平成22年3月11日、国の登録有形民俗文化財となった「玄界灘の漁撈用具及び船大工用具」の一部を展示した。これは明治期から昭和50

年代まで使われていた漁撈用具やその漁に使った木造和船を作るための用具で、ムナカタ海人族の末裔ともいえる人々の生業や信仰を伝える文化資産である。

田熊石畑遺跡から出土した土器の展示

田熊石畑遺跡7号墓出土品

また、福津市教育委員会の協力で今川遺跡出土の日本最古の青銅器（弥生時代前期初頭）や日本でわずか30例ほどしか見つかっていない手光於緑遺跡（てびかおみどりいせき）出土の木製短甲（弥生時代後期）などがある。

なお、本企画展では「宗像」を「ムナカタ」と表記した。これは現在の行政区を越え、福津市を含んだ歴史的なまとまりの範囲であるという意味と、その時代は８世紀以降の文献史料に記された「胸(むな)肩(かた)・宗形(むなかた)・宗像」以前である、というふたつの意味をこめている。

展示構成は、4部構成とし、Ⅰ部「古代のムナカタへ（弥生時代1）」はムナカタが武器形青銅器を保有する基盤となった弥生時代の人々の生活と各地の交流、Ⅱ部「ムナカタ海人族の台頭（弥生時代2）」はムナカタの武器形青銅器からみた「クニ」への成長をたどり、Ⅲ部「ムナカタ海人族の繁栄（古墳時代）」は田熊石畑遺跡で見つかった掘立柱建物（高床倉庫）群の意味することや、そこに納められたであろう古墳時代ムナカタの特産物を紹介、Ⅳ部「海に生きる人々（明治～昭和）」は玄界灘の登録有形民俗文化財とした。共通のテーマは「海と生きる」ということで「ー海人たちの足跡ー」を副題とした。

4.開催の広報と関連イベント

プリンター出力をカラーコピーしたものではあるが、A4及びそれを拡大したA3サイズの開催案内チラシを作成し、コミュニティ、学校関係に配布、あわせて宗像市広報10月１日号掲載、定例記者発表で内覧会の案内などを行った。内覧会は、平成22年10月8日（金）の午後1時30分より行い、田熊石畑遺跡の前地権者代表2名をはじめ教育委員、文化財保護審議会委員、歴史観光ボランティアの会、マスコミ等約30名を招いた。また、宗像市長より全面保存にご理解いただいた前地権者へ感謝状と記念品の贈呈式が行われた。

オープニングでは、図書課と協働で年4回開催している「むなかた見聞学講座」第4回とあわせ、文化財担当者数名が２０名程度のグループをローテーションで解説し、来場者数は期間中最多の311名を数えた。

5.むなかた電子博物館との連携

開催に先駆け、9月28日から電子博物館上でカウントダウン方式（開催まであと何日）による開催告知を行った。また、主な展示品の写真についても順次アップし、下調べや学究意欲向上のためサイト内の関連コーナーともリンクさせた。

さらに、当初からの計画ではなかったが、試行的な取り組みとして企画展をバーチャル上で再現できないかと考えた。施設を使用した企画展はある期間で終了するものだが、ウェブ上で公開することで、関心があるにもかかわらず様々な理由で足を運ぶことのできなかった人々や再度見学したいというリピーターへの対応としても有効と考えた。

もっとも、本物の持つ存在感までは再現できないが、展示会場では見ることのできないカット、例えば銅鏡のウラとオモテを並べて公開するなど現実の展示プラスアルファを工夫することで、電子博物館ならではのメリットを生み出すことは十分可能である。可能ならば会期中の公開が効果的とも考えたが現在準備中である。当初より電子博物館での公開を念頭に入れた準備を行い、スムーズな公開を目指す必要があろう。

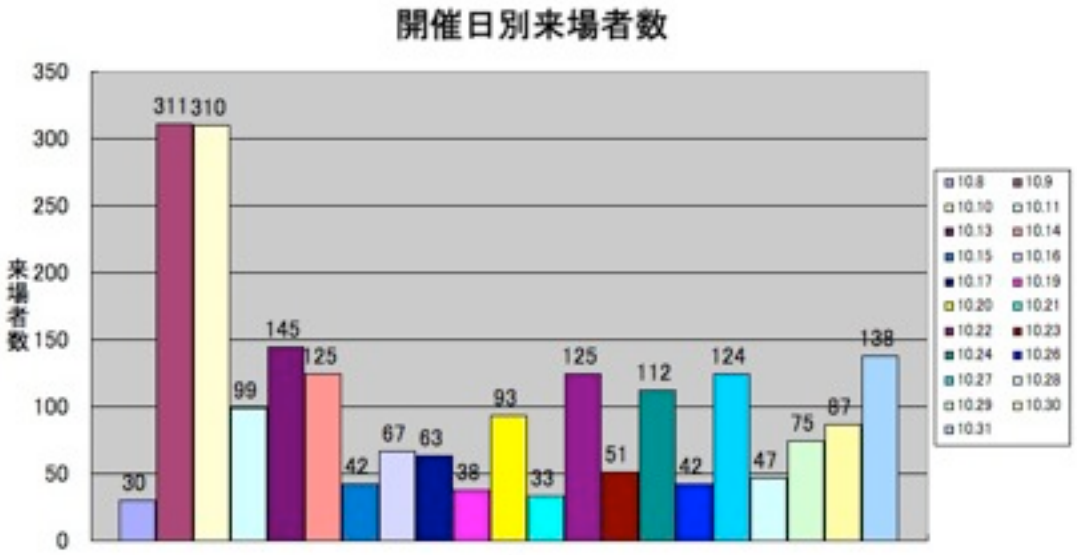
6.来場者数とアンケート調査の結果

ユリックス休館を除いた実質の開催期間は21日間で、来場者数は2,157名、実施したアンケートは445枚で回収率20％である。年齢構成は60代が最も多く次いで70代、50代である。50代以上が約70％で、これはむなかた見聞学などの歴史講座受講者の年齢構成とほぼ同じである。

住まいは市内と市外がほぼ半々で、企画展開催の新聞掲載等により、歴史に関心を持つ市外からの来場者も多かったとみられる。

来場理由は、ユリックス来館時に企画展開催を知った方が多く20％、友人・知人からが12％、事前告知では広報が20％で主体であった。ウェブでの告知については市ホームページが3％、むなかた電子博物館は1％未満の2人であった。

満足度は「満足」・「やや満足」が約80％、「普通」が約15％である。「やや不満」・「不満」では、その理由に「会場の狭さ」が挙げられている。



7.評価

市内の弥生時代・古墳時代の資料を一堂に公開し、宗像市の歴史の豊かさを実際の資料で間近に見られたことが好評であった。さらに、民俗資料館で使用していたパソコンを利用したクイズや、展示替えにともなって設置した「触れる土器（弥生土器・須恵器）」も子どもの関心を引くことができた。一方で、展示面積が狭いため、テーマを決めてより内容を深めた展示を求める意見も多数見られた。企画展中にリピート機能で流し続けられるよう、複数の内容を1枚に取りまとめたＤＶＤを作成し、イス席を設けて放映した。放映内容は鐘崎の漁撈に関する「海に生きる（約19分）」「桜京古墳の3次元測量成果」で、「海に生きる」のドキュメンタリー映像は大変好評であった。また、会場は狭く、ユリックス2階であるなど立地条件は良いとはいえない中、1日平均100名を超える入場者数を達成している。

8.課題

企画展のコンセプトと内容構成の決定が最も重要で時間を要するところであり、本企画展でも田熊石畑遺跡と玄界灘の漁撈具をどのように紹介するかが問題であった。しかし、準備期間を十分取れなかったため資料や遺物の紹介で留まってしまい、類例の調査や資料の検討などの展示内容を深める作業まで至らなかった。そのため、見学者が要望していた具体的な年代や宗像市内の遺跡との関連性などの表記が不十分となってしまった。また、小学生向けの配布資料の作成や、実際に触れられる資料の確保などより分かりやすい展示を目指す予定であったが、不十分であった。

その他、映像資料等については、市が所有する「久原遺跡の整備」などの候補もあったが、ＶＨＳからＤＶＤへの取り込みが間に合わなかった。今後は映像や音声の劣化が懸念されるため、多量にあるＶＨＳや8ｍｍテープ、カセットテープ等のデジタル化を計画的に進める必要がある。

9.まとめ

企画展示とは一編の論文を生み出すことにも通じ、テーマや内容の深化にはそれ相応の時間と労力を要するといえる。本企画展は、内容的には準備不足であったにもかかわらず、予想を超える来場者数と高い満足度を頂いた。これには、世界遺産登録活動など本市を取り巻く歴史熱の高まりや宗像の歴史自体が有するブランド力が背景にあると思われ、今後、来場者の期待を裏切らない努力をより一層求められよう。また今回、電子博物館で企画展を知ったというアンケート回答が思いのほか少なく、電子博物館の持つ情報発信能力が活かされていないことも課題である。今後、潜在的な能力をいかに開花させることができるか、これは郷土文化学習交流施設とむなかた電子博物館の両輪駆動、言わばリアル・バーチャールの連携によって成し遂げるべきであろう。

今回の企画展示で見えてきた様々な課題は、平成24年度オープンを目指して準備中の博物館機能を持った郷土文化学習交流施設（仮称）の取り組みに活かしていきたい。

【資料】

宗像市郷土文化学習交流施設の概要

博物館建設に向けての市の動き

清水比呂之

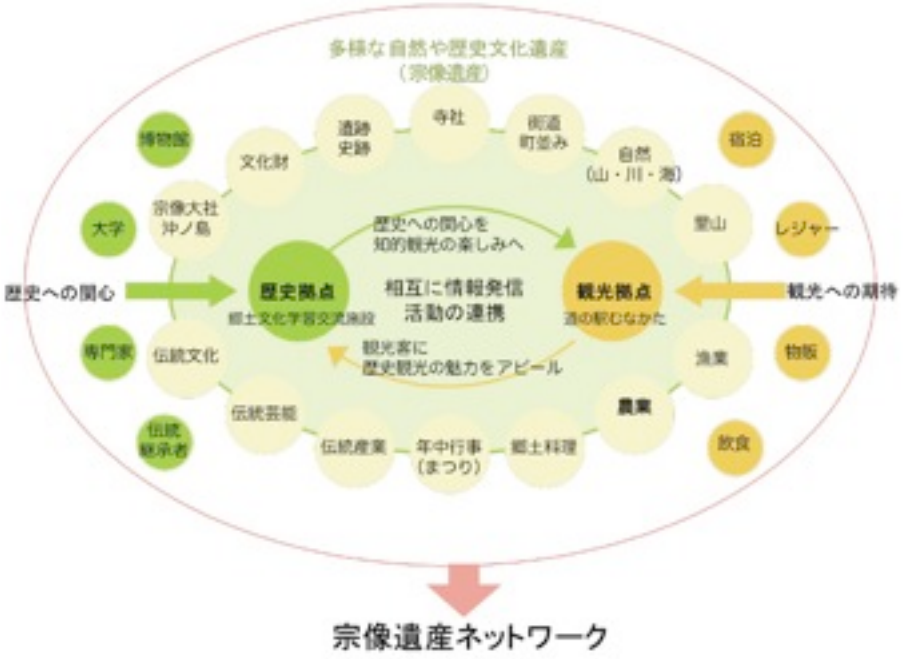
はじめに

本報告は、郷土文化学習交流施設の建設にいたる、20年以上にわたる市の主要な動き、重要なテーマとなる海人や宗像遺産を中心に、施設のコンセプト、今後の方向性についてまとめたものである。

郷土文化学習交流施設は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産のガイダンス機能や宗像遺産の展示、体験学習等の機能を備えた歴史拠点施設であり、アクシス玄海（宗像市玄海文化センター）を改修することで、2012年4月オープンを予定している。

施設の位置づけは、市域の自然や歴史文化を結ぶコア施設であり、宗像遺産ネットワークを構築することで、宗像市全体をひとつの博物館と見立てていく方向性をもっている。

さらに、施設に資料や情報を集約するだけでなく、現地へ足を運び、自然風土を体感し、地域の人々との交流を楽しみながら、宗像の歴史文化に親しみ、知るための、新しい歴史学習、歴史観光を展開していくものである。



1.施設の経緯

郷土文化学習交流施設は、アクシス玄海という多目的な文化施設をリニューアルすることで、生まれ変わる施設である。アクシス玄海は、1993年に開館され、宗像大社に近接し、多くの集客が期待された。その後、1996年には、施設の一部をアクシス玄海物産館として改修し、地産地消をモットーに地元の魚介類、農産物の直売所として、集客を誇った。その後、2008年に『道の駅むなかた』がオープンすることにより、直売所の機能は移転され、アクシス玄海の機能は、大ホール、図書館、会議室、文化財の整理室といった内容に継続、変更されることになった。また、管理運営の主体は、開館以来、旧玄海町及び市の直営であったが、2006年4月からは地元の田島コミュニティ運営協議会がその任にたずさわっている。

2010年7月には、宗像市郷土文化学習交流施設基本構想・基本計画（以下「基本計画」）を策定し、2010年度は、実施設計、2011年度は施設の改修のための工事と展示を予定している。

2.海人とは

郷土文化学習交流施設の展示の大きなテーマとして、「海人」があげられる。2010年10月に宗像ユリックスで開催した「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展　～海人たちの足跡～」では、海人をテーマに実施しており、郷土文化学習交流施設のオープン時の展示ストーリーは、「海の道」というコンセプトである。そこには、海人という対象が大きくかかわってくる。

2-1.海人の定義

このような海人をテーマにした海人研究の嚆矢は、1989年に宗像で行われた「シンポジウム『海人』日本民族文化のルーツを求めて」であった。おそらく、このようなテーマの設定が、その後20年の歳月を経て、2009年の世界遺産暫定リスト登載「宗像・沖ノ島と関連遺産群」に結びつくきっかけのひとつになったといっても、過言ではない。

海人の定義について、海人シンポジウム実行委員長である田村圓澄氏は、海人の生業形態から、その登場の時期について、「海の生活、あるいは海を生業の場とするということを海人であることの条件とするならば、海人の歴史は、米を主食とし、またそれを生活の一部としているところの農人の出現より以前、つまり農業、農耕の歴史よりももっと前から存在していたはずである」とし、弥生時代以前の狩猟採集形態の縄文時代から、その出現の可能性を示唆している。

また、大林太良氏は、「古典の中には、あま（海士、海女）が出てくるが、その中に海部（あまべ）というのがあって、中央政府のコントロールの下にあり海人たちが盛んに出てくる。10世紀につくられた倭名類聚抄の中には、太平洋岸は千葉県、日本海岸は福井県を東の限界として、西日本の海岸には点々と海部郡、海部郷が分布している。こういう海部郡、海部郷をつくったり、広い意味での海人と呼ばれる人たちは、漁撈、航海、この二つを主な活動としているが、一般的な傾向としては、漁民の中から航海者というものが専門家として出てくると考えられる」とし、このような古代における航海者の出現に、海人の漁民的要素が

深くかかわっていたと示唆している。

2-2.海人シンポジウムの開催

海人シンポジウムは、これら、海人における系譜について、民族学、民俗学、考古学、歴史学等の立場から、各界の著名な研究者を一堂に介した、きわめてアカデミックな内容になった。

「海人には学問的に未開拓の部分があり、その未開拓の分野に光を当てる、その海人を学問的に解明することにより、宗像の私たちのルーツを探るという狙いがある。ルーツを探るということが、よりよい宗像づくりのための大きな基礎になる」と当時の宗像市長、瀧口凡夫が「シンポジウム『海人』日本民族文化のルーツを求めて」の開会挨拶で述べている。

1989年10月に宗像市で開催された、このシンポジウムでは、古代を中心にした海人に関する基調講演、報告、討議が行われた。
基調講演として、海人の系譜をめぐって（大林太良）、古代韓国・朝鮮の海人（井上秀雄）、海人の原型とその末裔（谷川健一）、報告として、「倭の水人」とそのルーツ（永留久恵）、沖ノ島祭祀を再考する（奥野正男）、近世からみた古代筑前の浦（高田茂廣）、漂着物のつぶやき（石井忠）、牛頭山と素戔嗚（朴成壽）、住吉神と宗像神（荒木博之）が発表された。なお、シンポジウムの内容については、田村圓澄・荒木博之編（1991）『古代海人の謎　宗像シンポジウム』として、まとめている。

さらに、1992年10月に宗像郡福間町で開催された「海人シンポジウム２東アジアの中の宗像」では、中世を中心にした海人に関する基調講演、報告、討議が行われた。基調講演として、海の民俗文化と北九州（宮田登）、中世の海上交通と北九州（網野善彦）、報告として、古代・中世宗像の対外関係（川添昭二）、海人勢力の政治的結集と発展（奥野正男）、中世の宗像大宮司と海（正木喜三郎）、宗像地域出土の貿易陶磁器（亀井名德）、中世後期の宗像氏と朝鮮（佐伯弘次）が発表された。なお、シンポジウムの内容については、川添昭二・網野善彦編（1994）『中世の海人と東アジア』として、まとめている。

3.海人文化村構想

1989年、1992年に実施された「海人シンポジウム」を契機として、海人は、宗像地域の核となる海人博物館を中心にした文化村づくり「海人文化村構想」へと発展していく。1995年3月には、宗像地域連絡協議会が、「むなかた海人文化村構想調査研究事業」報告をまとめる。この中で、「むなかた海人文化村は、日本人のルーツである海人文化をテーマに、日本人としての自己を知る（再認識する）機会であり、海（自然）と人との関係の再考する機会を与えるミュージアム機能「むなかた海人博物館（仮称）」を軸にすえ、情報発信と、交流促進による地域の産業活性化を含む新しい地域文化情報発信拠点である」と位置づけた。

なお、この建設の候補地として、①宗像ユリックス周辺地区　②宗像大社周辺地区　③宮地嶽神社周辺地区の３地区をあげた。その上で、宗像地域における海人博物館の位置づけを5本の柱に整理した。

アジアというテーマの中で海人は重要なキーワードである

現在の県立博物館に海をテーマとするものがない
福岡県北部セクターに県立歴史系博物館がない
福北大都市圏の連携強化と宗像地域の活性化の引き金となる
宗像地域は海人ゆかりの地である

この5本の柱を軸にして、宗像地域連絡協議会は、宗像地域への県立博物館の誘致へと動きを進めるが、旧大島村には1993年に旧大島村民具資料館、旧玄海町には、同年にアクシス玄海、1997年に旧玄海町民俗資料館が、それぞれ開館あるいは開催予定であったため、宗像地域としての足並みを揃えることが出来なかった。

4.宗像遺産

このような事情により、海人文化村構想は、一時期頓挫することになるが、2002年には、シンポジウム「海の正倉院・沖ノ島～いま蘇る太古のロマン～」が開催。2003年には、宗像大社神宝館での企画展示、沖ノ島物語「海の正倉院・沖ノ島大国宝展」を契機に、沖ノ島の世界遺産運動への展開が具体化する。そして2009年には、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」として、世界遺産の暫定リストに登載されることになる。

ここで、世界遺産とあわせて、宗像遺産という重要な定義が登場する。宗像遺産の提唱者である養父信夫氏は、宗像市人づくり・まちづくり研究紀要（2007）の中で、宗像研究所・宗像学・宗像遺産という3つのテーマを繋げることの重要性を次のように述べる。「宗像学は別の言葉で表せば、宗像の地元学ということであり、この提唱者は九州では水俣の吉本氏、東北では結城氏である。“地元のことは地元に聞く”ということがその基本スタンスであるが、これは従来の陳情型を進めることではない。地域がもっている自然環境、歴史的状況、現在の生業の状況など広い見地で、フィールド調査を行い、その上で地域地域ごとの地域づくりの方向性を決めていくという地域づくりの手法なのである」とした上で、「宗像遺産は、この宗像学のひとつの特化したものであり、宗像の従来からの住民、新住民も含め、地域づくりに参加してもらうための御柱になるものであろう。ここで大切なことは、沖ノ島の世界遺産的な文化価値の評価（歴史・文化遺産）だけにとどまるのではなく、宗像の神々を守り続けてきたムラ人たちの暮らし、生業を後世に繋げていくこと（暮らしの遺産）、そして農漁業という生業が自然を守っていくことの認識（自然遺産）を、宗像遺産運動を通じて、市民内外に広げていく過程が大事なのである」としている。

この宗像遺産の定義にそって、市では、宗像遺産＜文化遺産編＞、同じく＜自然遺産編＞、＜暮らし遺産編＞の3部作を、2007年から毎年、刊行していった。文化遺産編では、宗像大社辺津宮本殿をはじめ、阿弥陀経石、木造・石造狛犬、鎮国寺木造不動明王立像など国・県・市の指定有形文化財を中心に、東郷高塚古墳、久原澤田古墳群、朝町竹重遺跡などの史跡もあわせて、全部で４２の文化遺産を解説している。

さらに、自然遺産編では、沖ノ島、大島、地島、さつき松原、釣川、城山などの四塚をはじめ、新立山、許斐山、白山のほか、名木、名花など３２の自然遺産を紹介している。

また、暮らし遺産編では、みあれ祭、宗像大社秋季大祭、八所宮秋季大会、祇園山笠などの無形文化財（信仰・行事・芸能）をはじめ、出光佐三、早川勇、武丸正助などの人物や、鶏のすきやき、のうさばなどの食、宗像の伝説、民謡など、４２の暮らし遺産を紹介してい

る。
なお、宗像市（2010）では、宗像遺産について、「宗像の自然や歴史文化などの地域資源を多様な視点から掘り起こし、その意義や魅力を宗像地域の「遺産」として伝え、また活用するものの総称である」とした。

5.郷土文化学習交流施設

このような1989年に始まった海人をテーマにした「海人シンポジウム」の開催から、「海人文化村構想」への発展、さらにはその構想における宗像大社周辺地区という候補地。そして、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産暫定リストへの登載とあわせて、宗像遺産の定義づけなど、20年を超える歩みの中で、今回の郷土文化学習交流施設への準備は整ったといえる。そこで、基本計画では、施設の理念を三つ掲げている。

歴史文化の継承のための中核施設
市民と協働し、連携する地域還元型の施設
市域の自然や歴史文化を結ぶコア施設

なお、基本計画では、特に、市民との連携と協働による活動が重視されており、その活動内容について、以下のとおり、整理する。

5-1.市民との連携と協働による活動

（１）郷土文化の学習支援活動
郷土文化の学習支援活動としては、宗像遺産としての地域素材を教材化し、指導計画や副読本などの基礎的資料集を開発する。
また、児童生徒や市民が宗像遺産にかかわる体験をしたり、必要な資料を収集・分析・整理したりすることができるように、学習・情報センターとしての機能を充実する。

（２）地域づくりと観光振興の推進活動
宗像遺産を観光資源として活かし、地域の賑わいを生み出す新しい歴史観光の企画開発を行う。宗像各地を訪れた観光客が宗像を楽しみ、より理解してもらえるようサポートするボランティアガイドなどの人材育成を行う。

（３）世界遺産の市民運動向上活動
「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向け、市民が世界遺産の意義や価値について知り、認識を深め、市民活動を広げていくための活動を行う。

これら活動の中で、要になるのが、人材の確保ということになるが、そこで、その中心的役割を担う人材として、新たに、地域学芸員の養成を加える。
なお、地域学芸員の養成については、2011年に策定された「宗像市文化芸術のまちづくり10年ビジョン」の中で明記している。

5-2.地域学芸員の養成

宗像市文化芸術のまちづくり10年ビジョンの基本目標のひとつに、文化芸術的資源を保

存・活用・継承します、という目標を定め、そのための重点プロジェクトとして、地域学芸員の養成をあげている。

この中で、地域学芸員は、市民からの募集により、地域学芸員養成のための講座を受講し、郷土文化学習交流施設等の展示企画、運営、歴史観光案内などの役割を担うこととする。また、むなかた電子博物館との連携は、一層強化していく必要がある。

5-3.むなかた電子博物館との連携

2005年に開館された「むなかた電子博物館」では、開館以来、市民パートナーを中心に、歴史、文化、自然など幅広い分野の情報提供を行ってきた。2010年には、宗像ユリックスにおいて田熊石畑遺跡の企画展示を実施したが、展示の開催案内を事前に行い、企画展示の終了以降は、電子博物館上で、展示品や内容の解説が紹介できるしくみをつくる。

今後ともこのような、実際の施設での展示と電子博物館での展示をリンクさせながら、相互の特性を生かした情報提供を行っていく。

そこで、具体的な施設での展示内容については、以下に記す。

5-4.展示の内容

開館時のテーマは、「海の道」である。この中で、展示の柱として４つの展示方法を設定する。

一つが、通常の通史展示、さらにテーマ別に展示を行うポケット展示、また、３Dシアターを中心に、沖ノ島を中心とした世界遺産関連の展示、そして、厳重な保管施設を有する重要文化財対応展示室における国宝・重要文化財の展示である。

（１）宗像の歴史展示

宗像の歴史として、宗像人の来た道（旧石器～縄文時代）、稲作文化が渡った道（弥生時代）、最先端技術が渡った道（古墳時代１）、半島・大陸との交流の道（古墳時代２）、拡大する海外交易の道（奈良～室町時代）、鎖国時代の道（安土桃山時代～）という時系列に従った通史展示を行う。

（２）宗像遺産のポケット展示

宗像遺産のポケット展示として、豊かな海をつくる森（宗像の自然・学校連携）、漁業の知恵（道具しらべ・宗像の暮らし１・学校連携）、船をつくる（道具しらべ・宗像の暮らし２・学校連携）、船魂様（宗像の文化・観光連携）を行い、学校の教程との連携をとりながら、展示内容をフレキシブルに変更できる内容とする。

（３）世界遺産「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の展示

沖ノ島祭祀3D検索、宝物が伝える古代アジア交流、沖ノ島紹介3D

（４）重要文化財対応展示

宗像海人の海外交流

6.まとめ

以上、海人、宗像遺産等のテーマ設定にいたる経緯を含めて、整理を行ってみたが、今後の目指す方向性について、まとめを行う。

基本計画の中では、歴史文化に自然等を加えた宗像遺産を次世代へ継承すると同時に観光資源としても活用し、宗像の魅力を市内外へ発信し、地域の活性化へつながるための新しいネットワーク（宗像遺産ネットワーク）を構築する、としている。

宗像遺産ネットワークは、宗像遺産同士を結びつける閉鎖系のネットワークといえるが、全体のテーマ性からいくと宗像のルーツを探る旅や、海人という対象を明確化することで、内容としては外に向かって、開放されていくストーリーの構築が可能である。

日本文化について考えるにあたり、荒木氏は、第1回シンポジウム「海人」の中で、開放と閉鎖という指標をもつことの重要性を指摘しているが、海人という海洋文化的な開放型の方向性と定着農耕民というある意味では閉鎖型のまとまりが、この宗像で同時に織り成す風景として、十分に描けるのではないだろうか。

宗像地域という地理的な特性は、アジア大陸に近接しているという立地だけでなく、北に海が開き、釣川という河川を中心に沖積地が広がり、その周囲を山が取り囲むという、自律型の生態系の基盤を形成しているのである。この地理的特性が、生活圏や文化そのものを規定し、弥生時代でいえば、クニとしての範域に大きな意味をもたせたのではないだろうか。

日本の基層文化を考えるにあたり、考古学や歴史学、民俗学的知見はもちろんであるが、天文学的知識や海洋の実態など、海洋文化における航海の実態が、ますます究明されていく必要性は、十分にある。

ここにおいて、広範囲な宗像学という分野の確立とともに、それらを体現できる展示構成、歴史観光ツアー、体験学習、電子博物館との融合が重要である。また、高田浩二氏は、「2010年度においては、社会教育において“新しい公共”という概念が示され、博物館の機能により一層の公共性が求められている。このように、今ほど博物館と学校の連携に追い風が吹いている時代はない」とする。この施設においても、特に学校との連携授業ということで、前述のとおり、体験学習や展示見学、野外見学、さらには電子博物館との融合などをカリキュラム化していくソフト展開を進めていく。それとともに、新しい公共という概念の中で、人が集い、交流を深めることのできる自由度の高い、施設運営も進めていく。

地域学芸員は、この施設の運営における要となる人材になっていくが、宗像学および宗像遺産の具現化のためには、地元学の手法により、地元のあるもの探し、地元の輝きに気づく、気づかせる役割を担っていただきたい。

そこに、世界遺産および宗像遺産運動としての必然性が生まれることになり、本施設が、宗像、ひいては日本人のルーツを探るための動的な装置である一方、人づくり、地域づくり、まちづくりにつながる発信拠点としての役割を明確にできる。

参考文献

宗像市（2010）「宗像市郷土文化学習交流施設基本構想・基本計画」
田村圓澄・荒木博之編（1991）『古代海人の謎　宗像シンポジウム』海鳥ブックス８
川添昭二・網野善彦編（1994）『中世の海人と東アジア』海鳥ブックス１６
宗像地域協議会（1995）「むなかた海人文化村構想調査研究事業委託業務報告書」
養父信夫（2007）「宗像研究所、宗像学、宗像遺産」『研究紀要第１集』宗像市人づくり・まちづくり研究所

宗像市（2007）『宗像遺産<文化遺産編>』　ジーエータップ
宗像市（2008）『宗像遺産<自然遺産編>』　ジーエータップ
宗像市（2009）『宗像遺産<暮らし遺産編>』　ジーエータップ
宗像市（2011）「宗像市文化芸術のまちづくり10年ビジョン」
高田浩二（2010）「水族館におけるICTを活用した海洋教育」KANRIN　日本船舶海洋工学会誌　第31号

【資料】

旧宗像市民俗資料館について

平松秋子

１．はじめに

平成22年3月31日、22年間の歴史に終止符を打って宗像市民俗資料館は閉館した。宗像市で唯一存在した実物の資料館であった。民俗資料の宝庫といわれる玄海灘沿岸の鐘崎にあり、地元の人々は日本海沿岸の海女の発祥の地だと自負し、鐘崎文化を象徴する施設だと誇りに思っていた資料館である。

閉館に際して地元からは「民俗資料館は、この鐘崎の風土を体感できる場所にある。海女や漁業関係の資料の展示はこの場所でなければ意味がない」と存続の必要性を訴え、署名活動が行われた。資料館を見学に訪れた多くの見学者からも、「海のすぐそばにあって、周囲の環境と解け合い、海女や船に関する資料など貴重な展示品を見ることができる」という感想が寄せられ、閉館は惜しいという意見が多く寄せられた。

閉館という事態を受けて、収集された資料の公開は今後どのようにしていくのか。宗像市では、宗像大社の近くにある「アクシス」を改修して郷土文化学習交流施設(仮称)とし、その中の1室を文化財展示室にあてるとしている。多くの文化財がある宗像市の場合、展示室のスペースは十分であるとは言えず、民俗資料の展示は限られたものになると思われる。そこで、筆者は、これまで民俗資料館が歩んできた歴史と、収集された資料や行われた事業について振り返るとともに、今後、民俗資料の公開をどのような形で行っていけばよいかについて、考えてみることとした。

２．宗像市民俗資料館の自然的環境

福岡県宗像市鐘崎は福岡県の北部に位置し、玄界灘に面した弓状の海岸地帯にある。鐘崎の最北端にある「鐘の岬」は玄界灘に張り出した半島である。ここには織幡宮があり、平安時代に編纂された『延喜式』にも宗像大社に次ぐ神社として社名がある。漁業に従事する人々の心のよりどころとして、また地域の氏神様として親しまれ、毎年４月には春祭も行われている。この海岸の続きに県内最大の漁港・鐘崎漁港があり、地島行きの市営渡船場も設けられている。大島と鐘崎の間の海域は航海の難所であり、万葉集にも『ちはやぶる鐘の岬を過ぎぬともわれは忘れじ志賀の皇神』と詠まれている。『続日本紀』767年8月の条には、宗像朝臣深津とその妻竹生王（皇族とされる）が僧寿応に勧められ「鐘崎船瀬」（船が停泊するところ）を造り官位を授かったとある。中世以降はここの海女が活躍し、その名を現在に残している。鐘崎漁港の西側の小高い砂丘には鐘崎貝塚があり、縄文時代の土器が出土し描かれた文様が標識土器となっている。この海岸砂丘は全国白砂青松百選にも選ばれた五月松原へと続き、神湊へ至る。

古代から続くこの海辺に宗像市民俗資料館であった建物が今もある。二つの切り妻屋根に挟まれて中央を玄関とし、その上層は総ガラス張りの尖った三角の塔が空へ向かって伸びている。のどかな漁港風景の中に近代的な建物が目を引く。

３．鐘崎海女について

鐘崎はその昔、宗像海人達の中心地であったが、また日本海沿岸の海女の発祥地といわれている。「海人」とは古来漁撈に携わっている人々を総称して「海人（アマ）」と呼んでいた。魏志倭人伝には、西日本沿岸の海で見られた「潜水漁法」の様子を記している。「潜水漁法」とは素潜り漁のことである。「海人（アマ）」には次のものも含まれる。「海士（アマ」とは素潜り漁をする男性のことで、また、「海女（アマ）」とは素潜り漁をする女性のことを指す。

鐘崎海女の起源についてはいくつかの説があり、　①今日でも海女漁が盛んに行われている韓国の済州島との交流によって伝わった。②南方民俗が家船（えぶね）で移動しながら最終的に鐘崎に定住し、海女漁を始めたなどの説がある。鐘崎漁業協同組合によると、平成23年1月現在「海士」はおよそ20人、「海女」は2人であるという。海女の数が減ってきて、このままでは伝統ある鐘崎海女が消えていくという深刻な状況にあるということである。

今から3500年前の縄文時代後期の鐘崎貝塚からは、サザエ・アワビ・ハマグリ・アサリ・アカガイ・カキや淡水産のシジミなどの貝が大量に出土している。鐘崎の人々は豊かな海の恵みを得ながら暮らしていた様子がわかる。

魏志倭人伝にあるように、素潜り漁は漁業では最も古い漁法である。その素潜り漁をする海女について、江戸時代の国学者・貝原益軒は『筑前国続風土記』(1706)　の中で、糸島から芦屋までの漁村のうち、鐘崎、大島、波津、志賀島の4カ村で女性が海女として働いているが、特に鐘崎の海女は漁が上手であると書いている。

海女の人数は、江戸時代には約300人、大正時代には約200人、昭和13年の調査では130人いたが現在ではわずか２人である。

鐘崎が日本海沿岸の海女の発祥地とであるという由来は次のようなことによる。鐘崎海女の特性はアマアルキ（出稼ぎ）と潜水技術の優秀さにあるといわれる。鐘崎はもともとアワビやサザエの生息する磯場が少なく、海女達は漁場を求めてアマアルキを行うようになり、その場所に定住したり、自分が持っている技術を伝えたりした。鐘崎がルーツであると伝えられる海女浦は石川県の輪島や山口県の大浦、長崎県対馬の曲、壱岐の小崎など4カ所の浦がある。このアマアルキこそが鐘崎が日本海沿岸の海女の発祥地といわれる由縁である。アマアルキは日本海ルート、対馬ルート、五島ルートの三方向があった。また定住した場所は枝村と呼ばれている。「鐘崎おなごはよく働く」といわれ、鐘崎海女のたくましい活躍が伝えられている。

４．民俗資料館の運営

資料館の閉館までの経緯はつぎの3期に分けられる

4.1　1期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
1期	昭和63年6月1日 から 平成8年5月20日	玄海町立 民俗資料館	日並 文夫	玄海町上八762	無料
	昭和62年町立幼稚園の合併で廃園になった旧岬幼稚園舎を転用 地域日の人々の熱い思いと関係者の熱意で玄海町始まって以来の民俗資料館が開館した。開館日は日曜と水曜、その他は連絡して来館する。ケースの中をただ見るだけの展示ではなく、触れて動かして試してみる生きた資料館を目指して動き出した。				

1期の事業内容

これまでに収集した資料と、町民への呼びかけで集められた資料を整理分類して展示が行われた。本館は海女・鐘崎貝塚遺物を、１・２号室は農具、3号室は民具、４・５号室は漁具で、展示資料の合計は446種1,057点であった。

4.2　2期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
2期	平成9年4月1日 から 平成15年3月31日	玄海町 民俗資料館	中村清	鐘崎776番地4	大人200円 小中学生 無料
	国の沿岸漁業活性化事業の許可が下り、鐘崎漁港港湾設備事業の一環として、新「美しい漁村モデル事業」の郷土文化伝習施設として新築された。鉄筋コンクリート造りで4階建て。玄界灘を背景に建てられたため資料館の中からも海が眼下に見える。 総工費　346,511千円　国補助金　196,840千円　残りは地元負担 延面積　1146.57㎡				

2期の事業内容

平成9年度

・４月から１年間企画展示「和船のできるまで（船大工道具）」

船大工道具６４種類の展示

（３月２９日　４月開館前日イベント）　「海人今昔ものがたり」

アクシス玄海　「海と緑のホール」で開催

「海」について　中山千夏氏・高田茂廣氏の対談

５人によるトークショー　中山千夏　高田茂廣
長野亜矢　中橋義幸　他１名
・7月27日　講演会「鐘崎海女の活躍と生活」講師　広橋新三
・10年2月22日　親子凧づくり教室　講師　今村正彦

平成10年度
・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」
平成3年11月に福岡県指定文化財（無形民俗文化財）とされた
鐘崎盆踊りを継承・発展させることを目的
指導者　踊り・花田千鶴子　　太鼓・花田圭助
・10月から半年間企画展示「鐘崎海女の足跡をたどる」
鐘崎の枝村の海女道具と人々の生活
・11年3月28日　親子凧づくり教室　講師　(前年に同じ)

平成11年度
・5月から11年3月まで企画展示「貝殻」
50年間収集した貝殻の寄贈品・玄界灘に生息する貝200種の展示
・11年7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者(前年に同じ)

平成12年度
・5月から13年3月まで企画展示。
テーマ「海女・対馬・輪島・済州島」写真や文章パネルを使って展示を行った。
「曲の海女・対馬」「姉妹縁組に調印・済州島」
「海女の移住先・輪島、対馬」　「筑前国海女漁業景況図」(福岡県漁業誌)
明治11年「ノシアワビの製造図」など
・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者（前に同じ）

平成13年度
・5月から14年3月まで企画展示「鯨漁」　図や文章パネルを使用した。
「クジラ解体図」「地の島の捕鯨」「大島の捕鯨」「江戸時代の捕鯨の方法」
「鐘崎海士の活躍」童謡詩人・金子みすゞの「鯨法会」「鯨捕り」二首を紹介
・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者　（前年に同じ）

平成14年度
・5月から14年8月まで企画展示「海づくり・土づくり」
波止・釣川・松林・伊能忠敬・堤をキーワードに
・7月下旬から8月上旬「子供盆踊りの指導」指導者（前に同じ）
・15年2月13日　当館にて民俗資料館運営協議会を開催
（出席者）　館長　中村清・石井忠・日並文夫

4.3　3期

期	期間	館の名称	館長	場所	入場料
3期	平成15年4月1日 から 平成22年3月31日	宗像市 民俗資料館	平成16年度まで中村清 その後市民活動推進課 課長兼任	鐘崎776番地4	大人200円 小中学生 100円
	宗像市との合併により建物はそのままで名称のみ変更。しかし合併後7年で惜しまれながら閉館となる。理由は宗像市が世界遺産登録を目指し、宗像大社周辺の既存の建物を使って、文化財展示施設を備えた郷土文化学習交流施設（仮称）を計画したことによる。				

3期の事業内容

平成15年度

・10月から11月まで宗像市・玄海町合併記念企画展示
　　「鐘崎の海女―東アジアの海人文化交流」
・11月2日　講演　アクシス・海と緑のホールにて
　　伊東彰　「鐘崎の海女の歴史とくらし」
　　李善愛　「済州等の海女の歴史とくらし」
シンポジウム「東アジア世界における海女の歴史と活動」
　　コーディネーター　　石井忠

平成16年度

国の緊急雇用対策で館員を雇用し収蔵庫の民具の整理を行う。
「学力向上フロンティアスクール」の公開授業に館長参加。玄海東小学校６年生が対象。
「伊能忠敬と日本地図」のテーマで社会科学習指導を行う。
平成17年３月をもって中村館長が退館。その後は市民活動推進課課長が館長を兼務することになり、資料館の現場では館長不在となった。

平成17年度

大規模な展示替えをする。新たに古文書の調査と目録作成にとりかかった。

平成18年度

古文書目録作成「山口家文書」
1階は海人と漁具類に2階は船や海をテーマにして展示替え。

平成19年度

・7月から9月まで企画展示「海辺の玉手箱―貝がら展―」
・8月4日　講演会「貝のおはなし」講師　広田俊実
・11月から12月まで企画展示「海辺の考古学―ムナカタ海人族の足跡をたどる」
・11月10日講演会「ムナカタ海人の足跡をたどる」
　　講師　市民活動推進課　白木英敏

平成20年度
市民から民具の寄贈があり、その整理と資料カードづくりと古文書「吉田家文書」などの解読。

平成21年度
閉館が決まり貴重な民俗資料の散逸を防ぐこと、また漁撈具と船・大工道具を国の登録有形文化財の指定を受けるために作業が進められた。目録を作成して申請をおこなった結果、平成22年3月11日、国の登録有形民俗文化財に指定された。漁撈用具969点、船大工道具340点合わせて1,309点である。宗像市民俗資料館は平成22年3月31日、21年間の歴史に終止符を打った。

５．民俗資料館に収蔵された資料

下記の3区分で示す。

福岡県指定文化財は１０項目１３点である。海女が船上で体を温めるために使った「いそひばち」に乗せて使う「ごとく」と、海女が潜水時に使用する「みずめがね」を入れる木箱、「あわびがね」の内1本の3点が付属品である。

今回、国の登録有形文化財として1,309点を申請し登録指定になった。これは閉館に伴い、収集された貴重な資料の散逸を防ぐ目的からである。

その他の収蔵品とは、民具など、鐘崎以外にも市内全域からの寄贈品、保管の依頼をされた資料を指す。

5.1 福岡県指定文化財（海女用具）13点

資料名は申請書に基づく。
写真がない物は「むなかた電子博物館」くらしと共にあった道具を参照。

（海女用具）末尾に付図１として掲載

5.2 国の登録有形民俗文化財1,309点の内訳

5.2.1 漁撈具969点　の明細

（漁撈具969点の明細）　末尾に付図２として掲載

5.2.2 船大工用具340点の内容

（船大工用具340点の内容）　末尾に付図３として掲載

5.3 その他の収蔵品4,535点の明細

文化財係で整理作業が継続中で点数は23年１月18日現在のものである。

（その他収蔵品の表）　末尾に付図４として掲載

６．宗像市における今後の民俗資料の保管収集

収蔵された資料の総数は5,857点である。福岡県指定文化財や、国の有形民俗文化財などは、今後、平成24年度に開館される郷土文化学習交流施設（仮称）の展示場で点数に制限はあるものの、公開展示される予定になっている。その他の資料についてはこれまで通り旧宗像市民俗資料館の収蔵庫で保管されることが決まり、宗像市文化財係では現在も資料の整理が行われている。

今後少人数となった海女からの聞き取り調査や、民具の収集などを地元の協力を得て文化財係で行っていく予定だということである。

７．まとめ

今回の調査により、宗像市民俗資料館が歩んできた２２年間の歴史を明らかにすることができた。開催されたイベント等は２３回に及び、収蔵された資料の総数は５，８５７点であった。残念なことにそれらの資料を収蔵する宗像市民俗資料館は閉館となった。消えていく地域文化を蓄積・保存しデジタルコンテンツにして子供達の学習や生涯教育の場で利活用していくことが望まれる。

民俗資料の宝庫といわれる鐘崎にあり、海女の資料館としても著名であった旧宗像市民俗資料館。この宗像市が収蔵した民俗資料を、インターネットを通じて多くの閲覧者に紹介し、将来に渡り伝統ある文化を守り伝えていくという役割を、むなかた電子博物館は果たすべきである。

なお、旧宗像市民俗資料館の建物は、外観は現状のまま平成23年度より岬地区のコミュニティセンターとして活用されることが決まっている。二階にあった収蔵庫は民俗資料の保管場所としてそのまま継続して使用できることになっている。地域の人々が集うコミュニティセンターとしての再出発を、地域アイデンティティの喪失の場としてほしくない。むしろ民俗情報収集の拠点として、郷土文化学習交流施設（仮称）との連携事業を考えてはどうであろうか。

民俗資料館の建物がそのまま残り、2階の収蔵庫の資料も鐘崎の地に残るということで、とりあえず安堵した。そして、ある書物が脳裏をよぎった。

風景とそれを視る人との関係について書かれた私の恩師、柏倉康夫先生の近著『評伝　梶井基次郎』である。その副題に「視ること、それはもうなにかなのだ」とある。旧民俗資料館の特徴的な三角屋根の建物は、それを目にする鐘崎の人々にとって、いつまでも自分自身のルーツを感じさせる「なにか」であって欲しい。

おわりに、この調査研究にあたって、旧宗像市民俗資料館勤務で現在宗像市文化財係臨時職員の花田悦子氏には、資料提供や助言を頂き大変お世話になり厚くお礼申しあげます。

引用・参考文献

石井忠　「玄界灘の海人」『日本民俗写真体系』6巻　東シナ海と西九州
日本図書センター　2000
柏倉康夫　『評伝　梶井基次郎』左右社2010
鐘崎漁業誌編纂委員会　『鐘崎漁業誌』1992
鐘崎漁業協同組合　『鐘崎海女』1998
楠本正　『玄海の漁撈民俗　労働・くらし・海の神々』海鳥社1993
玄海町誌編纂委員会　『玄海町誌』1985
玄海町史話伝説編纂委員会　『玄海町史話伝説』1995
日並文夫　「海女のふるさと鐘崎」『ふるさとの自然と歴史』7号　　1992
日並文夫　『米寿・高齢者叙勲記念』1999

付図　『旧宗像市民俗資料館について』　平松秋子

付図１　海女用具

	資料名	使用法
1	あたまかぶり	・頭部の保護、黒糸で「大」の字を刺す
2	いそじゅばん	・潜水時に着る肌着、後に氏名、生年月日、年齢が書かれている
3	きりがい	・貝の内側に「あてがい・きりがい」の文字と氏名海中での目安に置く
4	いそおけ	・採集したアワビやサザエを入れる
5	いそひばち	・板、瓦、粘土で作成。海岸の流木を使い船上で暖をとる為の用具。鐘崎海女のみの使用
6	ごとく（いそひばち用）	・火鉢に入れてやかんなどをかける
7	はちこなわ	・稲藁で作った腰縄。捕獲したものを挟み魔除けでもある。よりを16節にして2つづつ数えると8
8	いそべこ	・潜水の時に着ける下着（フンドシ） 魔除けのため5つのヒトデ型の図を糸で刺す
9	あわびぶくろ	・獲物を入れるための木綿糸で作られた袋。たすき掛けにして使う
10	水めがね	・水中を見るための鼻覆いひとつメガネ
11	水めがね入れ箱	・海女個人の秘蔵のめがね入れ、氏名あり
12	あわびがね （長さ53cm×幅3cm）	・あわびを採るときに使う
13	あわびがね （長さ19cm×幅3cm）	

付図２ 漁撈具969点の明細

区分	用具別・点数	用具の詳細	点数
①	磯物採取用具146点	貝採取用具	9点
		海藻採取用具	62点
		その他採取用具	17点
		海女漁の用具	58点
②	突漁用具6点	突漁具	6点
③	陥穽漁用具63点	かご漁用具	36点
		つぼ漁用具（タコつぼなど）	27点
④	釣漁用具219点	釣漁用具（仕掛け）	107点
		延縄漁用具 浮標（ハッポウ） 浮子	79点
		船曳釣漁用具 （ヒコーキ・潜行板）	22点
		その他釣漁用具	11点
⑤	網漁用具127点	網漁用具	50点
		地曳網漁用具　（振り木）	12点
		その他網漁用具	65点
区分	用具別・点数	用具の詳細	点数
⑥	その他の用具45点		45点
⑦	漁具製作修理用具 24点	網製作・修理用具	24点
⑧	水揚・加工・販売用具 112点	水揚げ関係用具	77点
		加工用具	24点
		販売用具	11点
⑨	船及び船関係用具 198点	船	2点
		船付属用具	165点
		船上用具	33点
⑩	信仰・儀礼用具17点	信仰・儀礼用具	17点
⑪	仕事着10点	仕事着	10点

付図３ 船大工用具340点の内容

⑫	船大工用具340点	船図	10点
		墨掛用具	30点
		加工用具	161点
		接合用具	97点
		防水加工用具	9点
		固定用具	20点
		その他船大工用具	13点

付図4 その他収蔵品の表

区分	用具・その他・資料の区分		点数
1	海女用具		21点
2	漁具		103点
3	船大工用具		202点
4	農具		401点
5	民具（吉田家分230点を含む）		2,329点
6	漂着物		299点
7	出土品		110点
8	その他		15点
9	山口文書	文学資料	619点
		絵図資料	41点
10	吉田文書	文学資料・絵図	395点
合計			4,535点

【資料】

「むなかた電子博物館」の評価と課題

上田めぐみ

1.はじめに

2010年度は「むなかた電子博物館」にとって大きな意味をもつ年となった。1つ目は、九州ウェブサイト大賞における優秀賞の受賞。2つ目は、宗像市で行っている事業を対象とした「事業仕分け」において、「市（現行どおり）」の判定を受けたことだ。どちらも外部評価であり、外部から一定の評価をいただくことができた。

今まで、外部からの評価を得る機会はほとんどなく、関係者の試行錯誤で改善・充実を図っていた。そのため、この2つの外部評価は、関係者一同にとって大きな力となるものであり、今までの活動が報われた結果となった。

ただ、もちろんこの結果で満足してしまってはいけない。今後も、「むなかた」の魅力を発信し続け、教育・観光・世界遺産登録活動などに資するよう、常に向上していくことが必要である。

2.九州ウェブサイト大賞と「むなかた電子博物館」

九州ウェブサイト大賞は、「地域情報の発信とICTの利活用を促進し、地域経済の活性化を図ることを目的として2006年度から開催し、情報発信により地域に貢献し、優れた実績をあげているウェブサイトを表彰するもの」（※１）である。

「むなかた電子博物館」は2006年度、2009年度、2010年度の3回、同大賞に応募した。残念ながら過去２回の応募では入賞できなかったが、2010年、教育（一般）部門において、念願の優秀賞を得た。応募総数83サイト。そのうち教育部門は27サイトの応募があった。郷土「むなかた」について歴史・文化・自然と広く公開し、地域の情報発信、観光等に資することから、地域に貢献しており、また、市民ボランティアを中心とした企画・運営を行っていることが評価されたものと思われる。なによりも市民ボランティアの郷土「むなかた」への熱い思いが、今回の受賞につながったと実感している。

3.事業仕分けと「むなかた電子博物館」

2009年8月30日、政権交代により民主党政権が誕生した。その1つの目玉である事業仕分けは、「国家予算の見直しにおいて、国民への透明性を確保しながら、予算執行の現場の実態を踏まえて、そもそも事業が必要か否かを判断し、財源の捻出を図るとともに、政策、制度、組織等について今後の課題を摘出する」（※２）事を目的に、公益法人、財団法人等の事業が次々と仕分けされている。

2011年1月15日、宗像市では初の試みとなる外部評価（事業仕分け）が行われた。内部の

視点では気づかない効率性や有効性向上に向けた改善点の指摘、提案を受けることを目的とし、宗像市の全事業の中から16事業が仕分けの対象となり、そのうちの１つがこの「むなかた電子博物館事業」だった。

初の試みであったため、どのような議論が飛び交うのか、どのような評価が出るのか予想もつかなかったが、結果は「市（現行どおり）」の判定だった。この判定は、現行どおり市が事業を実施すべきであるという判定である。「市（現行どおり）」の判定を受けたが、全て今まで通りでよいということではない。また判定に至るまで様々な意見が出された。それらは、「博物館という現実的な展示施設を作らずにウェブ上でこれを実現したことはすばらしい。全国の手本になって欲しい。」「インターネットなどを利用した博物館面白い発想」などであるが、一方で「目的を具体化すべき」「動画コンテンツの充実が必要」「学校教育での活用の推進」「一般住民への周知徹底」など課題も出された。

4.「むなかた電子博物館」の現状と課題

３でふれたとおり、「むなかた電子博物館」にはいくつかの課題がある。その中で下記に3つあげる。

4-1.認知度が低い

1つ目は、「むなかた電子博物館」の認知度が低いことである。小・中学生を始め、宗像市民の中でも「むなかた電子博物館」を知っている人が少ないという現状がある。

アクセス数をみると、２０１０年の年間件数は、２６万件を超え、２００９年の年間件数を５万４千件上回る結果となっており、年々伸びてきている。しかし、事業仕分けの際もご指摘いただいたが、内容の割にアクセス数が少ない。

今まで「北斗の水くみ写真展」などのイベントの際、市広報紙や市公式ホームページなどで周知、また、遺跡の案内チラシなどに「むなかた電子博物館」の紹介（URLを掲載するなど）を掲載するなどしていたが、周知徹底としては不十分であったと考える。

また、学校現場での利用率も低いと聞いている。カリキュラムの問題、パソコン教室の利用が困難等の理由により、活用できていないという声を聞いた。ただ、海の中道マリンワールド館長、高田様との座談会の中でも話題となったが、ただ使ってくださいではだめ。「この単元のこの場所でこういう風に電子博物館を使うことができます」という風に、こちらから道筋を提示することで、学校現場での利用普及につながるとのお話をいただき、まさにその通りだと思った。「むなかた電子博物館」は、郷土「むなかた」を学ぶためには絶好の教材であると自負しているため、教育現場での利用普及に努めるためにも、モデルカリキュラムの作成等を行い、提示する必要があると考えている。

4-2.双方向性の確保

2つ目は、学芸員が不在であるということである。一般の博物館は、博物館法により学芸員を置くことが必須となっており、展示物に関して詳しい説明を行なうことができる人材がいる。しかし、「むなかた電子博物館」は、市民ボランティアの中にそれぞれの分野に詳しい方もいらっしゃるが、学芸員が不在であるため、来館者の質問に対して、迅速な回答ができないことが現状である。今後は有識者や様々な分野に詳しい市民で構成するネットワークづくりを行い、質問への回答など双方向性を強化したいと考えている。

4-3.展示更新時間の短縮

3つ目は、記事の掲載に時間がかかることである。現在は、委託業者及び事務局がページの作成・更新・変更を行なっているため、チェック等に時間がかかり、掲載までにかなりの時間を要していた。それを改善すべく、ID／PWを付与された者がページを作成・更新・変更を行なうことができるCMSを導入することとしている。これにより、記事の掲載が早くなり、旬の情報を即時掲載することができるようになる。

5.「むなかた電子博物館」の今後

現実の博物館が無いかわりとしてオープンした「むなかた電子博物館」。だが、2012年4月、「宗像市郷土文化学習交流施設」がオープンする。現実の博物館ができるが、「むなかた電子博物館」はその役目を終えるのではない。

現実の博物館は、展示スペースが限られる、ガラスケース越しのため詳細が見えない、一方向からしか見ることができない、実際に足を運ばなければ見ることができないなどの限界がある。同じように、電子博物館では、物の大きさなどの把握が難しい。実物の持つよさを感じることができない等の限界がある。

一方で、現実の博物館では、大きさなどの把握が容易であり、実物ならではの良さを感じることができる。同じように電子博物館は、展示スペースに制限が無いため、情報を蓄積し、いつでもどこでも、見たいときに見たい情報を得ることができる。そして、拡大したり違う角度から見るなど、電子ならではの良さがある。

今後は、どちらか一方を重視するというのではなく、互いの欠点を補いながら、互いの利点を生かし相互に補完し合うことが必要であると考える。そういう意味でも2011年度は新たに飛躍する年となるであろう。

6.2010年度（平成22年度）活動記録

2010年（平成22年）

4月1日　　「むなかた電子博物館」紀要　第２号　発行

4月19日「むなかたの野鳥たち」公開

6月1日　　第１回　北斗の水くみ写真展実行委員会会議

- 第2回　「北斗の水くみ写真展」の反省
- 第3回　「北斗の水くみ写真展」の内容、スケジュールについて

６月３日　　「ホタルの館」発　ホタル情報掲載開始。随時更新。

６月１３日　　第１回　「むなかた電子博物館」企画運営会議

- 今年度の事業計画について
- 第３回「北斗の水くみ写真展」の実施について
- 田熊石畑遺跡について
- 宗像市郷土文化学習交流施設について

７月１日～９月３０日　　「北斗の水くみ写真展」写真募集

７月１７日　　「北斗の水くみ写真展」撮影説明会　「道の駅むなかた」にて

８月６日　　遺跡発掘調査の報告書　第６１集　「概報　田熊石畑遺跡」を追加。
８月２８日　　「北斗の水くみ写真展」撮影説明会　「道の駅むなかた」にて
９月７日　　九州ウェブサイト大賞授賞式
９月２２日　　企画展【田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展～海人たちの足跡～】公開
１０月１日　　第２回　「むなかた電子博物館」企画運営会議
・ 九州ウェブサイト大賞２０１０の受賞について
・ 第３回「北斗の水くみ」写真展の経過報告について
・ 【田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展～海人たちの足跡～】について
・ 新ＣＭＳの導入について
１０月２７日　「北斗の水くみ写真展」審査委員会
１０月２８日　「北斗の水くみ写真展」審査結果発表
１１月９日　　第１回　紀要委員会
・ 座談会について
・ 内容、テーマについて
・ スケジュールについて
１２月１５日　座談会（マリンワールド海の中道　館長　高田浩二様を囲んで）

2011年（平成23年）

１月１５日　　宗像市「事業仕分け」
２月１日　　第３回　「むなかた電子博物館」企画運営会議
・ 新ＣＭＳの導入について
・ 第３回「北斗の水くみ」写真展　報告
・ 「むなかた電子博物館」紀要　第３号について
・ 赤間宿のコンテンツについて
・ 【田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展～海人たちの足跡～】について
・ 事業仕分けの概要について
２月１７日　　第２回　紀要委員会
・ 目次について
・ スケジュールについて
３月１０日　　第３回　紀要委員会
・原稿の確認

7.「むなかた電子博物館」市民パートナー

平成22年4月～平成23年３月

氏名	（所属など）
石井　忠	（古賀市立歴史資料館　館長）
石黒　正紀	（福岡教育大学　名誉教授）
伊津　信之介	（東海大学福岡短期大学　教授）
岡部　海都	（日本野鳥の会福岡支部　会員）

鎌田　隆徳　　（自由ヶ丘南小学校　教頭）
河田　昭　　（市民公募）
中村　茂徳　　（西南女学院大学　講師）
平井　正則　　（福岡教育大学　名誉教授）
平松　秋子　　（宗像歴史を学ぼう会メンバー）
堀内　伸太郎　（市民公募）
吉田　義男　　（元宗像市史編纂室　室長）
清水　比呂之　（市民活動推進課）
白木　英敏　　（市民活動推進課）
許斐　知加　　（教育政策課）
占部　晃　　（情報政策課）
森田　誓夫　　（情報政策課）
上田　めぐみ　（情報政策課）

※１
総務省九州総合通信局ホームページより引用。（2011年2月13日参照）
http://www.soumu.go.jp/soutsu/kyushu/ai/prize.html
※２
ウィキペディア「事業仕分け（行政刷新会議）」より引用。（2011年2月13日参照）
http://ja.wikipedia.org/

編 集 後 記

「むなかた電子博物館」紀要編集長　伊津信之介

2011年３月11日は、日本だけでなく世界が衝撃を受けた。まさか経済と技術水準がもっとも優れた国の一つである日本で、地震・津波によって２万人を超える方が亡くなったり、行方不明になる事態に至るとは考えなかった。加えてチェルノブイリ原発事故から25年目を４月26日に迎えようとしていた矢先の原発事故は、これ以降日本社会に大きな影響を及ぼしている。「むなかた電子博物館」紀要３号の編集は、編者が所属する学会の活動に力を削がれ編集の集中力が著しく低下した。

せっかく早くから原稿をお寄せいただいた執筆者のみなさんにまずお詫び申し上げる。また「むなかた電子博物館」への掲載と印刷が遅れたことにより３号が手元に届くのが遅れた重ねてお詫びする。

さて、東日本大震災と福島原発事故によって「現実社会」が崩壊した。急速に復興活動が行われることを期待したい。そのような中でインターネットによる情報通信はさまざまなボランティア活動によって復旧し、復興活動の力になりつつある。例えば日本におけるインターネットのパイオニア集団WIDEプロジェクトは、「震災復興インターネット」の活動をインターネットの研究開発に参加する大学、企業、行政関係者の有志をはじめ、被災復興活動にインターネットを利用することに賛同する者の志を受けて活動している。避難所や被災地の診療所などへのインターネット接続性が通常の方法では困難な場合、それを無線インターネットなどを使うことによりインターネットの利用を可能にし、インターネットを用いた被災復興の活動が適切に開始されることを現場・現地と協力して確立し、それがその地で継続することを目的に活動している。

さてこのような震災や原発事故の現地では、今の所「生活」が最優先となっていて、まだまだ文化にまで関心が及ばないのが現状である。しかし夥しい文化資産が失われたり、破壊されているのは現実である。「むなかた電子博物館」は現実空間上の文化資産をいかにインターネットのWWWを使って活用するかにその調査研究の多くの力を注いできた。マリンワールド海の中道の高田浩二館長には座談会と論文を通して水族館とＩＣＴの関係を提示していただいた。また北部九州中近世城郭研究会の藤野正人氏にはむなかた地域における多数の中世城郭の存在を現地調査の成果として示していただいた。その他の熱意ある執筆者の方々の寄稿によって「むなかた電子博物館」紀要第３号は150ページを超えるボリュームとなった。

最後に宗像市郷土文化学習交流施設の開館が、ＩＣＴによる「むなかた電子博物館」を現実空間から支える施設となることを願って編集後記とする。

むなかた電子博物館紀要
Bulletin of the Munakata Digital Museum

執筆者一覧（掲載順）

高田　浩二（海の中道マリンワールド　館長）

石井　忠（古賀市歴史資料館　館長）

藤野　正人（北部九州中近世城郭研究会）

平井　正則（福岡教育大学名誉教授）

鎌田　隆徳（宗像市立自由ヶ丘南小学校　教頭）

白木　英敏（宗像市　郷土文化学習交流室）

清水　比呂之（宗像市　郷土文化学習交流室）

平松　秋子（宗像歴史を学ぼう会）

上田　めぐみ（宗像市　情報政策課）

むなかた電子博物館紀要委員会　委員（順不同）

平井　正則（福岡教育大学名誉教授・紀要委員会委員長）

伊津　信之介（東海大学福岡短期大学教授・紀要委員会編集長）

平松　秋子（宗像歴史を学ぼう会）

鎌田　隆徳（宗像市立自由ヶ丘南小学校教頭）

中村　茂徳（西南女学院大学講師）

森田　誓夫（宗像市　情報政策課）

上田　めぐみ（宗像市　情報政策課）

むなかた電子博物館紀要　第３号
発行日：2011年4月1日
編 集：むなかた電子博物館紀要委員会
発行所：宗像市
〒811-3492　福岡県宗像市東郷1-1-1
Tel：0940-36-5444　Fax：0940-34-2156
むなかた電子博物館URL　http://d-munahaku.com

ISSN 2185-8659